

(二)脂肪  $0.77 \times 9.3 = 7.161$  カロリイが生じ

(三)含水炭素  $76.79 \times 4.1 = 314.839$  カロリイが生じ

合計三百五十三・六四二カロリイの熱が生ずる故・ $353 \cdot 100 = 1850 : x (x = 500)$  約五百瓦の白米を攝取すれば一日の體温を保持し得るといふ理窟になるのである

であるから合理的食物としては分析表中蛋白成分・脂肪成分及び含水炭素成分の多いものを調味して作つたものを撰擇せねばならぬのである

此の理窟から言へば馬肉も牛肉も養價は殆んど同等であるから値段の安い馬肉を食するを合理的といひ・松茸の如き養價の低きものに高い値段の金を拂ふて食事に賞味するが如きは非合理的食餌と稱すべきものである・のみならず左様な非合理的の食餌を常食する生活は之れを贅澤生活 *Lexustleben* と稱し人類の罪人と稱してよろしいのである

蛋白質	白米	大麥	小麥粉	パン	大豆	豆腐	大根
脂肪	七・七二	九・六六	一〇・二一	七・〇六	三六・七一	六・五五	〇・七三
含水炭素	〇・七七	一・九三	〇・九四	〇・四六	一七・四二	二・九五	〇・〇一
	七六・七九	六六・九九	七四・七一	五六・五八	二四・五三	一・〇五	三・七〇

蛋白質	人參	松茸	赤味噌	餅米	牛肉	馬肉	マグロ
脂肪	一・二五	三・七三	一〇・〇三	一〇・一五	二〇・九六	二一・七一	一五・七九
含水炭素	〇・三五	〇・七六	—	〇・四五	五・四一	二・五五	一〇・六四
	七・四一	一一・七八	二四・一二	八九・〇六	〇・四六	〇・四六	—
蛋白質	イワシ	タヒ					
脂肪	一一・三九	二〇・二八					
含水炭素	六・七二	〇・七五					

つらつら他の動物の生活を見るに・其の生活はすべて規律正しく出來てゐる・ではないか?? 交尾期は一定して時期以外には決して交尾せぬではないか?? 而して其の食するものも概して一定してゐるではないか?? 蝶や蜂は花蜜の外に何ものをも食せざるにあらずや・馬や牛は草や藁乃至豆や豆腐粕ぐらゐのもので獸肉や魚肉は決して食せざるも尙立派な體格を維持してゐるではないか?? 然るに人間の胃袋は砂やガラスの粉こそは容れないが赤痢なんて病氣に罹つた場合には白陶土・滑石なんていふ泥まで胃腸に送り込むのである・吾々の理想的學理を以て推論するときは・人間の疾病なる



ものはすべて生活の不規律に因て現はれ来るものとなすのである。米などでも若しも白らげずして食するたらんには我輩は脚氣とかペリペリなんて病氣は斷じて現はれないものと信じてゐるのである。否・否・若しも白米をやめて味の不味(マズ)い然も蛋白質に富んでゐる處の大麥を煮て食ふてゐたならば恐らくは肺病でも癩病でも馬鹿でも氣違ひでもそんな種類の病氣は一切此の人類世界に跡を絶つだらうと思ふのである言ひかゆれば、人間の病氣は不規律な生活に原因し、生活難に脅かされるなんてことは生活のために努力しないから現はれた罪罰といふてよろしいのである

- ここに於て我輩は左の箴言を讀者諸君に贈る曰く
- (一) 慾情を整理せよ
  - (二) 毎日の勞働を規律正しくなせ
  - (三) 合理的に且成るべく値の安いもので生活せよ
  - (四) 酒や煙草は害あり絶対に中止せよ
  - (五) 性慾を努力して調整せよ
  - (六) 衣服でも食ひ物でもすべて合理的に調理すべし
  - (七) 夜は休んで日光のある間は加速度的に活動せよ
  - (八) 雀と同じく晝は遠い所に出かけて食を求むべし

- (九) 夫婦は毎夜一室に在つて未來の世の變遷を考究すべし
- (十) 以上の注意を守り實行すれば其の人は必ず幸福を受くる

### 〔う〕 運不運の話

運は運命 Das Schicksal, Fate (engl.) Fatum (lateinisch) の運は天然自然に備つた成行(ナリユキ)のことである。この運命は聖人孔子も

不知命・無以爲君子也(堯曰篇)  
命を知らざれば以て君子と爲す無きなり  
と申され・中庸にも

天命之謂性・率性之謂道・脩道之謂教

天の命はこれを性といひ・性に率ふはこれを道といひ・道を脩むるはこれを教えといふ。と筆頭に書いてある程な・重要な觀念であるけれど・これを理會することは仲仲むつかしいことである。昔から

- (一) 運天勝負(運と天と勝負とは・人力にて左右しがたし)
- (二) 運符天符(運は天より人人に附與するもので如何とも爲しがたし)



(三)運は廻りもの(吉凶禍福は變轉・常なきもの)  
などと言はれてゐる・のみならず

人の一生は運根鈍で支配されてゐる

などと言はれてゐるが・とにかく娑婆世界の出來事は・不思議なもので悪人・必ずしも衰へず善人・必ずしも榮えぬことは間違ひのない談議であり・殊に人でも畜類でも乃至蟲虻(ムシケラ)でも・其の壽命に至つては全く不思議なもので・いつ切れるか判らぬものである・我輩の義姉は・朝・起きて・お早よう!! 今日も亦好い天氣だらう・といふや忽ち腦溢血を起し・我輩が脈を見ながら・醫者を呼ばせたが・其の醫者の來るを待たず・五分間ばかりで絶脈したのであり・又吾輩の學校に教鞭を執つた藥學士社家間(シヤカマ)房吉君は教職員懇親會の席上・雜談中・吾輩の膝に依りかかつたから・どうしたのだえ・といひながら・顔を見たら・もう肉色を失ふたのである(謹んで姉さんと社家間君との在天の靈に敬意を捧ぐ)こんな具合で實際壽命は不思議なものである・吾輩曾て或る夏の日「蠅叩き」で蠅を叩きながら

あまたゐる・蠅のなかでも・ふと打たれ・ころりと死ぬる・運もありけり

といふ・歌を作つたこともあるが・人間の壽命は・ころりと死ぬる蠅の如きものに相違ない・樞密院議長の子爵濱尾新閣下は退廳歸邸後・邸内の落葉・枯葉など集め・其れを燃やしてゐられしに・過つてか・腦溢血かで・其の火の中へころげ込み・大火傷に罹り落命されたのである・が・こんな例は幾らもある・濱

尾閣下の落命後間(マ)もなく行政裁判所長の山脇玄端博士は・赤坂見附で走り來れる小僧の自轉車に衝突され・地上に倒れ・其れが原因で其の夜の内に落命されたのである・蓋し人命の不思議なことが不思議であるばかりでなく・其の外に不思議なことは幾らもある・言ひかゆれば人事百般・すべて不思議と稱すべきである・學校などでも・此の學生は勉強家で將來有望ぢやと思ふてゐると其の學生が・急性肺炎で・ころりと死んでゆくことがあるに反し・出來のわるい學生が・急性肺炎に罹り・仲間の者から餘り多く同情もされないにも拘はらず・快復して助つたと言はれる様なことも無いことはない・考いて見れば實際娑婆世界のことは・すべて一寸先きは闇みで・どうなることやら・少しも豫想は出來ぬのである

茲に於て古人も已に

人間界の出來事は皆前以て定められた路ゆきを辿るもので人力では如何ともすることの出來ない

い事になつてゐる

といふ考へを起したので・個様な考へをフアタリスムウス Fatalismus即ち運命論とか宿命説とか稱するので哲學上の一派ともなつたのである・即ち人の賢愚を始めとし・其の他窮達貧富・治亂興廢・總て運命に由らざるものは無いと説く所の學説が出來たのであり・そしてイスラム教徒やエビキユル派の學徒などは皆個様な考へを持ってゐるとのことである



殊に人の壽命に就てはギリシヤに面白い物語りがあつたと・いふのは個様なことである・曰く

天地の中に三つの女神(メガミ)があつて其の神が人の壽命を司つてゐるのである・即ちクロトオ神 Klotho は壽命の紐(玉の緒) Lebensfaden を織り成す神でありラヘジス神 Lachesis は其の紐の長さを制裁する神であり・そして第三のアトロポス神 Atropos は此の命の紐を不時に斷ち截るべき権力を持つてゐる神で・ラヘジス神の恩恵に浴したものは長命であり・アトロポス神の神威に逆ふたものは夭折するのである云云

蓋しこんな傳説は採るに足らぬものではあるけれど・厭世哲學者シヨペンハッア Schopenhauer なども此の運命論を説き且つ信じた人である・同氏の著書パレルガ Parerga と題した本には其の所論が能く書いてあるといふことであるが・又これに反對した説を盛んに説く人もある・例へば詩人シルレルや其の他 Müller(1774-1829) Grillparzer (1791-1872) Houwald (1778-1945) 殊にプラテン Platen (1796-1835) 等がそれであるといふことぢや・が・然しどんな人でも浮世の風波にもまれてみると・其の人の脳裡には必ず天地の間に何者かがあつて此の浮世を支配し・そして此の支配力は吾々の意力や智力では・とてもどうすることも出来ぬものだといふ・一種の信仰心を起さぬことはないようであるけれど個様な信仰心を持つことは一面に於ては意志必然論者となり遂にはアキラメ主義となり厭世主義となるものであるが又一面には毒・食はば皿までといふような・暴れ馬の如き・向ふ見ずな勇者とな

るの弊を招致するものであるから自ら戒心せねばならぬのである

然し吾輩のビブラリオン説・一名震原子論から論ずれば

一切衆生の運命は各衆生の自己の業力に因て招致するもので其の現在の運命は過去の業因の結果であり・來世の運命は今世の業因に由りて左右せらるるものである

と説くのであるから・従つて我々は

無因無果・有因有果

と説くのである・或る佛書にも

業識者・即根本無明之惑也・謂本覺心源・初無動相・以不覺故・動爲業識

とかいてある・此文の所謂の本覺の心源が即ち我輩の謂ふ所のビブラリオン Das Vibration であり・此のビブラリオンの震動相が即ち所謂の業識で靈魂が男性の生殖器に止宿して精蟲を形成する意志なのである

此の故に吾々の現在の運命は蓋しビブラリオンの抱持してゐる業識即ち精蟲の意志に由て豫定されてゐるものと謂ふべきなのである・言ひかゆれば生物は幾度も其の生死を繰りかへすもので其の運命は自ら作り自ら爲すもので・自業自得・決して他の掣肘を受て居るものでなく全く自由なものであるといふことになるのである・名づけて意志自由説といふ・經に曰く



汝負我命・我還汝債・經百千劫・常在生死・汝愛我心・我憐汝色・經百千劫・常在纏縛・惟殺盜婬・三爲根本・墮業隨報・無有窮盡・故名業果相續・云云

吾々の運命論は此の如きものであるが・とにかく運命といふものは不思議なもので折角苦辛に苦辛を重ねて・一家庭を造り揚げたかと思ふは束の間・忽ち彼(ア)の世の人となつた人もあれば・同舟の人が残らず死んだのに或一人が板子(イタゴ)につかまつて助けられたこともある・嗚呼・不思議なものは運命なるかな!!!

### 〔あ〕遺産の話

植物の種子 Der Same (lat. semen) といふものは・雄蕊と雌蕊との抱合によりて出来たもので此の種子の内には未來の植物の幼兒即ち胚 Embryo といふものが納れられてゐるが其の胚の周圍には其の胚の發生する時に榮養料となるべき乳(胚乳)が保有されてゐるから・種子が縁あつて適當な水分と温度と日光の當る處に落着すれば胚の中に存在する靈魂の活動が起り發芽して生長を始め・胚乳を食ひ盡す頃には・幼兒は相當の根も出し葉も出して地中の滋養分を攝取し又空氣中から必要な炭酸瓦斯を取入れ自力で身體を増殖し遂には大きな樹木ともなり草本ともなり・そして適當な頃には花も咲かせ種子をも澤山に造るのである

鳥類の種子は種子とは言はずして卵子(タマゴ)といふのであるが此の卵子の構造も大體は植物の種子に似てゐるので・之れに適當の溫度を一定時間供給すれば卵子内の鳥の靈魂は活動を始め先づ卵黄や卵白を榮養料として攝取し遂に鳥の幼兒となり殻を破つて・此の世に出るが・其の始めは自養自活の知慧に乏しさが故暫くの間は親鳥が食餌を運び與えるが自活し得るに至れば親鳥の世話から離れ自力で生活し一定の體力が出来れば相手を求めて交尾して親鳥の行ふた事と同じ事を爲して種族の相續を謀るのである

吾々人間は仁義五常の道を心得て且つ高尚な知慧を持つ點から觀察すれば萬物の靈長に相違ないが然し發生の道理は植物や動物に異ならぬのであるが・我々が不思議に思ふのは十七八歳となり徴兵検査をも受ける程の立派な體格となつたものが尙且つ親の世話になつて獨立生活を爲さざるのは如何なる理由かといふことである・斯くては萬物の靈長たる尊稱も・名實相副はなくなるではないか?? といひたいのである

然も親の溜めた遺留財産を兄弟姉妹で争奪訴訟を演ずるに至りては沙汰の限りぢやないか?? 個様な理窟に立脚して意見を述べるとすれば我輩は

凡そ人の子たるものは・其の體格健全にして滿二十歳に到達するや必ず獨立自活をなすべきものなり



といふ法律を設けて・親の脛(スネ)や腰(コシ)を當てにする意氣地なしを人類の社會から排斥したいと思ふてゐるのである・敢て世の識者に問ふ

茲に於て遺産なるものは・幼兒や未成年者の榮養料には之れを供給し得るも・二十歳以上の年齢となつて躰格健全なるものには・供給しない様な習俗を養成しようと思ふのである・が・此の如き意見を始めて聞く人は或は異様に思ふかも知れぬにより・吾輩は家族制度を持って居らぬ西洋人の思想を左に紹介して吾輩の意見の獨斷でないことを證明して見せようと思ふのである

昔・羅馬に狂言詩人 Mimentichter として評判の高かりし人がゐた・其の名は Publius Syrus と云ひ・西紀前四十三年頃羅馬の茶番狂言座で名聲を博した人である此の人の詩集は千八百七十七年獨逸ライプチヒ府で出版されたもので W. Meyer, Die Sammlungen der Spruchverse des Publius と云ふてゐるが・此の狂言詩人の言ふた言葉に

Das Weinen des Erben ist ein maskiertes Lachen. (Uebers. v. Friedr.)

相續人の涕泣は假面した嬉笑である

といふのがあるといふことである・金持の息子が親の死に際しての愁嘆は此の類であらう

此のプブリリウスと殆んど同時代に羅馬に名高い詩人がゐた名を Quintus Horatius Flaccus (geb. 8. Dez. 65 v. Chr., gest. 27. Nov. 8 v. Chr.) と稱した・此のホラチウスの言葉に

Wer aufsparet dem Erben zu lieb und allzu genau kargt, / Wohnet dem Tollen nicht fern.

(Uebers. v. Voss)

相續人を喜ばすために儉約し且つ餘りに吝嗇に過ぎた人は其住居(スマイ)が馬鹿ものに近い

といふのがあるそうだ・實際子供や相續人のことばかりを考へて儉約したり吝嗇に陥つたりするのは痴人に相違ないであらう

獨逸の詩人 ロガウも亦

Wann Erben reicher Leute die Augen wässrig machen, / Sind solcher Leute Thränen nur Thränen von dem Lachen. Friedr. von Logau.

富める人の相續人が眼を水つぼくした時・個様な人の涙は唯嬉笑の涙である

といふたのである・以て西洋人の遺産に對する思想を想像するがよい・のみならず我が古賀精里先生も已に

金を子孫に遺す・子孫未だ必ずしも能く守らず

と申しておられたのである・のみならず先生が

陰徳を冥冥の中に積んで子孫長久の計をなすに如かず

と申しておられた通り西洋人も亦左様に申してゐるのである曰く



Virtue and a trade are the best inheritance for children. Engl.

徳行と職業とは我が子供に残す最良の遺産である(村山譯)

茲に於て吾輩は子孫に資産を貽すことの極めて愚行なることを愈々深く覺つたのであるが然らば死んで残りたる財産は如何に處分すべきかといふに・吾輩の意見では國家に納入して同胞の養老・育兒・疾病救療の如き慈善事業に充當するを至當し・若し餘りあらば教育事業を經營する財團法人に寄附するを適當の處置と認めてゐるのである

〔の〕 農業の話

赤穂義士の本所松阪町打入の事件は元祿十五年十二月のことであるから昭和十一年の今日から二百三十四年前のことである其の事件の二年前に水戸黄門光圀卿と申された偉人が薨去されたが・此の偉人のことは小學校の子供でも知つてゐることなるが故・詳しく言ふ必要はないが・明治維新の鴻業完成の一大原因となつたとも言はれてゐる大日本史といふものが此の偉人の手によりて成つたものだといふことは忘れてならぬことである・年六十歳の頃・久慈郡太田の西山に別墅を經營して・それに起居されて・遂に七十三歳で其の西山莊で亡(ナク)なられたのである・西曆の丁度千七百年であるから二百三十六年前のことである・此の光圀卿は「領地内のお百姓が勞作して呉れるので命(イノチ)が繋がれてゐる

のである・君は舟で臣は水だ水よく舟を浮べ又よく舟を覆へすものだ・家來が大切だ百姓が大切だ・目分等はお百姓の作つて呉れる米麥によりて今日を安すく送り得るのであるお百姓には感謝の誠(マコト)を捧げるが本當の人情といふものである」……といふ意見から・陶工に命じお百姓に似せた人形を造らせ・其の所謂る農人形を三度三度の食膳に必ず安置せしめ・其の人形に一箸(ヒトハシ)の御飯(ゴハン)を供えて感謝の辭を口内で唱えた後でなければ飲食物を一切口に入れられなかつたといふことである・水戸の梅林に遊んで梅の花でも賞して見給へ其の邊の茶店(チャミセ)で今でも農人形が賣られてゐる光圀卿の個様なお心掛けが即ち偉人の偉人たる所以で孔子の所謂る仁でも釋迦の所謂る大慈悲心でもすべて此の農人形に感謝する心もちに一致するので・此の感謝の誠意さへあれば其の人は立派な人なのである・が大抵の人には此の誠意が缺けてゐるのみならず・金さへあれば・それで萬事が足ると思ひ・農民を尊敬せぬのみか・寧ろ居食ひの學者などを尊敬渴仰するのは上下轉倒の思想といふべきである・元來日本人は手足に泥土を附けることを恥辱の如くに思ふてゐる様だが・是れが抑も間違ひの始めなのである・人間はすべて働らいて生活すべきもので・他人の勞力に依頼すべきものではない・此の意義に基き吾輩は莫大に廣き地面を或る一國が占領したり或る一人が買収する様なことは天理に副はぬことだと思ふてゐるのである

それはそれ兎もかく人間は他の生物の如く自力自活でなければならぬのである・そして物物交換が自



然の原則である。従つて人間は農業なり漁業なり・必ず手足を働らかして生活せねばならぬのである。所で漁業も大切なことであるが・人間の生命は虎や狼の如く蛋白質ばかりでは維持することが出来ぬ。のみならず・寧ろ植物性食物によりて完全に生命を維持し得るが故・人間は農業林業で生活することにせんければならぬのである。此の故に帝範農務篇にも

農爲政本(農を政(治の)本となす)

とかいてあり又一般に

國家の基礎は農事に在り

とも言はれてゐるのであり・そしてカアル・ユリウス・ウエベルが

Ackerbau und Viehzucht sind die zwei Brüste, die den Staat sicherer säugen, als die Gold- und Silberminen Perus. Karl. Jul. Weber.

といふた如く

田畑の耕作と家畜の飼育とは伯露の金銀坑よりも・より確實に國家を哺育する二つの乳房である

に相違ないのみならず・アウエルバッハは

Der Ackerbau ist die Wurzel aller Bildung in der Welt. Berth. Auerbach. Schwarzwälder

Dorigesch.

農作は此の世に於ける・あらゆる文化の根本である

といひ・ダニエル・ウエブスタも

Farmers are the founders of civilization.

農夫は文明の建設者なり

といひ・そして古聖シセロも已に

Of all pursuits from which profit accrues, nothing is superior to agriculture, nothing more productive, nothing more enjoyable, nothing more worthy of a free man.

利得を生ずる・あらゆる職業の中・農業に勝るものなく・これより生産的なるはなく・これより樂

しきはなく・又自由人にとりて・これより適當なものはない

と申したといふことである・そして俚諺にも

Ackerwerk, Wackerwerk.

田畑の作業は正直な作業

といふのががある。蓋し商人といふものは・勞力する所なく・唯智慧を巧妙に振廻はして物品交易の上で利益を獲得するものであるから・自然其の事業の上に詐偽が手傳ひ・不正が行はれ易いのである。農業



は之れに反し・勞力を主として天候に依頼するものであるから・農夫の心は・すべて純真無垢で詐偽や欺瞞に渉る様な處は毛頭だも持つて居らぬのである・新約聖書雅各書(使徒ヤコブの書)の第五章第七節にも

視よ農夫・地の貴き産を得を望みて前と後との雨を得まで久く忍で之を待り・爾曹(ナンヂラ)も忍べ爾曹の心を堅うせよ

とかいてある・實際農夫といふものは土地の貴い果實や根莖を期待しつつつ辛苦を重ねて勞働するものである・従つて農家には

(一)朝日さす・夕日輝く・其の下に・金千兩・漆千杯

(二)朝日さす・夕日輝く・此の下に・金千枚・瓦萬枚

なんていふ俚諺さへも傳はつて居り・そして唐代の三俊の一人たる李・紳・字は公垂と呼ばれた翰林學士は農夫の苦勞を左の如く歌つたのである曰く

鋤禾日當午・汗滴禾下土

誰知盤中飧(音ソン・夕食也)・粒粒皆辛苦

禾(イネ・タナツモノ)を鋤(スキ起シ)て日は(正)午に當る・汗(アセ)は(流れて)禾下の土に滴

(シタタ)る・誰れか知るや・盤(茶碗)の中の飧(ゆうめし)・一粒一粒・皆辛苦(の結晶)なるを

農夫の勞苦は全く此の詩の通りである・然るに世間の人はどうか??此の農夫の辛苦を知悉し感謝して三度の飯を食ふもの幾人かある・勿躰ない話(ハナシ)ぢやないか??昔しから

米一粒・汗一粒 とも

農民の骨・萬民の肉

とも言はれてゐる・此の辛苦を思はぬものは抑も人(ヒト)ではあるまい・古人の隨筆本の中にも

民ぐさのことしげき・見るもなかなかむづかし・かやがのきばに・雨も嵐もふせぎかね・わがこもだれのうち・烟にふすぼり・うちぬるも・うしうまに床をならべ・妻などは・蓬のかしら・かきみだせる・ただ聲のみぞ・男のこならぬこの・おほきなる・ちひさき・うゑたり・さむしなどいふ聲・いとかしまし・おほしたてたるたなつものも・おほやけにいたしつくせば・その味をしることなし・さぬあるところも・糸の色・いやうるはしく・織なしても・價賤しくして・上へめされ・あき人へうるも・其の幾分をか・上へささくれば・残るもの・幾ばくぞ・さておのれはつづれをきたり・さるうへにこごえたり・このゑたち・かしの公事といふこと・さへくははれば・つひにかしらの露をのみ・わがものとして・おもひ出もなき世をわたるめり(文學博士芳賀矢一編詞藻類纂六四八頁參看)

とかいてあるよしである・吾々は箸とる毎に農夫の此の苦勞を思はねばならぬと同時に學生等は兩親



様血族等の勞苦と心勞とをもよくよく思ひめぐらして感謝せねばならぬ  
 抑も米や麥は・日本全國で幾何産するやといふに・少し古い統計だが米は約六千二百萬石大麥は約八百五十萬石で其の外に米が外國から一千三百五十萬石程輸入してゐるから・米が約七千五百萬石程消費されてゐることになるが・然らば疊二枚即ち一坪の田地や畑地から米や麥がどれ程取れるかといふに・米は僅かに五合・麥は僅かに四合五勺程しか取れぬのであり・そして兵士の如き身體の大きな強健な勞働の劇しい人は一日に白米六合を食ひ盡さねばならぬのであるから米麥の需要は仲仲大きなものであるにも拘はず此の米麥を産出する農夫の辛勞も亦過大であるから吾々は更に更に農夫の辛勞に感謝の誠を捧げねばならぬのである・のみならず・田園生活といふものは古聖シセロの言ふた通り自由人に最も適當した生活で趣味の津津たるものがあるばかりでなく・詩人ラスキンが

農民は教養ある者よりも國民性の色彩濃厚なり

と言ふた通り・なつかしい性質を失はぬのである・都會人といふものは概して輕薄で信用の出來ないものだが田園生活は溫厚で悠長で風雅に富んだ生活である古人ホラチウスも已に

Glückselig jener, der, entfernt dem Weltgeschäft,/Sein Vaterfeld mit eignen Shieren wohl durchpflügt.

浮世の業務から遠ざかつて・自分所有の牡牛を以て・父祖の田地を善く耕鋤する・其の人は多幸

なり(ヴォッス譯の重譯)

といふたのである・左に宋の陸放翁の初夏閑居の詩一首を掲げて以て田園生活の趣味多きを示めすであらう曰く

初夏閑居

(宋)陸放翁

門巷蕭蕭日正長 方牀曲几傲羲皇  
 輕風忽起楊花鬧 清露初晞藥草香  
 對奕兩奩飛黑白 繙書千卷雜朱黃  
 穿簾語燕能從我 分爾湖邊一半涼

同

日長巷陌晒絲香 雨霽郊原割麥忙  
 小擔過門背冷粉 微風解籜看新篁  
 傍籬隣婦收魚符 叩戶村醫送藥方  
 欲到湖邊還懶動 悠然扶杖立斜陽

少々難解かも知れんが能く讀んで味つて見給へ・のんびりした處が想像されるのである・前詩の「輕風忽ら起りて楊花・鬧(サワガ)しく清露初めて晞(カワ)さて藥草・香(カンバ)し」なんて句や後詩の「籬



(カキ)に傍ふた隣の婦(人)が魚笥(ヤナ)を收め(片つけ)戸を叩く村醫は藥方を送る「なんて句は全く好い句にあらずや

### 〔お〕 恩義 の 話

佛典に本生心地觀經といふものがある其のお經の中に四恩といふて吾々の受けてゐる恩義の四つの由來が説かれてある。これを佛説四恩といふが其の第一は父母の恩であり其の第二は天子様の御恩であり。そして其の第三が四海同胞の恩であり第四が天地萬有の恩であるのである。佛學三書と言はれてゐる其の三書の中の釋氏要覽といふ本は宋代の天禧三年(西曆一〇一九年)錢塘の沙門釋道誠の集めたもので其の中卷恩孝篇には四恩のことが詳細に記載されてあるから。それに就て研究するがよからう。が。とにかく。吾々は畜類とは形體心理の上に於て已に全然違ふてゐるから畜類の如く罔然として父母の恩も天地の恩も知らぬといふて濟しては居られぬ筈である。

抑も吾々是一個の微細な震原子に過ぎぬのである此震原子は無始無終のもので永遠無窮に天地の間に存在してゐるものである。是れを靈魂不滅と稱するのである。此の靈魂が父の生殖器に止宿した。其れが此の娑婆に出世する第一歩であり其の時の意志が自由の意志で強迫されて止宿したのではない。そして其の意志が即ち法律上で謂ふ所の人權なのである。吾々の此の世界に生存するのは我々の權利で

何人からも侵害されべきものでないのであるが。然し父母の慈愛によりて獨立獨行し得るに到らざるときは。自ら其の人權を行使し得るのである。是れが即ち父母に恩ある所以で此の恩を知ると知らざるとに於て人畜の區別が付くのである。

明治天皇の勅命によりて編輯された幼學綱要の開卷第一の孝行篇には

天地の間・父母無きの人無し・其初め胎を受けて生誕するより成長の後に至り・其恩愛教養の深き父母に若く者莫し能く其恩を思ひ其身を慎み其力を竭して以て之に事へ其愛敬を盡すは人たるの道なり故に孝行を以て人倫の最大義とす

とかいてある。吾々は生の由て來る所以を能く理解し。そして父母鞠育の恩を能く辨へねばならぬ。そして其の恩に報ゆべく努力するの義務たることを辨へねばならぬ。吾々が恩義といふのは此の報恩的義務のことであるのである。

佛説四恩の第二は國王の恩と言はれたもので即ち天子様の御恩のことである試みに軍隊も警察も乃至憲兵も何にも居らぬ人間社會が在つたとして。其の社會に吾々が住んでゐると考ひて見給へ。左様な社會は所謂の強食弱肉の世界で吾々の如き弱きものは一日一刻だも安心して生存することは出来ぬであらう。近い例だが滿蒙國境附近や支那山西省あたり土匪の出沒する處を想像して見給へ。生命財産の危険。思ひ半に過ぐるであらう。筆に書き現はすのも畏れ多い事であるが吾々は 聖明な有難い御治世下



に生息してゐるので・どのくらい幸福なことか・測り知れぬ程な幸福を享受してゐるのである・成る程去年の二月死んだ我輩の姉の娘の如きは衣食に窮せざるのみならず二人の小供を持って不自由なく暮らしてゆき得る身分でありながら肺結核に罹り足掛け四年間病牀に苦臥した如きは如何にも不仕合せの様には思はれるが是れは當人の前世の悪因の結果で自業自得・餘儀なき次第で所謂天をも恨みず人をも咎めざる底の事で諦(アキ)らめるより外に仕方のないことである・が・尙吾輩の知れる或る體格強健な一老人が衣食に窮してルンペン生活を送つてゐるが是れ等も亦すべて自業自得なもので御政治に缺陷でも有つて然かくなつたものではない・身を慎み力を竭して父母に報恩業を實行すれば決してルンペンに成り降らなくて済むのである・要は吾々の生活は誠に感謝に勝えぬ有難い生活なのである・及ばぬ事ながら一寸の蟲にも五分の魂・爲し得る限りの力を盡して御恩に報え奉らねばならぬ事と朝夕心配してゐるが元來魯鈍な性質・思ふことの萬分一も報え奉り得られぬのである

佛説四恩の第三は四海同胞の恩であるが此の恩は・直接には理解し難いものの如くなれど少し考いて見れば直く理解の出来るものである前節農業の話で水戸黄門光圀卿の農人形のことを繰かへして讀んで見れば能く判ることである・米一粒は汗一粒の古諺もある次第で三度の食事にも海山無量の恩を吾々は同胞から受けてゐるのである・のみならず天地雨露の恩も亦海山無量なのである是れが佛説四恩の其の第四の恩なのである・吾々は畢生の力を竭して是等の四恩に報えねばならぬ・是れが即ち吾々の

盡すべき恩義なのである蓋し恩といふ文字は口(クニガマヘ)と大と心との三字から成れるもので宇宙大圓の心といふ義である・此の大圓の心によりて吾々は今日の生活を送り同時に幸福を造り得べき仁道の大業を成し遂げ得るのであるから吾が此の五尺三寸の肉身は慥かに福田に相違ないから大事大切に維持し不謹慎や不品行や不養生で損害せぬ様心掛けねばならぬのである

前漢といへば漢の高祖が即位された年即ち西暦紀元前二〇六年から西暦紀元後八年までの年代なるが故二百有餘年續いた國である・此の漢代の末年に至り王莽(ワウマウ)といふものが天子様を廢して自分天子の位に即いて政治を執つたのである・所で或る時安・陽舜といふものを特使として先帝の太后に謁見させたのである・其の時太后は使者を御座近く呼寄せられて

汝等一族父子は是れまで漢家の恩顧を蒙り富貴たること累世然も何等報ゆる處が無いのみならず幼稚な天子を託されて然も時期を利用し勢ひに乗じ國家を奪取し恬として復た恩義を顧みないぢやないか??人にして此の如くならんか狗猪にだも若(シ)かぬではないか??汝兄弟いかでか天下を保たんや

と仰せられたといふことである・永い間俸祿を拜受して一門の繁榮を誇つてゐた其の者が主家を奪ひ取る・何たる惡漢ぞや

秦・觀・字は少游は宋代の大學博士で東坡先生と同時の人である此の人の論文中に「私恩と公義との辨」



といふものがある。其の論旨は個様である曰く

唐の白・敏中といふは詩人白樂天の従弟で宰相李・徳裕の推薦により翰林に入り學士となつたのであるが徳裕が貶せらるるに及んで敏中が宰相となつたが・推薦して呉れた徳裕が居(キ)なくなるや其の恩人を根限り詆(ソシ)つたので徳裕も立腹し「怨みを以て徳に報ゆる」とは此の類の事である。義理知らず恩知らずな奴(ヤツ)だと言ひ書を裁して敏中の不徳を攻めたのであるが此れに對し或る人は

人臣・其の君に事るは公義のみ何んぞ私恩を以てすることを爲さんや・敏中が事未だ深く咎む可からず

といふが・吾・切に以て然らずと爲す・人臣たるもの・能く私恩を盡して然る後にこそ能く公義を盡すなれ・敏中が罪・誅を容(ユル)さずとなす孔子曰く親に事へて孝あり・故に忠・君に移す可し・兄に事へて悌あり故に順・長に移す可し・此を推して之を言ふときは則ち師に背き友に負くの人・必ず忠を以て國に許すこと能はず何となれば厚ふする所の者に於て薄くするときは則ち施す所薄からずといふこと無ければ也云云

此の白・敏中の如き人間・清明の今日・市中にも官衙にも・學校にも學園にも・到る所・あらざるなき有様である・危い哉

此の恩義のこと・其の精神たるや・西洋人には概して薄い様である・恩師長井長義先生の清談に依れば此の恩義の精神は猶太人に於て最も著しく薄いといふことである・君臣の關係や主従の關係や乃至父子の關係に餘り多く注意を拂はない個人主義者利己主義者に於ては無理もないことだらうが・そこが教育の大切な所以なのである・幼學綱要の序文中に

苟も志向未だ定まらず而して知識才藝の務を専らにすれば則ち徳性を殞し教化を傷く其の害・勝げて言ふべからず云云

とかいてあることに甚深な注意を拂はねばならぬ・否・否・報恩なんて心得は東坡先生が「孝は妻子より衰ふ」と申された如く・女房を迎ひてさへも減弱するものであるから子供の四五人も出來て生活に困難でも感ずる様になれば一層劇しく減弱するは無理も無い様だが・そこが勉強と努力の必要な處である・西暦千六百五十年頃に名の響いた獨逸の詩人ヨハン・リストは

Ja, Menschen Dank/Ist schwach und krank/ Verschwindet mit den Jahren. Joh. Rist.

噫・人類の感謝は弱く且つ病めり・そして年と共に消滅する  
と歌ふたといふことである・一飯の恩恵でも忘れぬ様に心掛けるばかりでなく・其れに報ゆべく心掛けるが本當の人の行ひといふべきであらう



〔く〕 苦集滅道の話

法句經といふお經の中には(譯文として)

天下の苦・この肉身に過ぎたるはなし

飢渴・寒熱

瞋恚(シンイ)(シンニ)驚怖

色情・姪欲

怨恨・災禍

すべて此の肉身あるに由る・夫れ肉身なるものは衆苦の本で又禍患の源なり・心を勞し慮を極め・憂畏萬端なり・吾々の縛著・生死の息(ヤ)まざるは皆この肉身あるに由る・世を離れ苦を去らんと欲せば當(マサ)に寂滅を求むべし・心を攝し正を守り・淡然として想ひなく須泥洹(スダオ)ン(果證)を得べし・此れ最勝の極樂なり

とかいてある・いかにも吾々の此の肉身は實際・諸苦の集積體に相違ない

(一)母の腹中にゐたときは・頸(クビ)は曲がり手足は壓窄され・其の窮屈・言ふべからず・其の不淨又察するに餘りありき

(二)其の一たび出胎するや冷風・身に觸れて其の痛感や・鍼を以て刺さるるに似たり

(三)其の生長するや飢渴に脅かされ寒熱に攻められ三百六十五日・一日も安樂あることなし

(四)其の老ゆるに至るや氣力消磨し體力削減して動止自由ならず上厠も亦人の扶助を乞ふに至るあり

(五)然も時々疾患・絶えず此の生を脅やし心痛耐え難きこと數ふるに違あらざらんとす

(六)遂に呼吸息んで命終らんか・四大は分離し筋骨は離解し神識も共に飄散して・春の花・秋の月・浮世の榮華を恨まざるを得ず・況んや所有の金銀寶石・錦綉玉帶・残らず貽して獨身空冥に往くのである・愛する人・今いづれにかある・惜しむ財・今や何人の手にや移る・嗚呼哀い哉と言はざるべけんや

此の如きの苦・蓋し此の肉身あるがためならずや・無明の煩惱・我を驅つて母の胎内に宿らしめたのである・思へば正に是れ不覺の骨頭なりけり

大聖釋迦牟尼佛は人類のこの四苦八苦の苦しみを見かね給ひ拔苦與樂の大願を起し多年難行苦行の後・遂に最勝の妙藥を發明し給ふたのである・是れが即ち苦集滅道・四諦の原理といふのである

夫れ物の見ゆるは眼(メ)あるがためならずや・若し夫れ眼を取去らんか物ありといへども見えざるべし・物と眼と相和合して視覺始めて生ず・吾々の喜怒哀愛憎憂懼等の諸情も亦心境和合の想念に外ならざ



るべし此の故に若しも此の心を滅せんか・境ありといへども・喜怒哀愛憎憂懼等の諸情も亦起り來らざるべし言ひかゆれば吾々の心鏡を琢磨して明了ならしめんか・妄想は去つて真相湛然として示現するものと言ふべきなり蓋し因を去れば果も亦隨つて滅するの理に外ならず

苦集滅道とは佛道修業の方法なり苦の原因を集と名づけ其の集を滅無する方法を道といふのである。譬へば子宮癌に由りて苦しめる婦人の子宮を摘出し去れば其の病苦の自ら消滅するが如し・而して子宮截除の術は醫道の修練に由りて得らるるが如く諸苦の原因を除却する方術は佛道の修行に依らねばならぬのである。蓋し醫術に種々の道具のある如く佛道にも亦種々の道具なかるべからず・是れを三十七科の道品(ダウホン)といふ・道具の種類が三十七あるといふことである曰く

(一)四念處といふ・念は能觀の觀にして處は所觀の境なり(一)身念處とは此の肉身の不淨なることを觀察することである(二)受念處とは見るもの聞くもの總て皆苦の因となることを觀察することである(三)心念處とは意識共に幻華の如く生滅無常・信じ難きものたることを觀察することである(四)法念處とは・すべての物は皆因縁生のもので・實性あるものでないといふことを觀察することである・是れを四念處といふ

(二)四如意足といふ・完全に願ふ所の法を修めることである(一)欲如意足とは所修の法を願ひの如く満足することである(二)精進如意足とは所修の法に對し油斷なく修めることである(三)念如

意足とは所修の法を修得して堅く記憶して忘れぬことである(四)思惟如意足とは所修の法に於て完全に検討し思量して忘れぬことである・是れを四如意足といふ

(三)四正勤といふ正は邪ならざることで勤は怠らざることである(一)已生の惡は永斷すべし(二)未生の惡は生起せざらしむべし(三)未生の善は生ぜしむべし(四)已生の善は增長せしむべし是れを四正勤といふ

(四)五根といふ・根とは能生の義なり・植物の根より草木の發生するに譬ふ(一)信根とは正道を信ずることなり(二)精進根とは正法を修して怠らざることなり(三)念根とは正法を記憶して忘れざることなり(四)定根とは心を攝收して散亂せしめざることなり(五)慧根とは諸法を觀照して明了たらしむることなり・是れを五根といふ

(五)五力といふ・能く惡を破棄し善を成就する力のことである(一)信力とは信根が增長して能く諸々の疑惑を破折することなり(二)精進力とは精進根が增長して能く身心の懈怠を破却し出世の事を成辨することなり(三)念力とは念根が增長して能く邪念を破却し出世正念の功徳を成就することなり(四)定力とは定根增長して能く亂想を破却し禪定を成就することなり(五)慧力とは慧根增長して能く三界の見思の惑を遮止して眞の無漏を收得することなり・是れを五力といふ

(六)七覺分といふ覺は覺了の義で分は支分の義なり此の七法に各々支脈分齊あればなり(一)擇覺分



とは諸法の眞偽を揀擇することなり(二)精進覺分とは諸々の道法を修して間雜なく油斷なきことなり(三)喜覺分とは眞法を契悟して歡喜を得ることなり(四)除覺分とは諸々の見思の煩惱を斷除することなり(五)捨覺分とは所見所聞等の念著の境を捨離することなり(六)定覺分とは所發の禪定を覺了することなり(七)念覺分とは所修の道法を思惟することなり。是れを七覺分といふ

(七)八正道といふ正道修行の分類の名なり(一)正見とは苦集滅道の四諦の理に明かになり外道の有無等の種々の邪見を破すことなり(二)正語とは妄語・綺語・兩舌語等の如き惡業となるべき一切の語を發せざることなり(三)正思惟とは四諦の理に通曉した上に更にその義理の存する處を思慮し分別することなり(四)正業とは殺生・偷盜・邪淫の三つの惡業を爲さざることなり(五)正命とは或は利養のために詐りて奇特の相を現し或は利養のために自ら功德を説き或は利養のために人の吉凶禍福を占ひ若くは人の爲めに説き或は利養のために高聲に威を示めして人を畏服せしめ・或は利養のために得るところの供養を稱説し以て人心を動かす等の五種の邪命を離れて正道に遵じて生活し身口意の三業を清淨にすることなり(六)正精進とは勇猛心を起して惡業を斷じ善行を修することなり(七)正念とは眞智を起して正道を憶念することなり(八)正定とは心を一境に止めて動亂せしめざることなり。是れを八正道といふ。但し正念を助長するためには更に貪瞋癡等の邪念を修治せねばならぬ是れに五停心あり(一)多貪のものは不淨觀を以て其の貪を治し(二)多瞋のものは慈悲觀を以て其の瞋を治し(三)多散といふて心の散亂し易きものは數息觀といひ呼吸の數を計することを以て其の亂心を治し(四)愚癡にして不幸を嘆くものは因緣觀を以て其の癡を治し(五)多障とて事故多きを憂ふるものは念佛を唱ひて以て其の心を治むべし是れを五停心といふ

所で斯の如き佛道の修行は頗る困難であつて吾々如き意力の弱いものには行ひ難い修行である故阿彌阿經を所依とした淨土門とか易行門とか言はれたお宗旨が開けたのであるが・自力にせよ他力にせよ凡そ宗教といふものは人間の苦惱や煩惱を利用し人間界を淨化し善化せんとの慈悲心から・割出されたものであるから・煎じ詰めて見れば・どの宗教でも惡業を教える様なことは一つもない。只利養のため淫祀邪教といふものが幾らも現はれて來(ク)るから・それに瞞着されぬ様に用心は爲さねばなるまいと思ふのである。但し一口にいへば教えといふものは勸善懲惡の四字に立脚して進められなくてはならぬのである

### 〔や〕 約束と信義の話

約束の約もツカネルことであり束も亦ツカネルことであるから結局は甲と乙と二つのものをタバネア



ハセルことであるから約束にイヒカハスコト或はチギルコトといふ訓(ヨミ)もあるのである。男女の二人がイヒカハして夫婦約束をする。其れを夫婦の血切(チギリ)といふ。血の氣の切れて死ぬまで。別(ワカ)れまいと約束することである。要するに約束とはイヒカハスコトである。約束手形といふものは「何月何日まで」に表記の金額仕拂可申候也」と言ひ替はしたる證書のことである。が。是れは書附で取定(キ)めたのである。が。昔の侠客などは杯を取(トリ)遣りして兄弟の約束を取定(キ)め。そして艱難・互に相救ひ・歡慶・共に情を分つたのである。彼の條約なるものは國と國との相互間の權利義務を條文を以て約束したものであるから條約を獨逸語では *Der Vertrag* といふ。條文記載の權利義務を負擔するといふ意味である。が。此の約束を履行しないことを破約といひ。夫婦約束を破棄することは。之れを破鏡といふ。圓形の鏡が半分半分になつたといふことである。誠に不祥なことと言ふべきである。であるから昔しから不祥なことの起らぬ様にとて

*Versprechen/Muss man nicht brechen.*

約束は破つてはならぬ

と戒めたのであり。そして文士リュッケルトまでが

*Was du verspricht, das halt! Friedr. Rückert.*

約束したことは守れよ と

戒めて呉れたのであるが。此の約束といふものも。是れが仲々守り難いもので。小さな話しなれど。叔父に來月迄に御返納致しますからといふて借用した五圓の金子の調達が來出なくて叱責された事は五十年後の今日も尙脳味噌に染(シ)み込んで慚愧勝えなく思ふてゐるのであるが。考ひて見れば「當てもなく。來月末は」と約束して拜借致したことの腑甲斐なかりしことを今でも思ひわびてゐるが。此の如き違約破約は幾らもあることと見え西洋の古諺にも

*Leicht versprochen, leicht gebrochen.*

軽く約束したものは軽く破約する

*Man soll nicht mehr versprechen, als man halten kann.*

履行し得るだけより多く約束すべからず

といふのがあり。東洋の古諺にも

輕諾・必寡信(老子)

(やすうけあひ・たのみがたし)

なんてのがある。であるから約束する場合には。其の實行如何を能く能く熟考して。確實に實行し得ると信ぜられざる限り。約束は決して爲(シ)てはならぬのである。必ず人からは怨まれたり。自分では後悔する様な羽目に陥るのである。已に獨逸の俚諺に



Wer viel Versprechen siet, erntet viel Reue.

約束を多く蒔いた人は・後悔を多く收得する

といふのがある・僅かに叔父に五圓借りた・それが違約したため・五十年後の今日・お線香を位牌の前に供へる時毎に思ひ出して後悔してゐることを知らば・違約の苦痛の如何に大なるかを諒察するがよい以上は他から物を約束して取込んだ話だが・五年立派に勤めれば退店の時・暖簾(布簾)(ノレン)を分けてやる・などと・頬邊(ホッペタ)に牡丹餅の如き甘味(ウマイ)話で・小僧を抱ひ入れ・そして愈々の時になつて話の味ひの極めて苦いものが世に幾らもあるのである・こんな違約者は西洋にもあると見え・彼の國の俚諺に

(一) Wort geben noch nichts.

口ばかりで・なんにも呉れな

(二) Versprechen füllt den Sack nicht.

約束は財布を満ちぬ

(三) Versprechen füllt den Magen nicht.

約束は胃腑を満ちぬ

(四) Versprochene Beeren füllen die Körbe nicht.

約束した覆盆子は籃子に満たぬ

(五) Wer viel verspricht und halt nicht, der ist wie Wolken und Wind ohne Regen.

多く約束して・其れを守らぬ人は恰も雨を伴はぬ風や雲の如きものである

の如きものがある・いづこも同じ秋の夕暮れで・人情は西も東も違はぬものと見えるではないか?

西暦三世紀の猶太の法典に

Die Gerechten versprechen wenig und leisten viel; die Frevler versprechen viel und halten

nicht einmal wenig. Talmud (3. Jahrh.)

正直な人は少しく約束して多く仕事する・悪性の人は多く約束して僅かに一度たりとも守らぬ

といふのがあるそうだが・實際悪性の人は頼めば・目前では何んでも承知して呉れるが・其の實・何んにも爲(シ)て呉れるものでない・昔し或る處に謠曲の先生ありて多くの弟子を持ちたりけるが・能狂言の舞臺が不完全で其の改築に悩んでゐられたのである・處がお弟子の中の氣轉の利(キ)いた如才のな

い或る人々は師匠の權心を得るためか・口(クチ)口(クチ)に

今・少し・商賣が・都合よくなれば・舞臺を改造する資金位は必ず調達進呈致します

と約束したが・其の師匠の死ぬまで一人も其の約束を實現して見せなかつたといふことが昔しの心學



らうが・其れは聞取る方の人の話しであるが・こんな實行の出来ない様なことを輕輕に口に出す・其の人は・自分では真面目の話しか知らんが・聞く方からいへば「輕卒な男だナア」と評して一笑に附しておくが・唯一言で腹を見られることだけは残念と我輩は思ふてゐる

耶蘇紀元前ギリシヤにテレンチウスといふ人がゐた・此の人の言葉に

Montes auri pollicens. Publ. Terentius Afer (um 185-155 v. Chr.)

Goldne Berge versprechen. Uebers. v. Donner.

黄金の山を約束する

といふのがある・そして此の話から出た獨逸の俚諺に

Er verspricht goldene Berge und ist keiner Heller werth.

黄金の山を約束して・鏝(ビタ)一文も持たない

といふのがある・大きな事を言ふ様な男に實力は決して無い・其れを信ずるのは此方(コチラ)の認識不足といふもので・お釋迦様から言はせたら多分

妙觀察智のない男だ

と申されるかも知れん・兎にかく大きな事を言ふものは信(シン)がぢかれぬのである・それにしても吾々は・どこまでも「信」をば尊重せねばならぬ 勅語にも朋友・信ありと仰せられ・論語にも

人而無信・不知其可也・大車無輓・小車無軌・其何以行之哉(爲政篇)

人にして信なくんば・其の可を知らず・大車で輓(ヨコギ)がなく・小車で軌(ケツ)(ヨコギ)がなくば・其れ何を以て行(ヤ)らんや

とかいてある・信はマコトで眞實不虛である・文字を解剖すれば信は人言である人(ヒト)たるもの言ふことは眞實にして嘘(ウソ)偽(イツハリ)のない筈である・従つて信言(老子)といへばウソイツハリのない言葉といふことであり・そしてウソイツハリのない言葉には飾りがないから・自然美(ウツ)くしくも聞えないのである老子には

信言不美

とかいてある・吾々は巧言を慎みて信義を尊重しマコトなるべく心掛けねばならぬ・故人大隈侯の御名前は重信(シゲノブ)で本書の著者恩田の名前も重信だが吾輩の名前はシゲノブでなくてヂュウシンである信(マコト)を重(タツ)とぶといふ意義で吾輩は名實相副ふべく品行を慎んでゐるのである蓋し信は 仁義禮智信・五常之道(漢書董仲舒傳)

と言はれてゐる其の五常の一ツで・人(ヒト)としては誠に大切なもので・マコトの心のないものは「不知其可」ぐらゐな・些々たるものではない・寧ろ危険千萬な人間と言ふべきものなのである・英國の古諺に



A faithless friend is more to be feared than an enemy.

信義なき友は敵より恐し

といふのがある・實際信義のない人間・即ち腹(ハラ)の黒い奴(ヤツ)程危険なものはない・昨日(キナフ)まで朋友として美しい顔を見せておきながら今日に到り利害相反するや仇敵の如き行爲をなし・朋友を陥れて恬として顧みぬのみならず・寧ろ内心祝意を表してゐるのである

信義の信はマコトで眞實なことであり義は「正しいすぢみち」と讀む文字で聖書(バイブル)には義人の言葉が多く見えてゐるが・正しいすぢみちを歩む人といふことである・人間は正しい道を踏んで行かねばならぬ・其の決心を變更せぬ・其れが信義といふものである・英語ではフェイス Faith といふそうだが獨逸語ではトロエ Die Treue といふ・そこで獨逸の國歌の冒頭にはトロエ・トロエとかいてある・正義よ正義といふことである正義も信義も殆んど同じことである・信義の篤い人・忠實な人・刎頸の朋友・こんな人ほど頼母しい美しい人は・他に無いのである・ギリシャの金言に

Fidus Achates, Publ. Vergilius Maro (umr 70 v. Ch.)

Sein treuer Achates. Uebers. v. Voss.

彼のため忠實な战友

といふのがある・Achates は Aeneas の朋友で且つ战友であつた・恰も支那の昔の簾頗と藺相如との如

き・友誼の深厚な朋友であつたのである・そこで友誼の篤い人のことを fidus Achates といふのである・個様な友誼の篤い人を朋友として交際したならば・どんなに頼母しいことであらうぞ・近頃の黨人といふものを見るに fidus Achates と言はれそうなのは一人も居らぬのである・昨日まで朋友として膝を交へてゐたものが今日倏忽(シユクコツ)相別れて敵となるぢやないか??

風波難免・倏忽之間・人船別異

といふて済ましてゐるが吾々から見れば

信義もなんにもない烏合の朋友だ

といひたくするのである・波斯の古諺をロオセンツワイグといふ人の譯したものに

Treu ist, o Jammer! nur der Hund zu nennen, / Indes die Menschen nichts als Feindschaft

kennen. Uebers. v. Rosenzweig.

悲惨なる哉唯犬のみ忠實なりといふべく・他は併し敵意としての人間より外になんにも知らぬといふものがある・一處に戦場に臨んだ時・战友が残らず我に背いて・そして残りて隨ふものは愛犬ばかりである・と言ふような事状となつたことを想像したら眞に斷腸の至りではないか??願はくば吾々の友よ??此の愛犬の如く・とこしへに我に隨ふて我が友たれよ



〔ま〕 迷(マヨヒ)と悟(サトリ)の話

佛祖三經の序に

道無古今人有迷悟

道といふものには古今の差別がなく人間には迷ふものもあり又悟るものもある

とかいてあり更に成唯識論には

愚夫迷執於境起煩惱業

愚夫といふものは迷ふて外境の見るもの聞くものに於て執著し・そして煩惱業を起すものである

る

とかいてあり・そして更に又六妙法門には

種種横計・迷執諸法・輪廻六趣

種々様々に横計思量し迷ふて諸事諸法に執著し・そしてそれがため六趣六道に輪廻して正覺を

取ることが出来ない

とかいてあるそうだが・要するに諸法諸物の眞理を知らずして唯耳目鼻口に映射し來るものに執著し・

あれが欲しい・これが欲しいと欲望の火焰を燃やす・それが迷ひといふものであり・此の迷ひがあるの

で色色な惱みを感じるのであるから此の迷惑を取去れば惱みのすべてが消滅するのである即ち言ひか

ゆれば迷ひを除き去ることが佛道の修行となるのである

然らば如何にして迷ひを除き去り得るやといふに・それは禪學辭典の「道」の項を讀んで見れば直ぐ判

ることである・其の道の項に曰く

所知の諸法の眞理の名を能知の智に名づけたるものは是れ道なり云云

此の道即ち聖諦第一義を徹見する・其れが所謂の悟道であり・轉迷開悟といふものである・言ひかゆれば

心地開明の境界に入りて眞趣を解得する・其れが悟りを開くといふのである・尙言ひかゆれば佛道の

妙理を覺得することが悟道といふのである

但し斯く言ふたのでは普通の人に理解の出來難い憾みがあるから・今は通俗的に解説して見ませう

抑も一切天地萬有は總て因縁生のもので一つも實體では無い・言ひかゆれば残らず摩耶 Maya の影な

のである即ち Vergänglichlicher, eihler, leerer Schein である即ち暫時的の・須臾的の・敢果なき・無常の

現象に過ぎぬものなのである・見給へ吾々の肉體を!!六十五元素の集合體では無いか??佛者の言葉を

かりて言へば五蘊の積聚體では無いか??此の肉體は時々刻々に變化してゐるでは無いか??屠所に往く

牛の如く時々刻々に墓穴に向つて進み往くでは無いか??鶯鳴かせた十八の美婦も梅子の如く皺(シワ)

だらけになりつつ進み往くでは無いか??是れは無常といふのである・無常は獨り人間に限つたことで



は無い・犬でも猫でも・梅でも櫻でも皆無常のものである・學者の説によれば太陽も時々刻々に收縮してゐるでは無いか??言ひかゆれば太陽も時々刻々に其のエネルギーを失ひつつあると言ふでは無いか??太陽の壽命は非常に長いだけのことである・最後には其のエネルギーを悉く放射し盡して死滅するのである但し大千世界即ち天體も吾々人間や生物の如く死ぬものもあれば又生れるものもあるから・現在の太陽が死滅する頃には又他の太陽が生れ出づるのであるから此の宇宙は決して暗黒にはならぬのである・心配するには及ばぬことぢや

鹽に盛つた水を見給へ!!段々に形態を變じて無に歸るではないか??然も水は天から降り來るでは無いか??是れを天水の循環といふ然も此の天水は水素と酸素との化合物であるから・特別に是れが水であるといふべき事實はどこにも無いぢやないか??言ひかゆれば水は摩耶の影に過ぎぬのである・因盡くれば水の影は消えて無くなるのである・見給へラヂウムを!!彼れラヂウムは太陽の如く間斷なく其のエネルギーを放射して重量が減少しつつあるでは無いか??學者の實驗に依れば銅でも亜鉛でも間斷なく氣化しつつあるでは無いか??是れによりて一切萬有は悉く無常のものだといふことを知るがいい然らば水素や酸素乃至鹽素や沃素の如き・化學者の所謂る元素なるものは絶對不變のものか??といふに決して不變のものではない・化學者の説に依れば吾々が輕氣球に入れて利用する所の水素は決して單純體ではなくて水素原子なるものが二個結合して出來たものだといふから・我々が利用する水素

なるものも亦因縁生のものではないか??其の因盡くれば必ず形を失ふのである・試みに一定重量の水素と其れに對應するだけの鹽素とを硝子管に入れて・久し暗處に置くか若しくは徐々に日光に曝して見玉へ・其の硝子管中には鹽素の存在も無く又水素の存在も無く只鹽化水素と稱する・水素でもない・鹽素でもない・別様の瓦斯だけが存在するのである・化學者は此の化學變化から

水素と鹽素と化合して鹽化水素一名鹽酸を構成す

といふのである・然らば鹽酸は鹽素と水素との二つの元素から成立するといふから其の鹽酸に鹽素や水素の性質が存してゐるかといふに一向に鹽素の綠色もなく水素の燃ゆる性質も無いのである・試みに考へて見給へ!!甘くない羊羹(ヤウカン)に砂糖が有るといふか??無いといふか??鹽酸に鹽素の性質も無く水素の性質も無いならば・理窟からどうしても鹽酸には鹽素もなく又水素も無いと言はざるを得ぬでは無いか??然らば鹽酸には水素も鹽素も共に含まれて居らぬといふべきか??所が鹽酸に電流を流せば鹽素も水素も立派に左右に別れて出て來るのである・茲に於て吾輩は讀者諸君に問ふのである

曰く  
鹽酸に鹽素有るといふか??無いといふか??

鹽酸に水素有るといふか??無いといふか??

恐らくは有りとも言はれまい・又無いとも言はれまい・吾輩は個様な場合を「有(ウ)にあらず無



(ム)に「あらず」と仰せられたのである。然らば鹽素や水素の本真本體は、どんなものなりやといふに、その答辯は如何なる化學者でも理學者でも言ひ能はぬのであるが、お釋迦様は

非有非無・中道の妙體で、言語に絶(ゼ)つしたもので、唯以心傳心でのみ知り得る所のもので、其の妙體の別名が眞如である

と仰せられたのである。蓋し

有るかと思へど有る様には思はれず 去ればとて

無いかと思へど無い様には思はれず

個様なものをお釋迦様は空と仰せられた

のであり、そして空と空とが和合して生じた鹽酸や水や砂糖や食鹽の如きものをお釋迦様は假(カ) (ケ)と仰せられたのであるから吾々は般若心經の言葉をかちて

色(物質)(摩耶)即是空(言語同斷の理體)(中道の妙體)(眞如)といひ又

空(言語同斷の理體)即是色(物質)(假有の無常體)

といふのである。所で吾々は耳目鼻口等に觸れるもの、例へば梅でも松でも、鹽でも砂糖でも、犬でも猫でも、美人でも醜婦でも、一切萬物、残らず實在性のものだ、現實性のものだ Reality のものだ Realität

のものだ、などと思ひ込んで美人を見れば、それに愛著し醜婦を見れば、それを嫌忌するが如き、唯ふへき妄情を起してゐるのである。生を欲し死を恐れるが如きは妄情の下の等なものであり、書畫骨董などを愛惜するは妄情の稚氣なるものであり、金銭や財産などを愛惜するは妄情の愚痴なるものである。是れを稱して成唯識論は

愚夫は迷ふて塵境に執著し、そして煩惱を起すのである

と言ふたのである。實際、世の中の人の心を探(サグ)つて見玉へ

(一)達者で長壽(ナガエキ)がして見たい

(二)金を澤山に溜めて見たい

(三)住居家を建て見たい

(四)自分の地所に住んで見たい

(五)容貌(キリヤウ)の好い婦人を妻にして見たい

(六)業平様のやうな人の妻君になつて見たい

(七)お芝居が見たい

(八)温泉で遊びたい

(九)奇麗な閑靜な景色の好い處で、彼の人と一處に不如歸でも讀んで遊んで見たい



こんな欲から・すつかり離れることが・蓋し轉迷開悟であり・そして此の如き欲のために活動するのが  
妄情に驅使される人といひ・物質の奴隷といひ・禪宗坊主の言葉をかりていへば

迷頭認影・即ち本心を忘れて影法師を逐ひ廻はる人

といふのであり・そして陶淵明の所謂「心・形の役となれる人」なのである

鳥尾得庵(陸軍中將)の著はした無神論には

悟りとして別に飛び離れたる子細あるにあらず妄想を遠離して一切の事物を正しく是非差排する  
の智慧を得るを云ふ・本末を失ひ輕重を誤り・實を以て虚となし虚を以て實となし他に向つて吉  
凶禍福を求むる是れを迷ひと云ふ思議分別の邪路に入るが故である・一念・主となる處を誤れば  
十念百念乃至千萬念もことごとく誤る・尺の違ひしものを以て物を丈量(ハカ)るが如く・何處  
(ドコ)までも誤ることである云云

とかいてあり更に

識(シキ)(思慮分別)が主宰となれば迷ひである・智(梵語 Bodhi)が主宰となれば悟りである・  
禽獸などが人間ほどに我(ガ)が勝(スグレ)て居らぬに由て・智が生ぜぬとて害も左程には無い・  
去れど禽獸に迷ひが無いとは云へぬ・識の上から動くときは悉く迷ひとなる・識が勝(スグレ)て  
あれば迷ひも勝ぐれてある・識が劣りてあれば迷ひも劣つてある云云

とかいてある・誠によく説明されたお話である

然らば萬事に悟り過ぎて全然無欲となり木石の如く冷血な動物となれといふのか?といふに左様では  
なく・智慧の眼光は異常に鋭くて・肉眼で見えない百里千里の先きも見え・七重八重の壁を隔てた先き  
のことも明かに見得る様な眞智を以て・明鏡に物の映(ウ)つるが如き慧眼で萬事に應じて行けるだけ  
に智慧を研き・そして一切の妄情と情慾とから解脱し完全な自由な人となつて浮世の雜事雜務を變理  
せよといふのである妄情や執著から離れずして世に處しては決して高妙な變理は出来ぬのである

### 〔け〕 權利と義務の話

權利 Das Recht, a right だ義務 Die Pflicht, a duty だ・なんて名詞は明治維新前には日本に無つた  
もので明治維新以後西洋の物質文明と共に西洋から日本へ輸入されたものであるが・西洋でも此の名  
詞が盛んに用ゐられる様になつたのは民權自由思想の盛んになつたフランス革命時代からのことであ  
る言へかゆれば權利義務の思想は利己的精神の勃興に連れて生じたものゆゑ・此の思想の盛んになる  
と共に人情といふものが段々に薄くなり・遂には親子の間にも爭論を惹起し嫉視反目する様なことに  
も立到るのであるから甚だ面白くない・言はば不人情・無慈悲な思想といふべきものである・従つて此  
の惡思想は所謂法治國の國民間に盛んに流れてゐるから其の國の法律書の中にも



権利は法律上の力なり

とかいてあり又

義務は法律の命じたる行爲又は不行爲に對する各人の責任なり

などとかいてあり・そして

権利の内容は利益なり

とまで斷定されてゐるのを見ても・権利義務の思想が如何に算盤的思想であるかが推察し得らるるのである・こんな思想の盛んになるのは甚だ宜しく無いことであるが・今日では欽定の憲法に依り總て何んでも法律で制裁される様になつたから・勅語で仰せられた通り・國法に隨順し・法律に觸れぬ様に心掛けて・此の世を送るより外に致し方はないのである・下手に人情論などを振り廻はして弟や妹の告訴から・とんでもない迷惑を受けぬ様に用心するがよい・或る二人の文士兄弟が互に権利義務の争ひから目と鼻の近い處に住んでゐたにも拘はらず兄は弟の葬式に香花一つだも供へず其の埋葬式にも參加しなかつたことがあつた・今から十五六年前のことであるが其の兄なるものは今尙生存して今年七十五歳となつてゐる・兄弟の反目・餘り立派なことではない・蓋しこんな人非人の行爲も結局は民權自由の思想にかぶれ・それから権利義務の思想にかぶれた・ために外ならぬのであるから・如何に法治國になつたとはいへ・餘りに法律・法律と言はず・往時の武士氣質に眞似て借用證書など作製せず・心持ちだけで金銭

の貸借も致し・違約の節は他人満座の席で御笑ひ下されても異存申すまじく云云位で濟ます様にすべがよい・人情味といふのは個様なことなのである・西洋人の中にも往々我輩と同じ様な意見を持つてゐるものがあると見え・世界第一の法治國と言はれてゐる英國にも

By relying entirely upon rights and obligations we cannot get on in the world.

権利義務一點張りでは世渡りは出来ません

といふ俚諺がある・蓋し是れが本音な處であり・權利權利で世を渡らんとする者は角の生えた虎の如き悪性の人間の話しで不都合な話しであるから眞似ちやいけな

抑々法律法律と法律ばかりを楯(タテ)とするものは・他人の越度を見附けて其の越度に附込み法律の力に依りて利益を獲得せんとするものであるから其の越度の絶對に無い様に用心すれば惡辣な法律屋の攻撃は受けずに濟むこと故・此の世を渡るには・自分だけ・正しい道を踏んで行けば・それで此の娑婆は濟むと心得・法網に罹らぬ様用心するがよい・義理人情に絆(ホダ)されて借金證書に連署でも仕て見給へ・苛酷(ヒド)い目に逢つて困り抜く様なことになるから・連署などするなら・寧ろ其れだけの金銭を給付して捺印などせぬが安全である・今日の様な世態になつては・義理人情友誼なんてものは無用であるばかりでなく・寧ろ自分で自分の頸を締(シメ)る道具に過ぎぬのである・人情の輕薄になつたのは世が澆季となつたばかりぢやない・法律・法律で法律一點張りになつた結果である



一體全體・權利といふ文字の獨逸語は *Das Recht* であるが・此の *レヒト* といふ文字には・利益を内容とする權利なんて意味は毛頭含まれては居らん・元來が垂直とか水平とかいふ意味の文字であるから・數學者は此の文字即ち *Recht* を以て直角(正角)を表示し・九十度以上を鈍角とし九十度以下を銳角とし・そして垂直面又は水平面に對し或る角度をなしてゐる面を斜面と稱するのであり・そして垂直線と水平線とを正線と名づけ是れに對する斜線はすべて不正線と呼んだのであり・そして人の心の作爲(ハタラキ)を又二つに區別し其の正しきものを正直 *Recht* と名づけ其れ以外の心の作爲を不正 *Unrecht* と名づけたのであるから不正といふことは斜傾といふことになるのである

それから又人間の手の作爲(ハタラキ)を見るに左よりも右の手が器用で有用であるから其の右の手を *Die Rechte* (*rechte Hand*) と名づけ不器用で用事の少ない左の手を *Die Linke* (*linke Hand*) と名づけたのであり左傾思想といふことは・不正思想といふことなので・不器用な・用ゐにくい思想といふことであり・そして幾何學では二點間の距離の最短なるものは二點間の直線であるから俚諺に

*Rechts ist der nächste Weg.*

右(正直)が一番近い道である

といはれてゐる・斯くて *Recht* といふ文字が正直といふ意味にも用ゐられ右といふ意味にも用ゐられそして又右が正しいといふ意味にも用ゐられたのである

抑も權利 *Jus*・*Right*・*Droit*・*Recht* とは意志を以て特定の利益を主張し享受し得る人の法律上の能力で法律上の一觀念である此の觀念は法律が先づ人格相互間に於て利益の範圍を定め次に意志の相及ぶべき範圍を規定し・其の客觀的法規の定まるに及び次に又主觀的方面に於て各人格者が相互に主張し得べき利益の範圍を定め茲に始めて權利なる觀念が生ずるものであるから・従つて法律なくして權利ありといふ説は誤謬とされてゐるのであり・そして法は意志交錯の關係を定むるものなるが故・權利は人格者間にのみ存するとする説が普通一般の説である・故に權利は意志に依る主張の許されたものと言ふべきである・例へば金を貸した人と借りた人とありとせん貸した人は金の返済を要求するの權能有し借りた人は金を返済すべき責任即ち義務を有して居るが故・若し債務者が返済の義務を果さざる時は債權者は法の力に依りて貸した金を取戻し得るが故・權利は法律上で力なりと言はれ・法律上の義務とは法律の命じたる行爲に對する各人格者の責任なりと言はれてゐるのである・従つて權利と義務とは離るべからざるもので義務ある處には權利あり權利ある處には必ず義務あるもので・唯權利ばかり主張して義務を果さざるが如き場合の權利は・權利の空名で實力は存在して居らぬものとされるのである・故に獨逸語の義務には *Verbindlichkeit*(結合)といふ意味が含まれてゐる・金を借りた人は金を貸した人に對し・離るべからざるものであるといふ意味なのである

凡そ人の子たるものは・其の父母から無形の力と言はず有形の物質と言はず莫大な資本の供給を受け



てゐるのである。民法は父母に對して義務あり責任ありとは規定してはゐないが、事實上莫大な資本の供給を受けてゐるのである。もちろん父母たる人は債權を笠に被りて彼れ是れは言はぬのであるが理性ある人格者は一考するだけで父母に對する債務の重大なるを發明する筈である。教育勅語に「克く忠に・克く孝に」と仰せられた其の孝は取りも直ほさず鞠育の恩義に對する債務的義務に外ならぬのである。哲學者キルヒネルは

Pflicht ist eine gebotene That. Jic. Dr. Fr. Kirchner. Wörterbuch der philosophischen Grundbegriffe, Heidelberg 1890.

義務は命じられた行爲なり

とかいておいた。此の「命じられた」といふ其の命令者は良心のことである。故に苟も良心あるもの。即ち健全な精神のあるものは必ず父母に對する重大な責任を痛感せぬ筈はないのである。蓋し此の重大な責務を勤め果すこと。其れ自體が最大な善行なのであり。總ての善事が此の最大の善行から派生するのである聖人孔子が

孝弟は夫れ仁を爲すの本か(論語學而篇)

と仰せられたのを能く能く思ひ合はすがいい蓋し人は善を爲すべきものだなどと輕輕に考へてはならぬ。必ず善は爲さねばならぬものと心得ねばならぬ。言ひかゆれば獨逸語のゾルレン Sollen で爲さね

ばならぬといふのであるから。肝に銘じて忘れぬやうに努力して父母に對する重大責務を果すがよろしい至囑至囑

抑も義務といふものは法律上・行爲又は不行爲を強要せらるる負擔であるが故・義務は一つの負擔と謂はねばならぬが。蓋し一定の事項を強いらるることは人にとりては又一つの苦痛であるといふべきである。何んとなれば心意の束縛を受けることになるからである。そして此束縛から遁がれんとして遁れられない場合には慥かに一種の苦痛を感じざるを得ぬのである。故に義務といふものは獨り法律上ばかりでなく・良心から強ひらるるものでも同じく一種の苦痛となるのである。然し理性のある人格者は縱令へ苦痛なればとて正當な義務ならば是非とも其の苦痛を忍受せなければならぬのである。父母に對する義務の如きは理由の極めて正當な義務であるから粉骨碎身・以て其の義務を盡し果さねばならぬ。キルヒネルは又

Unsre Vernunft wie unser Gewissen gebieten uns kategorisch das Gut,……

吾人の理性並に吾人の良心は吾々に無條件で善をなすべく命令してゐる云云

といふておいた。實際吾々は無條件で父母に報恩の義務を果さなくてはならぬ。然らざれば吾々は牛馬犬猫と擇ぶ處無きことになるのである



〔ふ〕 富貴と貧賤の話

戦國策といふ本には

貴不與富期而富至富不與梁肉期而梁肉至梁肉不與驕奢期而驕奢至驕奢不與死亡期而死亡至

貴は富と期せずして而して富至り・富は梁肉と期せずして而して梁肉至り・梁肉は驕奢と期せずして驕奢至り・驕奢は死亡と期せずして死亡至る

とかいてあるそうだが平らたく言へば少尉が中尉になると月給が増し・月給が増すと酒やお刺身が毎晩つく・酒やお刺身が毎晩つく様になると・氣分に驕奢な心が生ずると借金が多くなる・借金が多くなると・悪るいことをすると・遂に免官になつて社會から死亡するといふことなのである・此の順序變化は鐵砲玉が實際から落ちて來(ク)る様に一・三・五・七・九の割合で加速するのであるから・没落に近づくと・其の變化が驚く程疾(ハヤ)いのである・であるから

あんな立派な會社がモウ潰れたのかい!!

といふ様な驚きに遭遇することが往々あるのである・そこで地位が高くなれば収入も多くなりて富貴・榮華の豪華も出來・人も羨む様になるが・循環の法則に支配され・忽ち貧乏となり落魄して人から賤夫扱ひを受ける様になるのである・宋代の易學の大學士劉・牧・字は長民といふ人・此の富貴と貧賤との循

環の様子を述べて

貧賤常思富貴・富貴必履危機

貧賤の人は常に富貴たらんことを思ふが富貴の人は必ず危機を履(フ)む

といふたのである・見玉へ位・人臣を極めた人の暗殺に逢ふことの多きを・又見玉へ篋棒に金を溜めた人の難に逢ふことの多きを・禮記には

小人富期驕・驕期亂

小人といふものは金が出来ると期(ココ)に驕り・そして驕りの心が生ずると期に亂れ狂ふ

とかいてあり・そして大學には

仁者以財發身・不仁者以身發財

仁者は財を以て身を發し不仁者は身を以て財を發す

(財を施して道を行ひ以て身を立つるは仁者なり・身を捨つるも尙且つ財を貪るは不仁者なり・といふ義なり)

とかいてある・今日の財閥の精神は危機を履むことを知らずに無闇に金・金と・金のみ希求するのであるが・心得違ひぢやないかと思ふ  
もちろんスマイルすが



Wer nicht zu Hohem sich erheben kann, / Der ist fürwahr ein jammerlicher Mann. Samuel Smiles, D. Charakter 1871 Uebers. v. Dobbert.

自己の地位を高め得ぬ人は誠に惘然な人である

といふた如く・奉職しても一向に進級も昇進もせず二十五年間門番で終つた・なんて男も感心せぬ人で・惘然に至りであるが・去ればとてシヨオペンハワアが

Der Reichtum gleicht dem Seewasser. je mehr man davon trinkt, desto durstiger wird man.

Arthur Schopenhauer. Parerga.

富は海水に比すべし・餘計に飲めば呑むだけ渴(カワ)く(金もちと灰吹は溜れば溜まる程きたなくなるの意)

といひし如く・無闇に溜めても餘り賞(ホメ)たことではない・蓋しウエヘルが

Tugenden sind von jeher gesunken mit Zunahme der Reichtümer. Karl Jul. Weber.

富の増加と共に古くから道徳が沈淪した

といふた如く・金が溜まると其の人が傲慢になり・卑下慢となり・そして其れと同時に品性が下落し亂倫行爲を敢て爲す様になるのであるから・遂には悪魔も覗き込むのである・富豪の安田善次郎氏が悪漢のため其の庭で殺された・なども蓋し此の類ではないか??

そこで人はマチソンが

Wer um Hohes kämpft, muss wagen! / Leben geht es oder Tod! Friedr. von Matthisson.

高位のために闘ふ人は冒険たるべし生きるか・死ぬかであるよ!!

といふた如く生死を賭して闘ふのも勇壯で面白いかも知れんが・然し單に或は高位高官に陞り或は千萬長者に爲つて見た處で七首で白晝刺されたり機關銃で夜中に射殺されては詰らぬ事では無いのか??金を溜め高位に陞ると同時に益々天を畏れ神を敬ふの心を喚び起し身を慎む様にせんければならぬのである 莊子繕性篇には

今之得志者軒冕之謂也軒冕在身非性命也物之儻來寄也其來不可圍其去不可止

今の志を得るものは軒冕(貴人の車と冠)の謂ひ也軒冕の身に在るは性命ではない・物が儻(カリ

ソメ)に來り寄つたのである其の來るや圍(フセグ)べからず其の去るや止むべからず

とかいてある・どんなに美事な正装でも・其れは附屬物で三文の價值もないのである・人の人たる所以は立派な篤行家たる所にあるのである・決して

重累印・珥香貂・乘朱輪・勝衣・則・綺襦紈袴・通籍・則・玉瑣青墀・動・則・兩驂如舞・坐・則・五鼎成列

こんなことは・名譽でもなんでも無い・言はば肉慾か物慾の權化に過ぎぬのである・此(ココ)に於て聖



人孔子は

飯疏食・飲水・曲肱而枕之・樂亦在其中矣・不義而富且貴・於我如浮雲

(粗食に甘んじ水を飲み肱枕の不自由なる貧乏世帯と雖も人道を重んじ徳を積めば心の樂み極りあることなし・不義の榮華は有れども無きが如し蓋し其の樂む所は富貴にあらずして徳に在り・今の世・斯の如き人能く幾人かある・文學士中村徳五郎・論語新註から)  
と申されたのであり・荀子には又

孔子曰周公其盛乎・身・貴而愈恭・家・富而愈儉

孔子曰周公は其れ盛なる乎・身・貴ふとくして而して愈よ恭・家・富んで而して愈よ儉なり

とかいてある・此の心掛けてなければ・吾輩の常に言ふてゐる如く位(クラキ)負けしたり・金氣・殃(ワザハイ)をなして不祥事が其の家に必ず起り來るのである・詩人杜甫の句に

劍佩の聲は隨ふ・玉墀の歩

衣冠の身は染む・御爐の香

といふのがある・大臣參議が正装して天機奉伺のため參殿した時の様子は正に此の如くで頗る美事なことであり又光榮な事であるが自然の運命で此の如き高位高官に陞つたのであれば・誠に賀すべきことであるが・此の如き光榮を目的として仕官しては心得違ひなのである論語里仁篇にも

富與貴・是人之所欲也・不以其道得之・不處也・貧與賤・是人之所惡也・不以其道得之・不去也  
富と貴とは是れ人の欲する所なり・其の道を以て之を得ざれば處(オ)らざる也・貧と賤とは是れ人の惡む所なり・其の道を以て之を得ざれば去らざる也  
とかいてある・論語に又

士・志於道・而・恥惡衣惡食者・未足與議也

(仁義の道に志す者・意を衣食の美惡に奪はるるが如きは共に齒すべからず・脩むべきは外にあらずして内にあり・の意)

とかいてある・人は衣食の奴隸となつてはいけない・食ふことも・衣(キ)ることも・考ひなくてはならぬが・それが目的であつてはならぬ・論語に

德之不脩・學之不講・聞義不能徙・不善不能改・是吾憂也

徳を之れ脩めず・學を之れ講せず・義を聞て徙(ウツ)ること能はず不善を改むること能はざるは是れ吾が憂ひなり

とかいてある・此の精魂氣魄を以て奮闘努力するので無ければ・駄目だ・衣食の爲めや名譽の爲めに努力しては・それは奴隸的生活といふものである・電車の車掌でもよろし・銀行の帳面附けでもよろし・

志於道(道に志ざし)



據於德(徳に據り)

依於仁(仁に依り)

游於藝(藝に遊ぶ)(述而篇)

の意味に於て醫業をなすのもいい・藥業をなすのもいい乃至工場の技手になるのもよろしい・然も道德の何たるを思はず・仁義五常の道の何たるを考ひず・唯だ藝能技術のみに専念するのでは・縦令へ・それが博士であらうと・學士であらうと・吾々は其れを見て車夫・馬丁の業務と何等擇ぶ所は無いとするのである・儒行には

儒苟利於國家・不求富貴

儒は苟も國家を利して富貴を求めず

とかいてある・進んで公益を博め以て天下國家を治むるの誠意に於て努力せんければならぬのである  
貧富貴賤に絆(ホダ)されてはいけない・否・否・それ所ではない

邦無道・富且貴焉・恥也(述而篇)

とある・邦(クニ)亂れて道義も禮樂も廢(スタ)れた時代に富貴の地位を得るのは寧ろ恥辱だと申しておかれたのである・菅原道真公の博覽古言には「朝野合載」の文句「人貧智短・馬疲毛長」を引いて其の下

人・貧しくなれば貧苦に拘(カカハ)りて智慧の鏡・曇るを短と云ふぞ・馬・疲るれば肉・落て毛・長  
きぞ・是れは衆人を以て云へり・此の如くにては益無し・如何せんと云はば・道に志して徳を脩む  
るときは・心安んじて智・長くなるぞ・老ては當に益々壯なるべく・窮しては益々固(カタ)かるべ  
し・孟子に云ふ富貴不姪・貧賤不移・威武不能撓・云云・丈夫は此の如くなるべきぞ・明道の詩に曰  
く富貴不淫貧賤樂・男子到此是英雄云云姪とは溺るることを英雄は萬人に勝(スグ)れたること  
ぞ

とかいておかれたのである・實際人間は哀れなもので・家語にも人・窮すれば則ち詐(イツハ)るとかい  
てある通り・貧乏すると・同時に人間は馬鹿になるものである・俚諺に「貧すれば鈍する」とある通り・智  
慧の鏡が曇り・詐偽をも働らく様になるから・貧乏は仕たくないには相違ないか・去ればとて衣食のた  
めのみ營營汲汲たる生活も亦考ひものなのである・博賢古言に又

人たる者は理を辨へ奮發興起して過ちを改め善行に移るべきなり愚かにして忘り空しく日月を  
送るべきに非るなり

とある・ボンヤリ暮しては相ひならぬこと勿論なれど唯・衣食のため金錢のために日月を送つては宜し  
くない・然らば溜めた富は如何(ドウ)するかといふに・それは必ず散ぜんければならぬのである・溜め  
たのみで散ぜんければ必ず殃(ワザハヒ)が來(ク)るのである・宋の李康の運命論に



木秀於林・風必摧之

堆出於岸・流必湍之

行高於人・衆必非之

とかいてあるそうだが俗に「喬木・風多し」といふは此の運命論から由來したものでならん・兎にかく世間の目から「金を溜めたナ」と睨(ニラ)まれる様になれば必ず・ナントかカントか悪く言はれるに定(キ)まつてゐる・のみならず・天下流通の道具を一人の手に守取することは天理に背いたことなるが故・必ず天の殃ひを受くるに定(キ)まつてゐる・必ず施し散ぜんければならぬ  
西洋の Ohur といふ處の或る家の壁の落書に

Die Höhen trifft der Sturm, / Und trifft sie offers gar; / Ein niedrig Haus besteht; / Gross Haus hat gross Gefahr.

高いものには嵐が當る・そして屢々甚しく當る・低い家は存立して・大厦は大危険を持つ

といふのが・あつたそうだ・喬木・風多しと同じ意味である・それから又西洋の Delzen といふ處の或る家の壁書に

In einem und Augenblick verfällt / Allmacht und Hoheit dieser Welt.

刹那と瞬間に於て此の世の全能と高貴とが没落する

といふのが書いてあつたそうだ・實際のことである・富貴は必ず無常のものである・漢代の學者・蓋・寛饒といふ人の書いたものの中に

富貴無常・忽則易人・此如傳舍閱人多矣

といふのがあるそふだ・實際長命して世間の浮沈を見れば富貴の無常なること走馬燈もただならざるの感に打たれるのである・周の武常・曾て楊・素・字は處道といふもの(車騎大將軍)に

善自勉勿憂不富貴(よく自ら勉めて富貴ならざるを憂ふる勿れ)

と申されしとき楊・素は

臣恐富貴來逼人・臣無心富貴

(私は富貴が参りまして人に逼るのを恐れて居ります・私は富貴には全く無心なのであります)

と・奉答したといふことであるが・富貴に對して無心だと言ふのは恐らくは本音(ホンネ)ではあるまい  
楊素の傳を読んで彼れの人格を察して見れば本音でないことが判るのである・が・彼れも仕舞ひには人に殺されたのである・富貴も夢の如く消えたのである・昔・秦の始皇帝の時の相丞に李・斯といふ人がゐた此の李斯・或時・嘆じて

吾聞荀卿(李斯之師)有云・物禁太盛・吾昔上蔡布衣・今人臣之位・無居上者・可謂富貴極矣・物盛則



衰・吾未知所稅駕也

吾・苟卿の言を聞くに云へることあり・物は太(ハナハ)だ盛なるを禁(イマシ)むと・吾は昔しは上蔡といふ處の綿服の一平民であつたが・今は人臣の位を極め上に居る者はない・富貴の極といふべきである・物・盛んなれば則ち衰ふものであるが・自分はまだ停留し休息する所を知らぬ(その意志はなす)

といふたのであるが仕舞には咸陽市外で腰斬され其の三族も絶やされたのである

こんなことを思ひ合せて見ても太盛に居(キ)た場合には餘程用心せんければならぬと思ふ・それにしても溜めた金は・是非とも散んぜんければならぬ・子孫に遺すのは子孫を毒すると同様の結果になるのである・散じて以て徳を養ふが上分別である・フリードリッヒ・リユッケルトは

Nur dem ist Reichtum gut, der ihn mit gutem Fleiss/Erworben hat und ihn gut anzuwenden weiss. Friedr. Rückert.

富は善良な勤勉で收得し・そして其れを善良に應用されるときに善事となるのである  
と説き・ナポレオン第一世も亦

Der Reichtum besteht nicht im Besitz von Schätzen, sondern in der Anwendung, die man von ihnen zu machen versteht. Napoleon I. Maximilien u. Gedanken (1817) Uebers.

v. Zimmermann.

富は財を有することに於て成立せぬ・其の財を利用することを理解することに於て成立するといふたそうである・善く用ゐられる處に金錢の難有味もあるものであり・徳も施されてゆくのである・死守しては・いけない・欲を離れて世のため社會のため喜捨するが安全な道であるのである

### 〔一〕 婚姻と戀愛の話

男女相許して夫婦關係を結ぶことは民法の上では之れを婚姻といふ民法第三章には婚姻に関する法律が規定されてあるから吾々國民たるものは能く心得て居らねばならぬが獨逸語では婚姻のことをエーヘ Ehe としひラテン語では之れをコンユギウム Conjugium としふ・そして男が女の方へ適(ユ)くことでも女が男の方へ適くことでも共に之れを歸(トツ)ぐといふ古書に「妹背二柱の神・嫁繼(トツギ)給ひて」とある・其の「トツギ」のことをなすために適くことである・そして其の「トツギ」のことは交接教鳥(トツギヲシヘドリ)といふ鳥類が教えたといふことであるが今は其の道・湮滅して詳かではないが・冥冥の中には廣く世界中に存して動物にも植物にも發動してゐるといふ・のであるが或る西洋の本に婚姻のことが左の如く記述されてゐた・讀んで見るが

Ehe ist die nach gesetzlichen Vorschriften eingegangene Verbindung zweier Personen



verschiedenen Geschlechts zu lebenslänglicher, geist-leiblicher Gemeinschaft.

婚姻とは法律的處方(法規)に據り異性の二つの人格者が心身の終生的共同體に化合したことを曰ふのである云云

そして尙此の外に婚姻の目的が左の如くかいてあつた曰く

Ihr physischer Zweck ist die Fortpflanzung des Menschengeschlechts, ihr sittlicher die Entfaltung der Liebe.

其の有形的目的は人類の播殖であり其の倫理的目的は戀愛の發展である云云

蓋し本論の標題の「婚姻と戀愛」とは此の説明に基因したのであるが・吾々が婚姻に對する見解は全然是れと相異してゐるのである・と謂ふのは個様である曰く

吾々は兩親様の鞠育の御恩を無量に拜受してゐるから・此の御恩を完全に報え奉らねばならぬ・一人では其の行動に不十分な所があるにより・此の意志を汲み取つて吾を補助して呉れる婦人が在りや否やといふて婦人を求むるのである・幸に吾輩の此の意志を汲み取つて呉れる婦人ありとすれば・吾輩は禮を厚くして其の婦人を迎へるのである・禮記の疏に

壻曰婚・妻曰姻・壻以昏時而來・女因之而去

とかいてある・是れが妻を迎ふる古式である・此の古式によりて迎ひられた吾妻は絶対に吾が意志を汲

み取り・例令へば朝命を拜して千里萬里の異國に出張するも・吾に代りて吾父母様を能く看護し呉れるのである・妻を内助の人といふが吾に代りて吾が父母様を看護する・是れ程大きな内助の功は他に決して無いのである吾輩が妻を愛する所以は此の内助の功に報ゆる所以である・決して色情發展のために妻を愛するのでは無い

吾輩の婚姻に對する見解は右の如くであるが實際に吾輩の妻も亦此の見解の下(モト)に吾輩を内助してゐるのである・昨夜御親任を拜受した廣田總理大臣の令夫人も恐らくは吾輩の妻と大小の差こそあれ・同じ意志で良人を内助して居らるのであらう

抑も西洋人はいづれも皆前記西洋人の見解で夫婦關係を結んでゐるから戀愛至上主義なんて・愚にもつかぬ主義をも言ひ出すのであるから若し一步譲つて言はしむれば・牛馬の交尾も戀愛至上主義の發現と言ふべく・雌蓋(メシベ)雄蓋(ヲシベ)の受胎作用も亦戀愛至上主義の發現と言ひ得るのであらう・こんな意味で夫婦の交媾をなすならば人間の靈長たる所以も判らなくなるでは無いか??明治維新に連れて西洋人の此の動物的思想が輸入されたので智慧の幼稚な人間・悉く迷はされて・戀愛とかラブとか・動物さへも言はぬ様なことを盛んに言ふ様になり・今では人間が悉く淫慾の奴隷になつて仕舞つたのである

動物も飲食する・人間も飲食する



動物も交接せる・人間も交接する

これだけならば

動物・エクオール・人間

といふことになるではないか?? 去ればとて飲食することや交接することは絶対に廢することは出来ぬど・可及的隠蔽して・お互に口にも言はず目にも見えぬ様にせんければならぬのである・人間が犬・猫のすることと同じ事を同じ意味とするならば盛宴を張つて婚姻披露などする必要は毛頭あり得ない・況んや

Die Ehe ist daher allerdings als etwas höchst Ehrwürdiges, als etwas Heiliges zu betrachten (Krug)

此の故に婚姻は尊敬的神聖のものとして視るべきである  
なんてことは毛頭當(アテ)にならんこと・なるに於てをや

既に合法的手續を済ましたものは輿入れと合番との式を擧げねばならぬ即ち男は女を迎ひ・女は民法第七百八十八條に従へ男の家に入り七百八十九條に従へ男と同居の義務に服さねばならぬのみならず七百九十條に従へ男女は互に扶養の義務を負はねばならぬのである・此の男女の情交を夫婦の交りともいひ又夫婦生活 Ehestand ともいふのであり・そして此の情交は如何なる艱難辛苦の場合といへ

ども決して離絶してはならぬのである  
もろろん昔しから

(1) Ehestand ist kein Geschleck.

夫婦生活は渴望すべきものではない

とも言はれ又

(11) Ehestand/Wehestand.

夫婦生活は苦痛生活

とも言はれ又

(11) Der Ehestand ist eine Procession, wo immer das Kreuz vorangeht (Osterreichisches Sprichwort)

夫婦生活は十字架の先頭に行く行列である

とも言はれ又

(四) Der erste Tag in der Ehe ist oft der erste von langem Wehe.

婚姻の第一日は長さ苦痛の第一日である

とも言はれ又



(五) Selten wohl, und allweg wehe/Ist täglich Brot wol in der Ehe.  
 平安は稀れ・いつも苦痛となるは本當に夫婦間の毎日の麩麩である  
 とも言はれ更に

(六) Die Ehe ist Himmel und Hölle.

夫婦(生活)は天(國)であり・そして地獄である

とも言はれてゐる程に・慥かに夫婦は難儀な生活に相違ない殊に家庭に暗雲が漾ひ・そして夫婦の間に

(七) In der Ehe mag kein Frieden sein./Regiert darin das Mein und Dein.

「己れの」と「汝の」とが支配する(様な)夫婦中には平和はあり得ない

といふ様な事態が生じた場合には・眞(マコト)の地獄の沙汰で・華嚴の瀑布や淺間の噴火口は・こんな時に利用されるのであるが・併し

(八) Aus dem Ehebett so man nicht schwatzen.

夫婦の寢臺からは・絶えて・喋喋の聲をさかぬ

とも言はれて居る通り夫婦の情交が深密であ互に一心同體となつて努力するならば千艱萬難も少しも苦痛の種(タネ)とはならぬ・のみならず・熟練な船頭が荒浪を押し切るときに如き愉快な感情を喫得するのである・西洋の人も既に

(九) Wenn Eheleute haben einen Sinn,/So tragen sie alles Unglück hin.

夫婦たる人々が心を一つにもつならば彼等はあらゆる不幸を擔ひ去り得る

といふてちぎ學者レーマンも

(十) Weib und Mann können wohl friedlich und freundlich leben, wenn das Weib ihren Willen vergisst und Mann's Weis' und Willen lernt.

妻君が自分の意志を忘却して旦那の智慧と意志とを學べば妻君と旦那は慥かに平和に且つ親しく暮らし得べし

といひ更に

(十一) Ein züchtig Weib, so wohl hausen, kochen und beten kann, ist geschickt genug, ihrem Mann Fried' zu machen. Lehmann.

教育ある順良な妻君が善く家を治め・炊事に心を配り・そして神(カミ)信心に篤ければ其の旦那に平和と喜悅とを作る技倆は満點である

といひしが・蓋し間違ひない話であらう・但し同時に旦那たる人も

Aber auch beim Mann brauch't's Selbstverleugnung und Geduld.

併し旦那にも亦克己と忍耐とが必要である



であらねばならぬ・夫にしても若し勤勉努力を缺き・遊惰放逸に流れんか・如何に賢良な妻君たりといへど・其の家に不幸の來らぬといふことは無い・故に夫婦たるものは互に勵み勵ましつゝ其日其日の仕事を片付けねばならぬのである曾て或學者が

(十一) Ehestand, Wehstand, / Wenn du freist mit Unverstand; / Wählst du wohl, ist er gewiss /

Die ein irdisch Paradies.

若し汝が理解力の缺乏を以て求婚するならば夫婦生活は苦痛の生活であるが汝がよく選擇して(求婚するならば)夫婦生活は慥に此世でのバラダイスである

といふた通り・夫婦・心を一にし婦は夫を信じ夫は又婦を信じつつ暮らすならば其の夫婦生活ほど愉快な生活は無いのである・曾て古聖ホオメルは

Nichts ist wahrlich so wünschenswerth und erfreuend, Als wenn Mann und Weib in herzlicher Liebe vereinigt. (Homer)

夫と婦とが心からの愛に於て一緒になつても・實際希望通り喜びは來(ク)るものでないといふたそうだが・それは心の置き方の悪い爲めである・如何に戀愛が濃厚であり一致してゐても勤勉努力刻苦勵精の精神に於て家業に従事せぬならば・決して幸福は賜はらぬものである

〔え〕 英雄と功業の話

英雄即ちヒロ(英語)とかヘルド(獨語)とかいふ名稱は・此の言葉を聞くだけで已に・いさましひ感じを惹き起すもので・然かも其の裏面には又悲惨な感じを惹き起すものが少なくないのである・宋代の人・姓は曾・名は鞏・字は子固といはれたものの詩に虞美人草と題したものがあつた・虞美人草といふは植物學上で Papaver Rhoeas L. といふもので罌粟科(ケシ科)の一種で極くやさしい草本で有毒植物の一種である・英雄楚の項羽の愛人・虞美人・自殺の墓の上に生じた草だといふので虞美人草と呼ばれることになつたのだとのことである・子固の歌つた虞美人草は英雄項羽の事蹟を歌つたものである・其の歌は古文眞寶前集卷二に出てゐるから讀んで見玉へ英雄の末路が巧妙に歌はれてある曰く

- (一) 鴻門玉斗紛如雪 十萬降兵夜流血
- (二) 咸陽宮殿三月紅 霸業已隨烟燼滅
- (三) 剛強必死仁義王 陰陵失道非天亡
- (四) 英雄本學萬人敵 何用屑屑悲紅糝
- (五) 三軍散盡旌旗倒 玉帳佳人坐中老
- (六) 香魂夜逐劍光飛 青血化爲原上草



- (七) 芳心寂寞寄寒枝 舊曲聞來似歛眉
- (八) 哀怨徘徊愁不語 恰如初聽楚歌時
- (九) 滔滔逝水流今古 漢楚興亡兩丘土
- (十) 當年遺事久成空 慷慨樽前爲誰舞

- (一) 鴻門の玉斗・紛として雪の如し・十萬の降兵・夜・血を流す
  - (二) 咸陽の宮殿・三月・紅なり・霸業・已に烟燼に隨て滅す
  - (三) 剛強なるは必ず死し・仁義なるは王たり・陰陵に道を亡ふ・天の亡ぼすに非らず
  - (四) 英雄・本と萬人の敵を學ぶ・何ぞ用ひん・屑屑として紅粧を悲しむことを
  - (五) 三軍・散じ盡して旌旗・倒る・玉帳の佳人・坐中に老いたり
  - (六) 香魂は夜・劍光を逐て飛び・青血は化して原上の草と爲る
  - (七) 芳心・寂寞として寒枝に寄す・舊曲・聞き來つて眉を歛むるに似たり
  - (八) 哀怨・徘徊・愁へて語らず・恰も初めて楚歌を聽く時の如し
  - (九) 滔滔たる逝水・今古に流る・漢楚の興亡兩ながら丘土
  - (十) 當年の遺事・久しく空と成る・樽前に慷慨して誰が爲めか舞はん
- これが英雄の末路で・今から思へば漢の高祖も長安城外・驪山山下の一土墳に過ぎず虞美人の塚も長江

沿岸烏江の一孤墳に過ぎぬので・如何にも哀れ果(ハカ)なきものなれど・然も二千年來依然として其の事蹟を青史に留むるに於ては・又以て愉快此の上なしと言ふべけん

英雄那翁はコルシカの一孤島より蹶起したるものではないか?? 然も歐洲を席捲したでは無いか?? 然も其のセント・ヘレナに於て五月五日・數人の從者に護られて逝去した・其の末路の何んと哀はれることぞや・去れど吾輩は大夏高樓に在りて羽二重造りの布團の中で名も無く往生するよりも數百萬倍・名譽なことであると思ひ・男子たるもの・此の世に折角出た以上・虎の皮では無いが・せめて恩田重信の名を此の世に留めたいと思ふてゐるのである

諸君!! 見玉へ天下の所謂英雄なるものを・日清日露の戦役に從軍した將士だけでも隨分多いではないか?! 然も其の今日に名の存するもの幾人あるか?? 吾輩の從兄の中に戦功によりて男爵に叙せられたものもあり又少將に陞つたものもあるが・其の名は今は何としてきこえぬのである・吾輩の親父が貧苦の下・茅屋の内に斃死したのと・何等相異なる所はないのである・吾輩は烏江の窮死も決して厭はない・セントヘレナの窮死も決して厭はない・否・吾輩は張りつけでも火あぶりでも・鋸びきでも決して厭ひはせぬ・只希望する所は・後世に名の残らんことのみである

然も今の世は完全に清世で・項羽や那翁の眞似は出來ないのである・少くも馬占山程の名さへも成し得られないのである・軍人となつて満露國境あたりへ出かけても恐らくは名の残る様な人にはなれまい



と思ふ・文豪沙翁は

激戦の月桂冠を荷ひ數度の戦勝の後・一度重傷を負ふた英雄が名譽帳から刷毛で拭はれた如くなり其の功業も忘れられて・且つ其の報酬も消ひ失せて仕つた

Der Held, der schwerer kämpften Lorbeer trug,/Nach tausend Siegen einmal überwunden./

Ist wie gestrichen aus der Ehre Buch,/Sein Tun vergessen und sein Lohn verschwunden./

W. Shakespeare. Übers. v. Schlegel.

と歌つたといふことであるが・實際は此の歌の通りである・であるから名を後世に留めんと欲するならば・英雄の眞似をしたのでは到底駄目と諦(アキラ)めねばならぬ・吾輩の從兄の如く榮爵を拜しても・夫れは一時の名譽で名の残るといふことにはならぬのである・況んや千萬長者に於てをや然らば如何にしたならば名を残し得るかといふ・に其れは魏の文帝の申された通り文章に依るより外に名案は無のである・文帝は

文章は經國の大業・不朽の盛事

と申されたのである・見玉へ頼山陽の日本外史を!!又見玉へ十遍舎一九の膝栗毛を・更に又見玉へ尾崎紅葉の金色夜叉を・是等の著書は正史と言はず稗史と言はず其の著者の名は是れと共に永く此の世に存するではないか?不朽の盛事とは此の事である・末技の様だが・せめては一茶ほどになれ子規ほどに

なれ・とにかく名を残さなくては・生甲斐がない・名の残る様な仕事をせんければ嘘(ウソ)だ但し生活の爲めや物質の爲めの努力では・たとへ其れが文章であつても其の文章は決して後世には残らぬのである・詩人杜甫は

文章憎命達(文章は命達を憎む)

といふた・文章で榮達することは・不可能だといふことである・今の文士は文を賣つて榮華な生活をなすのである・其の文章の世に留まらぬのは當然である J. G. Seume(ゾエメ)の警句の中に

只評判のために争ひ・そして名譽のために争はぬ様であるならば・其の人は結局 Lanzenknecht

(槍持野郎)に過ぎぬ

といふのががある・提灯持といふものは今・現に世間に存してゐるが・槍持野郎といふものは・大名行列にどうか知らん・文士仲間には有るまゝと思ふ如何 Chr. F. Gellert(ゲルレルト)は

Wer nicht mit Helden fecht, lernt niemals Helden gleichen.

英雄と闘はぬ人は學んでも決して英雄と同じにはなれぬ

といふたのである・尾崎紅葉の上に抜出るべく努力せんければ金色夜叉以上の著述は出来るものでない十遍舎一九の上に抜出るべく努力せんければ膝栗毛以上の著述は出来るものでない・十遍舎や紅葉は慥かに文豪である・英雄である・此の如き英雄は慥かに木曾義仲や熊谷次郎直實と其の名に於て馳驅



することが出来るのである・位階勳等の高きは決して羨むべきものでない・文豪シルレルは

Dem Menschen bring' ich nur Tat in Rechnung. Friedr. v. Schiller.

予は人間に只功業のみ計算に入れる

といひ・又文豪ゲーテは

Die Tat ist alles, nichts der Ruhm. J. W. v. Goethe.

功業が全部である・光榮のためのものはなし

といひ又

Du im Leben nichts verschiebe; Sei dein Leben Tat um Tat!

汝・生活に於て躊躇するな・汝の生活をして功業のための仕事たらしめよ

といふたそうだ・吾々は食ふためや飲むために生存してはいけない・功業のために衣食せねばならぬのである・功業とは社會人類のため・功德(クドク)となる様な事業といふことである・吾々は毎日飲食してゐるが見玉へ寸毫も社會人類のための功德とはなつて居らぬではないか??むしろ穀(ゴク)潰しの詆りを受けてゐるではないか・文豪シルレルは

Die Stunde dringt, und rascher Tat bedarfs. Friedr. von Schiller.

時刻は逼つた・そして迅速な功業が必要だ

と申したのである・今や躍進期に踏込んだ帝國は・正に功業の必要に逼られてゐるのである・働らけ!!  
働らけ!!

〔て〕 貞操と同穴の話

易(エキ)の卦(ケ)に震下坎上といふのがあつた即ち☳(震)が下にあり☵(坎)が上にある卦で此の卦の説  
明に

恒其徳・貞

その徳を恒(ツネ)にする・貞(タダシ)

とかいてあり・貞の説明には

女が操を守つて動かぬこと

とかいてある・この貞と操との二字を以て成語としたのが貞操であるから・貞操は女子の道德の最も大切なものの一つである・従つて女子は貞操觀念を堅く心得て居らねばならぬのである。

抑も女子が男子に連れ添ふ所以は・何んのためか!!アメリカあたりの人間に言はせれば或は「愛の結合だなどと言ふかも知れん・成る程・口では愛の結合だらう併し實際は情慾の結合ぢやないか??女子の容色が衰退すれば男子は忽ち妻を去るではないか??男子の勢力が衰退すれば女子は忽ち出て行くでは



ないか!!沿海州あたりの赤露人は六個月を一期として同棲生活をなすといふことである。個様な夫婦でも尙且つ「愛の結合」と言ひ得るか。どうか??淫賣婦の延長とも言ふべきものぢやないか??日本にも個様な悪思想が滲(シミ)込んで戀愛至上主義なんて立派らしい文句を言ふ人間が多くなり。そしてイレン・ケイとかいふスエデンあたりの不貞・腐れ婆婆のお談義を・金科玉條に心得て・其れを得意に振廻はす女性學者(!)もチラホラ見ゆるのである。吾輩は其の話を聞きたびに眉をひそめて「困つたものだ」と嘆息してゐるのである抑も女といふものは陽電氣の發動に伴ふて發現した陰電氣の如きもので。男あるがために現はれた人格で男がなければ女は當然其の存在を失ふものであるから正しく言へば女は男の附屬物なのである。古人が

## 夫唱婦隨(千字文)(夫・唱ひ婦隨ふ)

と言ふたのは眞理である。従つて女子たるものは必ず男子の配偶者となつて此の世を終始せねばならぬ筈なものである。即ち亭主の家は自分の天與の家と心得ねばならぬ筈なものである。そして嫁に適(ユ)くことは自分の本當の家にかへることであるから。古來・嫁にゆくことを歸(トツ)ぐと言ひ傳へてゐるのである。従つて嫁が離婚されて生家へ復(カ)へることを戻るといふのであり。世間では

## 彼(ア)の女(ランナ)逆戻(ギャクモド)りしたぞ

と惡評するのである。女子の最大耻辱といふものである。赤露の婦人や亞米利加ミネソタ州あたりの婦

人の如く今日・甲某から離れて明日乙某にゆく。是れでは假令へ法律に違反して居らぬにもせよ淫賣婦と擇ぶ所は全く無いではないか??貞操なんて美しい觀念がどこに發見し得られるか??蓋し婦人といふものは一旦・許して嫁した以上は。どんな事情があつても其の家を去つてはならぬのである。否・其の去るのは天地の道に背く處の行爲で人格者としては此の上もない耻辱なのである。主婦とは一家を主宰する婦人といふことである。即ち嫁した家を後ろにして出てゆくのは。一國の城主が國を捨て四方に放浪するのと同じことで亡命者たるの謗(ソシ)りは免がれぬのである。志操が堅固でないから。こんなことになるのである。斯様(コン)な女を即ち不貞な女といふのである。言ふこと勿れ

## 折角嫁に適つたが・亭主の心得が・氣に食はぬから出て來たのだ

と・又言ふこと勿れ

## 折角嫁に適つたが舅姑(シット)が矢筈しいから出て來たのだ

と・是れは遁辭である。我輩から言はしむれば

## 離婚されて出て來(ク)る様な女は・耻辱を知らぬ・腑甲斐ない馬鹿娘である

と・個様に言ふのである。蓋し知慧の無い・遲鈍な人間に斯様(コン)な事件が被(カブ)さるのである。吾輩も若い頃士官として軍馬に騎(ノッ)て見たこともある。軍馬・殊に騎兵隊の馬は精選されてゐるが。それでも其の中に駿馬と駑馬との相異がある。其の駿馬に乗つたときは。我が心に思ふ通りに馬が動い



て・其の時の氣持は全く愉快で天地の潤(ヒロ)きを感得するのであり・そして其の馬に中心からの愛を加へたく思ふのであるが・たまたま厩の都合で驚馬に乗せられたら最後・其の日の乗馬練習の終るまで苦勞するばかりでなく・二度と斯様(コン)な馬には乗りたくないと思ふ様になるのである

女は亭主の家の騎馬だ・其の遺棄されるのは驚馬であるからである・一日に千里を馳するが如き駿馬たるもの・千金を出して求むる人はあるであらう・左様な良馬を誰れか遺棄せん・どんな姑でも・お松どのお竹どの・ナアもし・ナアもしと言ひ寄りて他頼る筈である・況んや亭主に於てをやだ・出て來(ク)る様な女は結局・寶曆年間の流行語ぢやないが・アンボンタンたるの嘲けりをまぬがれぬのである・獨逸では個様なアンボンタンをトオリツシエ・フラウ Thorische Frau と云ひ・伶俐な男子は・輕石(浮石)と心得・瞥見だもせぬのである

要する處・女子は男子に連れ添ふべきものであるが・其の一旦連れ添ふた以上は如何なる場合でも・堅忍不拔・以て主婦たるの責務を全ふせんければならぬ詩經の上卷邨(ハイ)一之三などを讀んで見給へ婦人が夫(ヲット)に疎略にされたときの痛苦が綿綿とかいてあるぞ

我心匪石・不可轉也・我心匪席・不可卷也

我が心・石にあらず・轉ずべからず・我が心・席にあらず・卷くべからず

なんて有名な文句が出てあるぞ・自ら氣病を起して・神經衰弱などに陥りてはいけない・努力一番・勇猛

精進・以て婦人の任務を全ふせんければならぬ・子供でも多く儲けた上に夫が不治の病に臥し・失職して月收の道・絶えた様な場合を考いて見給へ・婦人たる汝は如何なる處置を講ずる積りか??凡そ女子・身を人に許すに當りては少くも先づ此の如き場合を考いなくてはならぬのである・女子諸君は・愛が有るとか無いとか言ふが・實際斯様(コン)な場合に遭遇して見給へ・諸子の愛なるものは恐らくは全滅して唯悲愁に沈むのであらう・甚しきに至りては親子・もろともに心中でも爲(ス)るであらう・こんなことは新聞の三面記事に幾らも出て來(ク)ることだが・實は意氣地の無い野呂間の演戯に過ぎぬのである女子諸君!!以て如何となすか??

古人は

不遇盤根錯節・何以別利器乎

盤根・錯節に遇はずんば・何を以てか・利器を別(ワカ)たんや

と言ふたでは無いか??絶大な艱難に遭遇してこそ・始めて利巧か馬鹿かが判るのである・言ふこと勿れ

婦人は弱きものなり

と・見給へ剛堅な齒は折れて柔弱な舌の存することを・奮勵努力の氣慨さへあれば・艱難我れを玉にするの恩人となるのである・昭和維新時代の女子は・此の如き精神なくてはならん・男(ヲトコ)に肌を汚されないばかりが貞操では無い・男(ヲトコ)に可愛がらるるばかりが愛では無い・身骨を粉碎して夫



(ラット)の爲めに盡す・其れが眞正な愛でありリイベ・Liebeであり・そしてラブ Loveであるのである・易に

其の徳を恒にする

といふも此のことであり・禮記に

壹(ヒトタ)び之れと齊(ヒトシ)ふすれば・終身・改めず

とかいてあるのも此のことであり・詩經に

髻(タン)たる彼の兩髻・實に維(コ)れ我が儀(タグ)ひ・死に之(ユ)くまで矢(チカ)つて他なからん

と歌ふてあるのも此のことであり・そして論語に

歳(トシ)寒ふして然して後に・松柏の凋(シボム)に後(オク)るるを知る

と述べておかれたのもこのことである・有爲の婦人諸君!!思はねばならぬのである

西洋紀元三十年頃にバネリウス・マキシムスといひる人があつた・此の人は曾て

Keuschheit, du bist der Tugend beste Stütze, wie beim Weibe, so beim Mann. Valerius

Maximus. (deutsch)

貞操は女に於ても男に於ても・道德の最も善き支持である

といふておいたが・實際男にも貞操は必要だが・女子には特に必要なものである・近頃の女子は殆んど

残らず貞操觀念を失ふてゐる様に見えるのである・性慾事件は現實に検討し得ざるが故・明確に事實を指摘し得ざれども高等女學校や女子師範學校などに従事する教師や校醫などの座談に依れば今日の二十歳の女子にして男子の肌に觸れざるものは其の數・三十バアセントに達せぬといふことである・慨歎に耐えぬ事實ではないか??

西洋紀元三百四十年乃至三百九十七年頃にアムプロジウスと呼べる學者が居られた・此の學者の義務論中に

Die Schamhaftigkeit ist eine Begleiterin der Keuschheit. Ambrosius (um 340-397)

Uebers. von Binder.

恥羞は貞操への誘引者である

といふ名句があるといふことである・今日の女子は・我輩の觀察する所に依れば一般に恥羞心が發達して居らん様である・五六十年前の女は其の笑ふことさへも恥て顔を手にて隠くし或は袖にて隠くし若しくは頭(カウベ)を下げつつ左に向ふたのであるが・今の女子は口を大きく開(ア)き正面に向つて大きな聲(コヒ)して笑ふのであるのみならず・下(シモ)がかりたる談話を聞いても・赤面するが如き女は殆んど見當らぬのである・従つて臀部など・突き付かれても・恥づる氣色(ケハヒ)を見せぬばかりでなく・却つて戯れた男に戯れ懸る様な態度を示めすのである・其の有様は色氣の無い七ツ八ツの女子(ヲ



ナゴ)の如くである

現今の女子・特に高等女學生は・此の如く恥羞心に乏しきが故・おめずおくせず・平氣で男子の部屋など  
に出入し・一緒になりて遊戯などするのであるが・人(ヒト)となりたる女子・如何でか人情起らざらん  
遂に男子の乗ずる處となつて・さては・其の天與の美德を失ふて仕舞ふのである・英國の俚諺に

Chastity is like an icicle; if it once melts, that's the last of it.

貞操は氷柱の如し・一度溶ければ・それが最後

といふのがあり又

When a woman has lost her chastity, she will shrink from no crime,

婦人・一度貞操を失せば・何の悪事か・爲さざらん

といふのがある・今の女子は皆此の俚諺に相當したものである・處女膜の破れた高等女學生が七十バア  
セントに及んでゐるといふ風説も或は眞實な風説かも知れない・花柳界に花柳病豫防藥の賣れるのは  
無理もないことだが・インテリ階級の處女界に花柳病豫防藥の盛んに賣れるのは不思議な現象と言は  
ねばならぬ・噫

今や世は末えとなれり・今にして

忠臣不事二君(忠臣は二君に事へず)

貞女不更二夫(貞女は二夫を更へず)(史記田單傳)

なんて文句を掲げて見た處で恐らくは妙齡婦人の一笑を買ふに過ぎぬであらう・併し吾輩等は物質生  
活を趁ふものでは無くて・精神生活に生きんとするものであるから・爆彈三勇士の如き義烈の兵を賞し  
そして秦(ハダ)の貞雄の妻の如き・三十二年の苦節を愛するのである(幼學綱要貞節篇參看)然も斯様  
(コン)な婦人は今日寥寥晨星の如く稀れなのである・西洋にも

Je ne change qu'en mourant.

我は死ぬまで渝(カハ)らぬ

といふ格言もあるが・エレン・ケイの様な阿婆擦れ女が現はれて・氣任せに男を取替えて恥ぢぬことを  
説いたため・今は西洋でも

Fidelity is the sister of justice.

貞節は正義の姉妹なり

なんて金言を悉く反故に仕てゐるのである・況んや偕老同穴なんてことに於てをや・總理大臣を勤めた  
原・敬さん御夫婦は日本で言はば片田舎の盛岡なる・その大慈寺に歛められて永く眠られて居るので  
ある・蓋し是れが人道の正格であるのである・如何に窮すればとて一旦連れ添ふた夫をば決して見捨て  
はならぬ自分の死骸は必ず夫の傍らに歛めて貰ふ様に用意せんければならぬ・かくてこそ眞正の愛が



成立し借老同穴の美くしい契りが完結されるのであり・家族制度も立派に實現するのである・西洋にも

A faithless wife is the ship-wreck of a house.

不貞の妻は一家の破滅なり

といふ箴言がある・女子たるもの・再思参考せねばならぬことである

### 〔あ〕 悪と争ひの話

悪の古文は亞である・獨逸語の Böse, Schlechte 英語の Bad, Ill, Evil などと同じに用ゐられる文字で善(Gut, Good)の反對語である・蓋し此の悪あるがため此の娑婆は極めて不愉快なものとなり・同時に又危険なものとなつてゐるのである・書經の洪範に列擧された六つのわるいことの其の一つが此の悪で・醜陋なりと注釋されてゐる通り・悪の世界は醜陋で・見るにも聞くにも・勝えられぬものである  
古い本に

心正而行修曰善(心・正ふして行ひ修まるを善と曰ふ)

とかいてあり・同時に善は悪の反・悪は善の反とかいてある・であるから心も正しからず・行ひも修まらざれば・其の人は即ち悪人であるが・然らば正しくない心とは・どんな心か??修まらない行ひとは・どんな行ひか??能く考究する必要がある

或る法律の本に

道義觀念の意志に反するものを惡意と名づく

とかいてある・是れに依れば・惡意の何たるを理會するには・先づ道義・其のものに就ての知識が必要である・蓋し本當の教育は人々に

(一)どんなことが正しくないことか??

(二)どんなことが道義に外(ハ)づれたことか??

此の二つを教えることである・言ひかゆれば・人間に惡事をさせぬやうにするのが本當の教育で其の他の教育は此の目的を達成するための手段方便に過ぎぬのである・即ち

宗教は宗旨即ち信仰の標準を設定し其の標準に據て人を導き・そして人間に惡事惡業をさせぬやうにする教えであり

儒教は儒者の道・即ち人道を解説し其の解説に據て人を善に導き以て此の世界を平和ならしむる教えであり・そして

西洋では天地創造の主(メシ)・即ち神(カミ)ゴットを假設し・其のゴットを信仰せしめ・以て人を善に導く様な組織になつてゐるが

我が國では信仰こそ自由であるが・教育の本筋は人道に據てゆくのであるから・苟も日本國民たるもの



は先づ第一に人道を心得ねばならぬのである  
然らば

人道とは何んぞや??

といふに・それは六つかしいことではない・知らうと思へば直ぐ知れることであり・然も遠い所にある  
のではない・極く手近い處にあるのである・聖人孔子も已に

仁遠乎哉・我欲仁・斯仁至矣(論語述而篇)

仁・遠からんや我れ仁を欲すれば・ここに仁至る

といふておかれた・其の仁が所謂る人道の主幹であるのである蓋し仁とは文字で二人とかく・人と人  
と相寄つて社會 *Gesellschaft* を形成し・平和に進まんとするとき・其の人と人との間に軋轢や鬭争の  
起らぬやう・圓滑に運ばれてゆくやうにする・其の心がけが孔子の所謂る仁で左様に心がける人が人道  
をふむ人・即ち仁者と呼ばれるのである

であるから惡の何たるかを知るには・先づ第一にどんなことが人道 *Die Menschheit, Humanity* であ  
るかを知悉せねばならぬ

抑も人は本來・善を好み惡を嫌ふものであるが・其の善を好む人が惡を爲すといふのは・惡の惡たるこ  
とを知らぬため・知らず知らず惡を爲す様になるのであるから・根本的に又徹底的に惡の惡たるを知ら

しむれば人は必ず惡事を爲さぬ様になる筈である・といふのが古聖ゾクラテス(ソークラテース) *Sokra-*  
*tes, Socrates (469-399 v. Chr.)* の知徳合一説なのである・ゾクラテスは

不徳は無知から來る(渡邊政盛著・最新哲學辭典・ソークラテース項)

と説いておいた・蓋しどんな人でも・是れは悪い事・是れは善い事と・一一善惡を知悉してみると・善は  
たとへ爲(シ)かねても惡は爲(セ)ぬものである古人も已に惡るいと知つて其の惡るい事を爲すものは  
決して無いと言ふておいた如く・惡事惡業は總て知らぬ處から起るもので・知れば惡るいことは出來ぬ  
のである・例令へば立派な富貴の令嬢で萬引などを敢てなさることがある・是等も萬引の惡事たること  
を・能く承知して知らぬ處から起ることで・惡るいことと知つた以上は決して出來ぬ筈である西洋の哲  
學の本に

惡の本體は我慾である

*Das Wesen des Böses besteht in der Selbstsucht.* Kirchner's philosophisches Wörterbuch.

とかいてあつたが・恐らくは此の萬引令嬢も・一時的にムラムラと起つて來た我慾に惑はされ・知らず  
知らず其の慾にひかされ・萬引する様なことになつたのであらう  
人間には良心とか本心とか乃至 *Gewissen* とか *Conscience* なんていふものが慥かに存してゐるには  
相違ないが・又他の動物と同じく自家保存之動機 *Der Selbsterhaltungstrieb* (生存慾)といふものを持



てゐるに相違ない・令嬢が萬引されたのは一面には我慾 *Selbstsucht* が其の原因ともなつて居るであらうし又一面には生存慾 *Selbsterhaltungstrieb* が其の原因ともなつて居るであらう・要する處動物根性の奴隸となつて・人道を履みはずした爲め萬引といふ様な惡事を敢て爲(シ)たのである・又西洋の本に

人には存立の慾もあり

飲食男女の慾もあり 其の他

財産所有の慾もあり

名譽や權力獲得の慾もある が

是等の慾念も理性 *Die Vernunft* と反省 *Die Berücksichtigung* とで節制し尙周圍の人々の身上に顧慮しつつ適當に之れを走らすれば・たいして非難する所はない云云といふ意味がかいてあつたが・慾心の強勢な場合には・正しい道は仲仲たどり難いのである・パウゼン氏の倫理之系統と題した本には

人の本性中には惡を爲す傾向が深く根づけられてある(一卷百五十九頁)とかいてあり又同所に

人性には善にして美なる素質もあるが・同時に又惡を爲すものだといふ言葉に裏書きするやう

な傾向の現はるることも疑いのない眞理である云云

とかいてあり更に又同所に

人間は他の動物に會て見ない所の二つの毒牙を持つて生れたものである其の二つの毒牙とは嫉妬

*Der Neid* と惡意 *Die Bosheit* と是れである云々

とかいてある・昔し苟況といひ・時人が尊敬して苟卿と呼んだ所の支那の哲學者は賢人孟子の性善説に反し性惡説を立たた人であるが此の苟卿先生もパウゼンの様な考いを持つてゐたかも知れん・けれど善といひ惡といふも・其の實際は・是れが善・是れが惡と・判然定(キ)まつてゐるものではない・飯は生を維(ツナ)ぐものであるが・過食すれば生を損するが如く程度的のものである・人を殺すことは惡るゝことに相違ないが法律で正當防衛 *Die Nothwehr* (獨逸民法二百二十七條參看)と見留められるやうな場合には人を殺したからとて罪にはならぬ即ち惡く無いのである・であるから總ての事柄は・事柄をれ自身には善惡は無いと見てよろしい・言ひかゆれば・善といひ惡といふも・皆比量しての上のことに過ぎぬのである

所で事物や事件を比較し比量するには必ず標準を設定せねばならぬ即ち先づ標準を定(キ)めておいて其の標準に適するものを善とし正とし・そして其の適せぬものを惡とし邪とするのである・日本の哲學の字引に



道德的標準に一致せざるものは悪なり

とかいてあつたが、此の道德的標準 Das Moralprinzip なるものが又仲面倒なもので、西洋の哲學者仲間にも其の説く所は區區で殆んど一致して居らぬのである(私のかいた道德の標準と題した本を「ごらん下さう」)

であるから善惡の區別なんてことは言語や理屈ぢや決して定(キ)めることの出来ないものと承知すべきであるが然し日本には

是れさへ守ることが出来れば總ての思想・總ての言語・總ての動作が悉く善事となる

といふ・左様な結構なことが有るのである・蓋し其れは餘の義ではない

父母の恩を確認する

といふことである・即ち父母に心配をかけさせぬように・努力してみようといふ一念が腦裡に儼存するときは其の人は決して悪るいことを言ふたり爲(シ)たりはせぬのである・近い話しだが學生が試験に落第するのは・もとより善くないことであるが・此の學生が若しも

落第したときは・父母がいかに心配するだらう

といふことを平生に考へてゐたならば・此の學生は決して落第はせぬのである・言ひかゆれば落第は父母の恩を等閑に附した其の罰といふべきである

それから男女の互に愛着するは天性の然らしむる所で是れを無視することはもとより出来ぬことである・けれども男女が勝手に交際して・それで父母が尙且つ心配しないのであるか??どうかといふことを考へて見玉へ・若し此の學生が一たび思ひを此處(ココ)に致したならば・此の學生は恐らくは不倫な行為に墮落するやうなことは無いであらう

であるから學生が競技をなす場合でも乃至酒を呑む場合でも若し一たび之れに就て父母が心配するか??どうかといふことに思ひを致したならば・危険なことや不品行なことによりて悪書生と評判される様なことには及び至らぬであらう

論語の學而篇にも

孝弟也者・其爲仁之本也(孝弟は其れ仁を爲すの本か)

とかいてある・孝とは親に心配をかけぬことであり・弟とは兄弟姉妹に心配をかけぬことである・親(ヲ)ヤ)兄弟に心配をかけぬやうな人は其の爲す處・其の言ふ處・悉く仁愛的で全く惡から離脱してゐるのである・西洋の倫理學といふ文字の定義には

(一)風俗習慣の學とあり

(二)善惡の學とあり

(三)倫理現象の學とあり



- (四) 人生の目的・理想及びこれが手段方法の學とあり
  - (五) 品性行爲及び其の理想の學即ち品性行爲規範の學とあり
- 最後に

(六) 人と人との關係の學

とかいてあつたが・殊に兩親と自分との關係を能く熟慮すれば人間は決して惡道に墮落するものでない・聖人孔子が

苟志於仁矣・無惡也(論語里仁篇)

苟くも仁に志ざせば惡なし

と述べておかれたのは・ここの處を教えられたのである

佛教の經典の中に

貪瞋癡(トンジンチ)の三毒

といふことがある

癡とは人間が愚鈍で物の道理を説いてきかせても一向に其の道理がわからず・のみならず・自分の思ひ込んだ所にかぎりついて・親の言ふこともきかず・先生の言ふことも・馬耳東風に聞き流す様な人間のことであり・そして

瞋とは自分の氣に叶はぬ事柄や人物に對し・無勘辨に亢奮し目を張り青筋を立て・顔面に朱を流し・咬みつく様な態度で怒號する・左様な人間のことであり・それから次の  
貪は貪慾と稱し・自分の思ひ欲する處の事物を・無闇に取り入れやうとする・言はば慾の深い人間のことである

蓋し此の三つの毒物は總ての惡業の原因たるもので・直接社會に害を及ぼさぬとも・間接には少なからぬ害を及ぼすものであるから・社會教育成人教育の上から見て此の三毒の毒煙は毒瓦斯防護の例に倣ふて驅除に努めねばならぬ・特に強慾は・惡徳の隨一で・之れがため當人自身も氣の毒ながら種々の苦痛に沈むのである・法華經にも

諸苦所因・貪慾爲本(シヨク・シヨイン・トンヨク・イホン)

とかいてある・貪慾が原因となつて一切の苦痛が生じ來るといふことである・飯も食ひ過ごせば胃病で苦しみ・女色も度を過ごせば腎虛で苦しみ・歡樂も度を越せば悲哀の苦を感じ・官位も身分に越ゆれば滅亡の悲みに沈むのである・のみならず・貪慾のため・或は他人にも損害や迷惑をかけて・遂には妬(ネタミ)嫉(ソネミ)を受けて・甚しき場合には殺される様なことにも立ち至りて・父母兄弟の悲嘆を招來する様なことにもなるのである

是れ等のことを能く能く考いて身を處すれば・決して怨みを買ふ様な虞れもなく社會も平和を現(ゲ



ン)じ人類は安樂に此の世を送るようになるであらう。従つて此の世界にも惡事災難不祥不吉が跡を絶つようになるであらう

聖人孔子は吾々に三つの戒(イマシメ)を貽しておかれた曰く

君子有三戒・少之時・血氣未定・戒之在色・及其壯也・血氣方剛・戒之在闘・及其老也・血氣既衰・戒之在得(論語季氏篇)

君子に三戒あり・少なるの時・血氣未だ定まらず・之を戒しむること色にあり・其の壯(サカン)なるに及んでや・血氣方(マサ)に剛(ツヨ)し・之を戒しむること闘(タタカイ)にあり・其の老(オユル)に及んでや・血氣既に衰ふ・之を戒しむること得るにあり云云

見玉へ!!色情を戒しめ・闘争を戒しめ・そして慾得を戒しめられたことを!!世間の惡事は殆んど此の三事から派生したものに外ならぬのである・教育の任に當るもの・思ひをここに致さずんばあるべからずとす

〔注〕争ひのことは割愛して詳説せぬ

### 〔七〕酒 の 話

舊約全書 Das alte Testament, der alte Glaubensverfassung の箴言 (Spr. Sal.) の第二十章第一節

には

酒は・人をして嘲けらせ・濃酒(コキサケ)は・人をして騒がしむ・之に迷はるる者は無智なり

とかいてあり・又其の第二十一章第十七節には

宴樂(タノシミ)を好むものは貧人(マツシキモノ)となり・酒と膏(アブラ)とを好むものは富(トミ)をいたさじ

とかいてあり・それから第二十三章及び第三十一章等の各節に

禍害(ワザハヒ)ある者は・誰ぞ・憂愁(ウレヘ)ある者は・誰ぞ・争端(アラソヒ)をなす者は・誰ぞ・煩慮(ワヅラヒ)ある者は誰ぞ・故なくして傷(キズ)をうくる者は・誰ぞ・赤目(アカメ)ある者は・誰ぞ・是すなはち酒に・夜をふかすもの・往て混和(マゼアハ)せたる酒を味ふる者なり・酒はあかく・盃(サカヅキ)の中に泡だち・滑(ナメラカ)にくだる・汝これを見るなかれ

レムエルよ・酒を飲むは・王の爲すべき事にあらず・醇醪(コキサケ)を求むるは・牧伯(キミ)の爲すべき事にあらず・恐らくは酒を飲んで律法(オキテ)をわすれ・且すべて惱(ナヤマ)さるる者の審判(サバキ)を枉(マ)げん・醇醪(コキサケ)を亡びんとする者にあたへ・酒を心の傷める者にあたへよ・かれ飲みて・その貧窮(マツシキ)をわすれ・復たその苦楚(ナヤミ)を憶はざるべし

とかいてあり・それから以賽亞書の第五章第二十二節には



禍(ワザハヒ)なるかな・かれらは葡萄酒をのむに丈夫(マストラヲ)なり・濃酒(コキサケ)を和(アハ)するに勇者なり

と書てあり・そして新約聖書 Das neue Testament, der neue Bund, die neue Glaubensverfassung の約翰傳福音書 Evang. Joh. 第二章第一節以下には

第三日(ミツカ)めにガリラヤのカナにて婚筵(コンエン)ありしがイエスの母も此に居れり・イエスと其の弟子も婚筵に請(マネ)かる・葡萄酒器(ツキ)ければ母・イエスに曰ひけるは・彼等に葡萄酒なし・イエス・彼に曰ひけるは婦(ランナ)よ・爾(ナンヂ)と我と・何の與(カカハ)りあらんや・我が時は未だ至らず・その母・僕等(シモベラ)に向て彼が・爾曹(ナンヂラ)に命する所の事を(セ)よと曰ひ・ユダヤ人(ビト)の潔(キヨメ)の例に従ひて・四五斗盛(イリ)の石甕(イシガメ)六(ムツ)かしこに備へ有しが・イエス・僕等(シモベラドモ)に水を甕に満たせよと曰ひければ・彼等・口まで満たせり・又これを今挹取(クミトリ)て持ゆき・筵(フルマヒ)を司(ツカサド)る者に與(ワタ)せと曰ひければ彼等わたせり・筵(フルマヒ)を司る者・酒に變(カハ)りし水を管(ナメ)て其の何處(イツク)より來りしを知らず・然(サレ)ど水を挹(クミ)し僕(シモベ)は知れり・筵(フルマヒ)を司る者・新郎(ハナムコ)を呼て彼に曰ひけるは・凡そ人はまづ旨酒(ヨキサケ)を進(イダ)し・酒・酣(タケナハ)なるに及びて魯酒(アシキサケ)を進(イダ)すに・爾は旨酒(ヨキサケ)を

ク)を今まで留めおけり・此の事をイエスがガリラヤのカナにて行(ナセ)るは・休徴(シルシ)の始めにして・其の榮えを顯はせり・弟子・かれを信ず

とかいてあつた・酒は二千年もの昔しから婚禮の席などに用ゐられたものと見えたり・そして酒のため法律を忘却し間違つた判決を下したこともあつた様に思はる・耶蘇教徒が教祖の教を尊重して禁酒を宣傳するのは當然のことで・誠に善いことである・想ふに酒のために現はれし害悪は・害悪の殆んど全部なるべし伊呂波四十八訓の著者は若い頃酒席に列して酒を多く飲み・それがため・腦力を弱め・進學を妨げ・ひいて人の信用を減じ終に落魄して七十六歳の今日に至つたのであるが往時の無智なりしを追憶して慚愧と後悔とに耐えなく思ふてゐるのである・我輩の從兄某も昔し家庭の不和から・無勘辨に酒を飲み中風の病に罹り十三年間臥床して終に此の世を去つたのであるが要するに酒は人生の毒物で此の酒がなかつたなら世のごたごたは半分以上に減少するだらうと思ふ

抑も酒はサケ也本名はクシで其のクシが約(ツマ)つてキとなつたから御酒をミキと呼び更に敬語を加えてオミキと呼ぶのは御興(ミコシ)に敬語を加へてオミコシと言ふのと同じ語格である・西洋人には敬語といふものが極く少ないが・日本には敬語が澤山用ゐられてゐる・君子國と謂はれるのは其れがためである・所で近頃は敬語の使用が大變に少くなつた・華客を相手にする商店の廣告文を見ても大抵わかるのである



話し岐路に這入つたが此の酒なるものは餘程古い昔しからの人間の用ゐたもので支那では儀狄といふ者・先づ酒を造り・其の後は杜康といふ者(ジュツ)(アハ)で酒を造つたといふことで・其のことが・説文に出てゐることだが吾々が十三四歳頃・母の生家の井上の叔父から借りて讀んで見た十八史略といふ・其の本の初めに

儀狄・作酒而美・進之禹・禹・飲而甘之・曰・後世必有以酒亡其國者・遂疏儀狄・而絶旨酒

儀狄・酒を作つて而して美なり・これを禹(王)に進む・禹(王)飲んで而してこれを甘(ウマシ)とし・曰く・後世・必ず酒を以て(酒で)其の國を亡ぼすものがある

といふ様な文句がかいてあつたように思ふが・兎にかく禹王に事へた儀狄が酒を造り禹が飲んだといふことであるから・耶蘇紀元前二千二百八十六年頃の話しである・従つて昭和十一年の今日から計算して四千二百二十二年程以前の話しなのである・久しい以前から酒の飲まれたことが想像されるのである

皇國でも神代の民・己に酒を用ゐたが・其の當時造酒の法を教へられた神様は大物主神(オホモノヌシカミ)であられたから此の神様が酒の神様とされてゐるが・和田英松といふ人の著はした古代造酒考といふ本には

大彥神・是造酒神也

とかいてあるよしは經濟雜誌社出版の社會事彙に詳しくかいてあるから・就いて見るがよからう・そして其の當時の酒の造り方は今日の醸造法と同様・醱酵(Garung)の法に依つたものであるが・其の醱酵の仕入れ方は頗る奇抜であつた即ち

先づ米を炊(タ)いて飯(メシ)となし・多人數寄り集りて其の飯を口に入れ嚼(カ)んで桶の中へ吐き入れ・それに蓋(フタ)して放置し自然に醱酵するを待ち・搾つて汁を集めた

のであるが・たまたま醱酵の度が越へて酒が酢(ス) Acetum, Essig になつたといふことである・故に西洋の酢 Vinegar といふ文字も酒 Vinum といふ文字から誘導されてゐるのであるといふことである(ウン)ではなし・そして醱酵的物質變化の理窟は近世に至りベルテロウ Claude Louis Graf von Berthollet (1748-1822in Paris) などの研究によりて闡明されたことであるから・人知の發達も亦随分遅遅たるものであつたことが思ひやられるのである

所で酒といふ文字に就ての解説が仲々面白い即ち「文字に就ての」其の就の文字の字音も Tsiu で酒の字の字音も又 Tsiu で共に同音であるが故

酒・就也・所以就人性之善惡也

酒(シユ)は就(シユ)なり・人性の善惡を就(成就)する所以なり

といふ解説も出來たのである・いかにも酒は人を善人にも惡人にも就(ナ)すものに相違ない・又釋名に



は

酒・造也・吉凶・所造起也

酒は造るなり・吉を造り・凶を起す所なり

とかいてある・いかにも酒は世間に吉事を惹起し又凶事を惹起するのである・所で今一つ酒の解説に面白いのがある・其れは六書正譌といふ本にあることで續長齋閑話に引かれてゐることである即ち其の六書正譌には

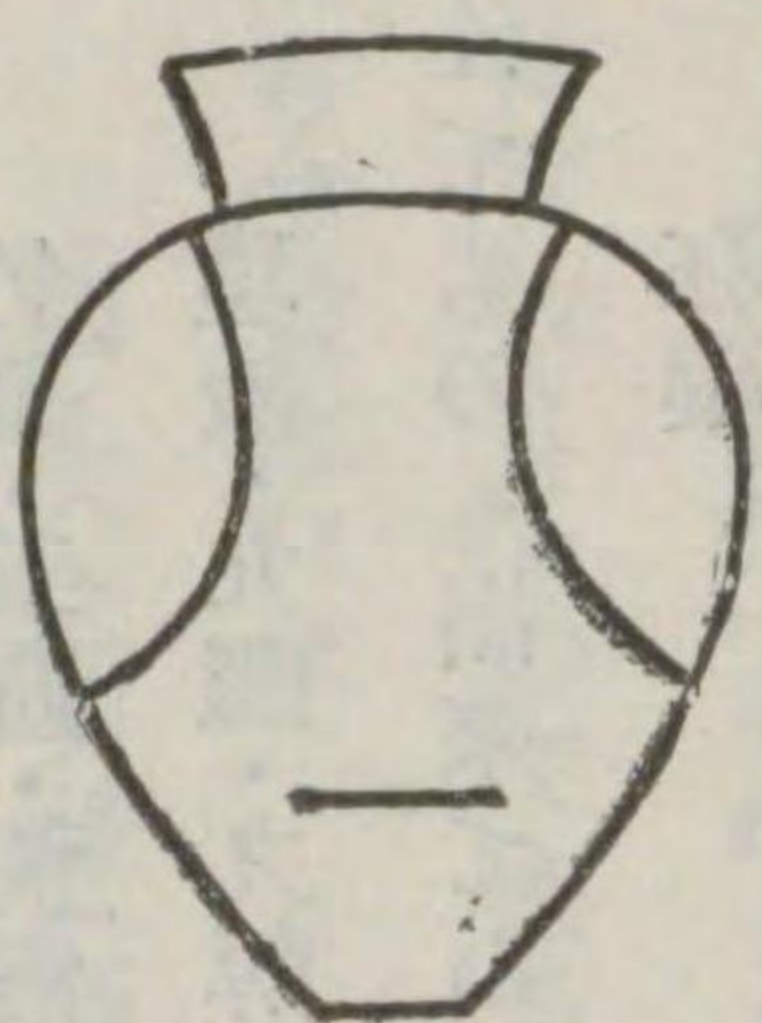
酉・就也・八月黍成・可爲酎酒

酉(サケ)は就なり・八月・黍(キビ)成(熟)して・酎酒となすべし

とかいてある・其の文句に依り長齋先生は更に布演して

酒も漢土では黍(キビ)にて作れり・黍は二月・藝(ウ)へて八月熟す・これにて酒をつくるゆへ・酒の字・水に従ひ酉に従ふ・酉は八月の名なり黍の字も禾・水に入るといふ意なり云云

と述べられたのであるが・考へて見ると説明が仲仲面白い様に思はるるが卑見によれば酉は年月の名でもなくて又就の意味でもなくて・水を貯へる器物の名であつたのである・上代の人民が水を貯へた器物は左の圖の如き形のもので其の形を文字に寫して酉が出来たのである・そして其の酉の内に酒が貯へられる様になつたので・酉の内の水といふ意を表するため酒といふ文字が出来たのである・従つて酒



に縁ある文字は残らず酉に従つてゐる・醪(ドロク)でも酎(シャウチウ)でも乃至リキョール(Liquor) eur, Likör (甘味酒)(醴)(醴)でも醴醴(レイロク)でも残らず酉に従つてゐる・そののみならず・艸根木皮の細切したものを酉の中の酒に浸し其の浸液を利用して疾病治療の徳を有(モ)つてゐた人と呼ぶための文字にさへ酉がついて醫といふ文字が出来たのである・酉は決して八月の名でもなく又就(成

就)の字の意味でもないのである

話し・少少六つかしくなつたが聞く所によれば朝鮮人の普通に飲用する酒は内地の濁酒(白馬)(ドロク)の如きもので其の名をマツカリ makari と呼び・そして上流社會で特に飲用する酒は清酒(スミサケ)で其の名をシユル shuru と呼ぶよし・これは我が門人田中豊彦氏の談であるが其の所謂シユルは酒の支那音 Tsiu に助語のルがついて出来たものだらうと思ふ・多分そうであらう

抑も酒(サケ)なるものは世界・到る處にあるもので・どんな野蠻人でも皆・酒だけは飲んでゐるといふことであり・従つて酒に關する説話も亦かなり多く存してゐる・英語では酒(葡萄酒)をワイン Wine と言ひ獨逸語でも亦酒(葡萄酒)をワイン Wein と呼んでゐるが此のワインは拉句語の葡萄(ブドウ)即ち vinum (葡萄實)から由来した言葉であるから W は V にするのが本統である

所でギリシヤ語でも酒(葡萄酒)をオイノス oinos と言ふてゐる・此のオイノスも亦本來葡萄果の名



であるから・ギリシヤの古代の酒も亦葡萄の實から造つた葡萄酒であつたのであらう・所で東洋には果酒が發達せずして穀物酒が發達し殊に米から造つた酒が日本に於て能く發達して酒精飲料では日本の酒が一等品と言はれる程になつたのである

此の日本酒・即ちミキは精米の蒸したものに麴(カウヂ)(麴(糶))と水とを加え醸造したものであるから酒の異名に

麴生・麴君

麴秀才・麴道士

麴藥・麴米春

なんてものがあり・そして酒の性を賞(ホメ)た所から

聖人・美祿・歡伯・紅友

竹葉・玉薤・流霞

瓊液・九醞・九醇

なんてものも出來てゐるが・其の害のある處から酒に

狂藥

といふ名を與えた人もある・例へば裴・楷(ハイ・カイ)字は叔則・晋代の人・石・崇といふ人を誡めて

足下は人を飲むの狂藥で・人を責むるのは正禮だ

といふた類が・それである・所で此の酒といふものには效・害・二様の徳があつて有效の一面から見れば仲仲有效なものであるが・有害の他面から見れば又仲仲有害なもので狂藥ぐらゐで濟むものでない漢書食貨志には

酒・天之美祿(酒は天の美祿なり)

とかいてあり・又同所に

鹽・食穀之將・酒・百藥之長

とかいてあるよしで・人口に膾炙してゐる名句であるが・西洋にも酒を愛(ホメ)たものがある曰く

(1) Guter Wein ist der Alten Milch.

良き酒は老人の牛乳なり

(11) Der Wein macht die Alten beritten.

酒は老人を騎(ノ)り廻はさせる(元氣づける)

(111) Wein hilft dem Alten aufs Bein.

酒は老人の脚(アシ)を扶助する 云云

なんて俚諺があるばかりでなく・耶蘇紀元前にも已に



(四) Vino pellite curasi (lateinisch)

Tilgt im Weine den Unmut! (deutsch)

酒に於て不平を退治する

といふ言葉が行はれてゐた・これは

(五) 酒は憂ひを掃ふ玉箒

と言はれた日本の俚諺に一致するのである・實際・癩(シヤク)に障(サワ)つた事のある時などには・酒ほど氣を晴らして呉れるものは無い・大星由良之助の放蕩などは其の一例であらう・韜晦・彼の如き場合には酒は全く必要なものである

(六) 酒なくて・なんのちのれが・櫻かな

といふ人口に膾炙してゐる句もあるぢやないか??昔しから詩人や慷慨の士などは皆酒を愛したのである・古聖ホオメルも酒を愛したに相違ない

(七) Laudibus arguitur vini vinosus Homeros.

Sicherlich war, denn es lobet den Wein, Weintrinker Homeros.

Uebersetzung von Voss.

飲酒家・ホオマアは酒を愛した故・確固不拔であつた

といふ古語もあるから・酒は決して毒藥では無い・が・併し愛欲に溺れるのは人間の弱點であるから・餘程其の點に注意して用ゐねばならぬのである  
そこで酒の害が盛んに唱道されるのである

Wo aber der Wein fehlt, stirbt der Kypris Reiz und ist/ Der Menschen ganzer Himmel

wüst und freudenleer!

併し酒の無い處ではキプリス(肉愛の神・エロの神)の刺戟が死し・そして人類の天地が荒廢して

歡喜の無い(つきらぬ)ものとなる

といふ古語もあるが・これは現在幾らも聴くことで珍らしくは無いが是れが抑も酒害の根元である・エロ的に酒が用ゐられたら・其の酒は必ず有害であり遂には家を破り國を亡ぼし・そして身を喪ふことになるのである

ギリシヤの史家プルタルコス Plutarchos um 50-120 n. Chr. は其の道德論の營養篇に於て

Der Wein ist unter den Getränken das nützlichste, unter den Arzeneien das schmackhafteste und unter den Nahrungsmitteln das angenehmste. Uebers. v. Eyth.

酒は飲料中最も必要なものであり・藥劑中最も美味なものであり・そして食料品中最も愉快なものである



といふたそうだが・是れは少少賞(ホ)め過ぎてゐる・マホメット教の教祖は

Erlaubt hab' ich den Wein für die Verständ'gen./Und ich verbot ihn für die Dummen  
nur.

予は酒を智者にのみ許し・そして酒を愚者にのみ禁じた

と言ふたそうだが・實際愚者には酒は禁ずべきであるが・智者にはプルタルコスの言ふた如く食料品中最も愉快なものであらう・けれども智者は世に少なくて愚者が多いから・成るべく飲酒は禁制するがよい・但し愚昧な政府を真似て法律で禁酒しようとしても・其の法律は決して行はれぬのである・殷鑑遠からず近く亞米利加を見れば判かることである・であるから道德的に教育で矯正するようにせんければならぬ・税を高くして飲酒を禁制するが如き思想は大々的に誤解である・酒税は成るべく平準以下に止めねばならぬ・そして道德的教育を奨励し各人をして自發的に節酒せしむる様な政治を施すが上策なのである・酒の害は・第一に

(1) So der Wein kommt in das Haupt/Ist der Sinne es beraubt. Vridankes Bescheidenheit  
(1225-1240)

酒が頭に來たので・精神が奪はれた

と言はれてある通り・慥かに知力は酒のため減弱するから酒は飲まぬがよろしい

(11) Wenn der Wein eingeht, geht der Mund auf.

酒が這入れば口が開(ア)く

といふのもあり又

(11) Wo Wein eingeht, geht Scham aus.

酒が這入れば耻が出てゆく

といふのもあり・尙又

(四) Wenn der Wein niedersitzt, schwimm die Wort empor.

酒・沈んで言語が浮ぶ

といふのもあり・更らに又

(五) Wein ist ein Wahrsager.

酒は眞實を語(カタ)る人である

といふのもある・酒を飲むと氣が荒らくなると同時に饒舌家となるにより平素・抱懷してゐた不平や悪る口を知らず知らず吐き出して・爲めに腹の底(ソコ)まで探(サグ)られて・意外な不運を招く様なことになり易いのである・出世や昇進を希望するものは・此の意味から言ふても・酒は飲まぬがよろしい・が然し全く酒が飲めなくても・社交上・困ることが無いでもない・もちろん



(六) *Freundschaft, die der Wein gemacht, währt wie der Wein nur eine Nacht.*

酒が作つた友誼は酒の如く只一夜限りである

と言はれてゐる如く・酒友といふものは害ばかりあつて少しも益がないから・酒呑友達は決して造るべきではない・が・酒は社交上の油の如きもので社交上の摩擦を減する爲めには無くてならぬものである  
英國の俚諺に

(七) *Vine and youth are fire upon fire.*

青年に酒は火に火を加へるが如しである

といふのがあるそうだが・實際青年に酒は猛毒物で其の身を誤るのは殆んど酒に原因してゐるのである・古諺に

(八) *Bacchus kills more than Mars.*

酒の神は軍の神よりも多く殺す

といふのがある・戦争で死ぬ人数よりも・酒で社會から死致する人が慥かに多い・或る西洋人(名を逸す)は嘗て

*Wer nicht liebt Wein, Weib und Gesang./Der bleibt ein Narr sein Leben lang.*

酒と女と歌とを愛さぬ人は生涯・愚者で畢る

といふたそうだが・是れは風化・風教に慥かに有害な言語なのである宜しく抹殺すべきである

尙酒に就ての談話は澤山あるが・全部割愛することにして・左に酒にちなめる漢詩を一つ二つ載せて見せる・蓋し本書の著者が獨酌の際・低聲に吟じて娛(タノシ)むものである

- (一) 醒來山月高・孤枕群書裏・酒渴漫思茶・山童呼不起(皮・日休)
- (二) 憶昔羈貧應舉年・脫衣典酒曲江邊・十一年猶餘飲・何況官況不著錢(白・居易)
- (三) 萬事銷沈向一杯・竹間啞軋爲風開・秋霄睡足芭蕉雨・又是江湖入夢來(汪・遵)
- (四) 何用巖棲隱姓名・一壺春耐可忘形・伯倫豈有長生術・直到如今醉未醒(章・莊)
- (五) 乾坤一轉破寒烟・世祝昇平樂舜天・老樗元來無多欲・希持杯酒說幽玄(七十三歲・剛堂)
- (六) 新年早早又塵烟・垢面何時洗得鮮・唯喜知人多酒氣・金錢不要枕樽眠(同上)
- (七) 送到年魚新又鮮・撒鹽燒去吐青煙・貧家初識仙家意・酒得佳肴味更全(七十四歲・剛堂)
- (八) 勿笑弓腰凭錡斜・鋤除日日挽農車・阿爺喜酌三杯酒・稚子無情踏落花(同上)
- (九) 山茶花發暮雲移・春雨霏霏筍過籬・一浴三杯人不到・閑吟斗酒百篇詩(七十五歲・剛堂)

[き] 義と利の話

利得の利は誰(ダレ)でも能く心得てゐるが義理の義は心得てゐる人が甚だ少ない様であるから・一應



話してきかせませう・義といふ文字には西洋のジャスチス Justice (英)ゲレヒチヒカイト Gerechtig-keit(獨)なんて文字が・充當されてゐるが本統の意味は寫し出されてゐない様に思はる吾々が常に唱道してゐる人倫五常の道といふものに

親(父子親あり)

義(君臣義あり)

別(夫婦別あり)

序(長幼序あり)

信(朋友信あり)

といふことがある・今説く所の義は・君臣・義ありの義ばかりではない・蓋し父子の間に親(シタシミ)のあるもの・あるべき筈であり、長幼の間に序(ツイデ)のあるもの・あるべき筈である・此の  
あるべき筈

が即ち今説く所の義なのである・が・寄合ひ世帯の西洋には・此の「あるべき筈」が明確に認識されてゐない様である・もちろんラ句語の ius (jus)は正當即ち Gerechtheit と譯られてゐるが・此の Gerechtheit は幾何學の所謂の正角といふ意味の文字に似た文字で左右の角度が一分(イチブ)一厘(イチリン)相異なく「キチン」と當嵌(アテハマ)ることが正當といふことである・従つて裁判官は法律に「キ

チン」と當嵌る様に裁判するから・裁判官が Justice とも Richter とも呼ばれるのである・即ち正當な審判(サバキ)を爲す人といふ義である

抑も權利・義務の觀念の發達した西洋人の腦裡(アタマ)には・約束を約束通りに實行するのが正當であり・正しいことであるといふ信念が堅く存在し・そして惡むことは・どこまでも惡むいとせねばならぬといふ様な思想が堅く存在してゐる・もちろん是れは「正當なこと」であり「正しいこと」には相違ないが・吾々が義といふのは・そんな杓子定規のことではない

釋名には義の字が

義・宜也・裁制事物・使各宜也

義は宜(ギ)なり事物を裁制し・各(オノオノ)をして宜(ヨロ)しからしむるなり

と註記されており・容齋隨筆には

人物以義・爲名・其別最多・仗正道・曰義・義師・義戰是也・衆所尊戴・曰義・義帝是也・與衆共之・曰義・義倉・義社・義田・義學・義役・義井之類是也

と解説されてゐる・此容齋隨筆の説明に依れば

(一)正しいと信ずることを行ふも義 であり

(二)衆人と共同して事を行ふも義 である



是等の解説から考へて見れば

(一)物の落つく所に落つくのが義 であり・そして

(二)主義主張を突張つて多数に従はぬことは不義である

と解釋してよからうと思ふのみならず

父の悪は子・之をかくす

とかいてある・なんぼ他人の罪惡を隱匿するのが惡事であるとはいへ・諫めて・それを聽入れず爲(シ)た父の惡事は・涙を呑んで黙してゐる外に仕方がなからうぢやないか??又君臣の義を結んだ後・其の君が假令へ善くない政治をなさつても・諫め申すだけ諫めて退き・そして其の君を敵に廻はして討伐するが如きことは・義人の決して爲(セ)ぬ事である・伯夷叔齊の名高い所は其處(ソコ)にあるのである又一人の天子に事へた者が自分の都合で他の天子に事ふるやうなことも・義人は又決して爲(セ)ぬ事である・宋末の忠臣文天祥の行動を見れば直ぐ判ることである  
然るに西洋には・こんな場合の事狀を説明するに適當した文字が発見されないのである・蓋し西洋では唯我が身の上の利害得失だけを考へて

父子の親 とか

君臣の義 なんてことに

餘り重きを置いて居らぬからである

それゆゑ西洋では

親は親の都合で生活し

子は子の都合で生活し

そして君は君・臣は臣・各各別別のものと考いてゐて・そして其の間に

切つても切ることの出来ない關係のあること が

認識されてゐないのである・のみならず・甚しきに至つては

國王は人民の約束で立てられたものであるから・人民の都合で取かへても差し支へはない

といふ様な思想が存在してゐるのである・露帝を弑し獨帝を逐つた様な事蹟は西洋各國に幾らも見られることである

蓋し吾々同胞の中には左様な思想は微塵も存在して居らぬのである・従つて日本には

義は君臣にして

情は父子の如し

といふ文句が昔しから傳つて吾々の腦裡に堅く植えつけられてゐるのである・少し考ひて見るがよい・

猫や犬の世界を・猫や犬の世界には親子の情もなく又兄弟姉妹の義理も現はれてゐないぢやないか??



そして此の親子の關係や兄弟の關係は切つても切ることの出来ない關係ぢやないか??教育の根本義は人間に此の切つても切れない親子の關係や兄弟姉妹の關係を能く認識させることである。所で西洋には宗教があつてゴット即ち造物主に對する思想は能く發達してゐるが五倫五常の道といふことに就ての教えが發達して居らぬから・自然に親子の情も薄くなり君臣の義も判然して居らぬのである・そこで或人は吾輩に

西洋人は野獸性に富んでゐるから・戦争でも少し劇烈になると・殘酷・目もあてられないやうな事をやらかす

といふ話を聽かせたが或は嘘(ウソ)ではあるまいと思ふたのである・尼港の慘殺事件は吾々の忘れられない露助の暴戻ぢやないか??君を逐ひ帝を弑する位は彼等野獸性の輩(ヤカラ)に取りては朝飯前の仕事である・怪しむに足らぬことである・君臣の義などを説いて聞かせた所で彼等の耳に這入らぬのは無理もないことである

聖人孔子の弟子の子路が孔子に

君子・尙勇乎(君子は勇をたうとぶか)

と問ひ尋ねしとき孔子が

好仁不好學・其蔽也愚

好知不好學・其蔽也蕩

好信不好學・其蔽也賊

好直不好學・其蔽也絞

好勇不好學・其蔽也亂

好剛不好學・其蔽也狂(陽貨篇)

と答ひて訓へられた通り又

君子・義以爲上・君子有勇而無義爲亂

小人・有勇而無義爲盜(陽貨篇)

と答ひて訓へられた通り・世界大戰のとき・露西亞人には勇氣ばかりありて義氣が缺けてゐたため・遂に大人は皇帝を弑し小人は盜賊となつたのである・若しも露西亞人なり獨逸人なりに凜乎たる忠義の心ありたりとせんか皇帝と共に討死して國土が無人の境となるまで戦つたであらう・然るに彼等には忠義といふ・切つても切ることの出来ない關係の認識が缺けてゐたため・天子を逐ひ皇帝を弑して自分の身の安全を計つたのである・是れが個人主義の發露といふもので歐米各國の一般の風俗である・故に英國の如き國でも一朝戦争の渦中に入りて・負け戦となつた日には必ず露西亞や獨逸の二の舞ひをなすに相違ない・従つて個人主義と忠義との兩立せぬことを承知せねばならぬのである



右は親子の親み・君臣の関係から起る義理の道理を説いたのであるが其の他にも義理といふことは世の中に尙澤山ある・嫁を貰ふときの媒酌人に對する義理も義理の一つであるが近頃の人は媒酌人に對する義理なんでものは結婚の翌日から已に全く忘れて仕まう様である・是れでは全く犬猫を世話した様な感じを懐かざるを得ぬのである・月謝を出して一人前に教育して呉れた先生を忘れて仕まうのは無理も無いことであると思ふ

抑も義理といふ言葉の中には恩義を受けてゐるといふ意味が含まれてゐると同時に其の恩義に對し感謝を表する義務も亦含まれてゐるといふことを吾々は心得て居らねばならぬのである・そして吾々人間は・否・學問あるものは・其の義務を完全に盡す所に値打があると心得ねばならぬのである・天地からの恩も鴻大であり兩親からの恩も鴻大であるが・畏れ多いことだが 天皇陛下からの御恩は實に實に鴻大で七たび生れ替つて來て御恩報じしても尙其の九牛の一毛だも御報ひ申し上げ得るもので無いのである

宋末の文天祥は忠義無比の人であつた・元の將・張・洪範に捕はれて土窖に幽閉せらるるや正氣の歌を作つて義憤を發表し・其の死刑場に臨むや南向再拜して從容・死に就いたのである

此の事實を説いて西洋人に聞かせたら彼等は何といふだらうか??

つまらねへ事をしたものだ・降參しろといはれたら・和順(オトナシ)く降參して命だけ助けて貰

らつた方が得策ぢやないか

といふであらう・見玉へ??歐洲の大戦争を・彼等は捕虜となることを少しも恥辱とは思つてゐないぢやないか??

國家の爲めに必ず盡します・國難には必ず殉じます

と誓つて出陣した兵士が二萬三萬の一聚團となつて降參し・そして戦後平氣で歸國したではないか?? 殉すると心に誓つた約束は・どうしたのか??人間は約束を守る處に價值があるのだ・若しも自分の一身上の都合で其の約束を反故にするならば其の人間は人間たるの價值を失ふのである・況んや君臣の義を忘れ朋友の信を忘れて顧りみざるに於てをや・人間ぢや無いぢや無いか??

概して西洋人といふ奴は損得の上では約束を仲仲に堅く守るやうであるが物質を離れての約束をば餘り多く顧慮しないやうである・例へば親に大きくして貰つた恩も金で返へせば・夫れで残らず帳消しになつた如く考へ・教師や先生に教えて貰つた恩も授業料を拂へば・夫れで帳消しになつた如く考へるが如きが・其れである・昨今の日本人は西洋人の根性に感染(カブ)れたため・先生の恩義も師匠の恩義も・總て物質で代償し得るものと心得る様になり・段々人間性から動物性に墮落してゆくのである

のみならず偕老同穴を約束して一緒になつた夫婦でさへも自分の都合では忽ち其の約束を反故にして他方へ人情を移して仕まい・そして其れを一向に恥辱とせぬやうになつたのであり・忠臣・二君に事へ



ずとか・貞女・二夫を更えずなんて義理の濃厚な話しは眼薬ほども見られなく・なつた・是れも蓋し福澤先生などが西洋文明の輸入に熱中された餘弊であらう・これからは大いに

忠臣不事二君(忠臣・二君に事へず)

貞女(烈女)不更二夫(貞女・二夫をかえず)(史記田單傳)

てふ主義を唱道して人間味を恢復せねばならぬ

但し男子も亦人倫五常の道を守り

夫婦・有別(甲夫婦と乙夫婦とは區別があり)

を堅く守り・偕老同穴の約束を履行し・自分の死んだ後までも妻子が感謝して我が在天の靈に向ひ朝夕ぬかづき呉れる様な準備に用意せねばならぬ・或る理學博士の様に本妻を捨て・房州あたりの海岸に・或る女と同棲した様な巫山戯た眞似を仕ては相ひならぬのである・一たび妻を迎ひた以上は其の妻及び子供に對しては保護教養の全責任を荷ひ・妻が不治の病に臥すとも・子供に不具者が生れるとも乃至水難火難に逢ふとも・毅然として其の困難に打勝つべく奮勵努力し以て父たり夫たりの義務や義理を完全に盡さねばならぬ或る文學士が或る家の養子となりて其の家の娘と結婚して夫婦となり・尙學問を研究して文學博士の學位を取つたのであるが・たまたま・妻の娘さん・結核症に罹り病床に臥するや・薄情にも其の文學博士は病妻と養母とを見棄て自分の本姓に復歸し・そして他の女を迎ひ入れて妻と

したのである・病妻や老養母の世話をなすは・成る程厄介なことではあるが・其の厄介を恐れて信義を反故にするといふ理窟はどこにあるか??文學博士とも言はるる人にして・こんな理窟の判らぬ筈はあるまい・利己主義の發達した西洋にも・こんな不信義を許す理窟はあるまい・此の事實は吾輩の現實に見聞した事實であるにも拘はらず・世間の批評にも上らず其の博士勤務の官衙でも此の事實を等閑に附しておいたのである・吾々が義理を缺いてはならんぞ・信義を反故にしてはならんぞと言ふのは・こんな不徳義な博士や學士の現はれんことを恐るるからである  
抑も人間たる價值はどこにあるか??義務や信義を確守する所にあるでは無いか??人間たる價值は義務と信義とを確認して其の之れを實行する處にあるのである・もちろん實行は骨の折れることであらう・曾子が

任・重し(論語泰伯篇)

と申された通り・亭主たり家長たるものの任務は實際「重い」のである・吾輩は舊藩の一貧士の家に生れたものであるが・二十五歳の時・漸く俸給生活となり・つづいて妻を迎ひたのであるが・其れ以來・姉と弟と妹と・そして兩親とを扶養し世話した上に妻は脊椎カリエスで流注毒(ルチウドク)といふ不治の症に罹り・丸(マル)十年間臥牀して明治三十七年八月十五日に死歿したのである・我が拙著「獨和新醫學大辭典」や「他國辭書大全」などは病妻の看護の餘暇に藥餌資料收入のために爲したる仕事に過ぎぬ



のである・實際當時は貧病二苦に責められて閉口したのであるが・天の神・吾輩の微衷を汲み取られたものと見え・粗衣粗食とはいひ・米鹽に心配ない現在は無事無病に暮らし・個様なつまらぬ本をかいて印刷に附しつのである是れも義理を重んじ信義を堅守して働らいた御褒美であるであらう・多謝多謝・Gott sei Dank dofür!

但し信義を尊重し義理を實行せんとする場合には餘程な勇氣の無くてならぬことをあらかじめ認知して居らねばならぬのである・であるから聖人孔子も已に

見義・不爲・無勇也(義を見て爲ざる・勇なきなり)(爲政篇)

と仰せられて・吾々を誡められたのである

所で大抵の人は之れは

爲すべきことだ Sollen zu machen

と心に知つても其れを身には仲仲實行し得ぬものである・蓋し其れは慥かに勇氣といふのが無いからである・文豪ゲーテの作品中には

Gut verloren, etwas verloren!

Ehre verloren, viel verloren!

Mut verloren, alles verloren!

Joh. Wolfg. v. Goethe, poetische u. prosaische Werke (1836—1837)

(F. F. v. Lippenheide, Spruchwörterbuch S. 638)

(一)財産の損失は聊かな損失

(二)名譽の損失は多大な損失

(三)勇氣の損失は全部の損失

といふ名句があるそうだ・聖人孔子の金言に裏書きしたのである・著者の故郷に昔し長谷川照道と申された學者が居られた吾輩の從兄の養父である・此の學者は吾輩に教えて常に

仁義五常の道も勇氣が無ければ實行が出来ぬ故「仁義禮智信勇」と・勇の字を終(シマイ)に附けて言はなくてはいけない

と申し聞かせられたのである・實際勇氣が無くては何事も成るものでない・國難に殉ずるとか・節義に殉ずるとか・其他艱難辛苦・憂感煩悶に際會したとき・初志を變せず・押し通ふしてゆくには絶大の勇氣が無くてはならぬのである・敵國に捕虜となつた時や・子供を遺して亭主に死なれた場合などに限つたことではない・利益關係から金錢で心操を動かされようとした場合でも・選舉關係から贈賄で心操を動かされようとした場合でも乃至劍戟や鐵拳で心操が脅迫された場合でも斷乎として其の初一念を堅守する・其れにも絶大の勇氣が無くてはならぬことである



若しも其の場合に勇氣が無ければ・苦るし紛(マギ)れに金銭も着服するであらうし・贈賄も收受するであらうし・そして不節操漢などと呼ばれるようになるであらう

さればにや義を守るとは昔しから甚だ難いこととされたのであり・そして義を守り義理人情を盡すことに於てのみ初めて立派な人間たる價值が顯はれて來るのであり・更に其れに因て君子と小人との區別も生じて來るのである

言ひかゆれば君子といふものは仁義を以て萬事を解決してゆく人であり小人といふものは損得利害を以て萬事を打算してゆくものである・そこで聖人孔子は已に

君子喻於義・小人喻於利(里仁篇)

君子は義に喻(サト)り小人は利に喻る

と申されたのであり・それから又儲けさせて呉れた場合や乃至月給を増して呉れた場合などにも・能く義理を分別して見ねばならぬのである即ち幾ら給與(クレ)るからとて・考ひなしに貰ふてはいけないのである・即ち貰ふだけの理由ありや否やを考慮せねばならぬのである・乞食(コジキ)だからとて・少し了見のある乞食は決して「嗟來之食」は受けぬのであり・傲慢な態度で與える飲食物や輕蔑した料見で呉れる御馳走や饗應は決して受けぬのである況んや堂々たる二十貫目の男子に於てをや  
所で今日の職工や筋肉従業員の態度や心操を見て見玉へ我利以外に何物も無いぢやないか・禮記の

爭利・忘義(利を争ひ義を忘る)

的のものばかりぢやないか??

どうかお使ひなさつて下さい!!

と言ふた其の舌の根の未だ乾かざるのに早くも已に罷業團に加入して其の恩人に劍戟を振向けるのである・義理人情に燃えてゐる吾々貧乏人は・如何に食ふに困ればとて・こんな眞似は爲(セ)ぬのである・俚諺に

飼犬(カヒイヌ)に手を噛まれる

といふのがあり・又古語に

養虎自遺患(虎を養ふて自ら患を遺す)

といふのもあるが・此の如き犬や虎が此の社會に澤山ゐるのである・危険・危険

昔し賢人孟軻(耶蘇紀元前三七二乃至二八九年)は梁の惠王に見(マミ)え劈頭第一に

王・何必曰利・亦有仁義而已矣

王・何んぞ必ずしも利を曰はん・亦た仁義あるのみ

と言ひ・そして其れに續いて

王曰何以利吾國・大夫曰何以利我家・士庶人曰何以利我身・上下交征利・而國危矣



王は何を以て吾國を利せんと曰ひ・大夫は何を以て吾家を利せんと曰ひ・士庶人は何を以て吾身を利せんと曰ふ・上下交交(コモゴモ)利を征(トリ)て國危し  
といひ・更らに續いて

苟爲後義而先利・不奪・不蹙

苟も義を後にして利を先きにするを爲さば・奪はざれば蹙(アカ)ず

といひ・最後に

未有仁而遺其親者也・未有義而後其君者也・王亦曰仁義而已矣・何必曰利

未だ仁にして其の親(ヲヤ)を遺(ワス)る者あらず・未だ義にして其の君(キミ)を後にする者あらず・王また仁義と曰んのみ・何んぞ必ずしも利を曰はん

といふたのである・即ち孟子の言葉を平易にいへば斯様である曰く

國王よ・利益論は・およしなさへ・仁義で押し通ふさねば駄目です・若し國王が・どうしたら國家の利益になるだらうと考へ・大臣參議がどうしたら我が黨の利益になるだらうと考へ・平民が・どうしたら一身の利益になるだらうと考へて・上に立つ人も下に立つ人も・お互に唯利益することばかりを爲(ス)るようでは・國・社會は決して安全でない・かりそめにも義を後にして利益ばかりを先きに考へるようでは・どこまで奪ひ合ひするか・到底・停止する所はない

従つて社會の平和・國際の平和なんてことは・望んで得られぬことになる・故に國王(アナタ)に進言致します・どうか利益のことは絶対に止(ヤ)め遊ばして・そして仁義を主義としてお進みなされんことを・お願い致します  
といふことになるのである・孟子のこの一言は・これを今日の國・社會に移して見ても洵に適切な意見といふべきである・吾々は大いに此の主義を鼓吹せんければならぬ

### 〔ゆ〕 油斷大敵の話

駿臺雜話といふ書物の中に

井伊掃部頭直孝が永井信濃守尙政に「油斷が大敵だ」

と教えたといふことがかいてあるが・實際油斷程恐ろしいものはない吾輩の経験した處・並に見聞した處に依れば人間の不幸や不仕合や乃至失策や失敗の大部分は残らず油斷が原因を爲してゐるのである蓋し油斷なる言葉は

油が斷(タ)えて火が消ゆる

なんて意味ではなくて・不注意といふ意味なのである・涅槃經といふお經の中にある譬喩から由來した文字で其の解説は詳説は「詳解漢和大字典」などに出てゐるから説明する必要はないが・兎にかく注意



の足りない事は總ての禍患の本に相違ないから・我れ人(ヒト)共に注意が必要である  
説苑といふ書物には

患生于所忽・禍起于細微

患ひは忽(ユルカセニ)する所に生じ・禍ひは細微より起る

とかいてあり又荀子といふ本には

百事之成也・必在敬之・其敗也・必在慢之

百事の成るのは・必ず之れを敬するに在り・其の敗るるや・必ず之れを慢(アナド)るに在り

とかいてあり・そして韓非子といふ本には

千丈之堤・以蟻蟻之穴・潰

千丈の堤も・蟻蟻の穴を以て潰(ツヒ)ゆ

(蟻の穴から・堤がくづれる)

(小さき穴も・大船を沈む)

(煙草の火から大火事)

(百尺の室も突隙の烟を以て焼く)

とかいてある・電燈線なども・時々検査して安全を是正する様に注意すれば火災を未發に防ぎ得る筈が

原則であるのに・油斷して其の注意を怠るため・漏電出火の厄に逢ふのである慎むべきことである

吾輩の母は今から言へば或は神経質の女性であつたかも知れん・吾輩の姉に殆んど毎夜

火消し壺と戸締りを見るのは女の一役(イチャク)だ

といふて聽かせたのであるが・自分が長じて一家を持ち・火事や泥坊に注意する様な境遇に踏み込んで

見て母の教えの適切であつたことを知つたのであるが・其れ以前は

面倒なことを言ふんだナア

と思ふてゐたのである・庭訓(テイキン)を等閑にした罪は・今や我が身を責めてゐるが・今の青年も・

恐らくは此の伊呂波四十八訓を等閑に聽き流して・四五十年の後・慚愧の感に打たれるであらう・實際

火事や泥坊は必ず不注意から起る事柄である・俚諺に

盗まるる者に油斷はあれど

盗むものには油斷がない

といふのがある・財布や時計などを掏(ス)られるのは慥かに油斷のあつた結果である・包み物などを電  
車や汽車の網棚などに置き忘れるのも心が他方へ奪はれた結果なのである・古語に

注意の足らざるは智慧の足らざるより損失多し

といふのがある・少しぐらい馬鹿でも注意に注意して仕事を爲せば・大きな損失に逢ふことは少ないが



之に反し伶俐な人でも注意を懈ると意外な大きな失敗や損失を受けることは・屢次発見されることである・例令へば政治家が其の乾兒(コブン)から秘密を摘發されて遂に大臣の椅子を棒に振つて仕まつたり或は第一流の立派な名譽教授が其の著書中の二三行が忌諱(キキ)に觸れて總ての名譽職や公職を辭退し或は拜辭せねばならぬ羽目に陥つた類などが其の一例である  
曾我物語といふ本の九卷目には

かく親しき者さへ・頼むに頼まれ候はず・何事やらん聞出して御氣色に入らんと思ふ者どものみ多く候ふ世の中に・かかる人非人の身が廣量に(澤山に)他人をかたらひ候はんは・手を借して縛(シバ)られ・首を延べて・切らると申すにて候へ云云

とかいてあるそうだが・實際今の世間では親しく交際し居るものでも・決して裏心から心を弛(ユル)めてはならぬのである・俚諺に

Beware of him who makes you presents

贈り物する人には油斷するな

といふのがある・日清戦争の折・坂本修次郎(假名)といへる或將校相當官が軍隊へ馬糧を納める商人から・中元の贈物として袴地一反受領したので收賄罪に問はれ・位階も恩給も残らず水に流して間(マ)もなく病死したのであるが・此の坂本なる人は實は官吏服務規則などを氣に留めず輕卒に贈物を受け・そ

して袴に仕立たのが禍いをなしたのであつたといふことであるが・免に角不注意が累をなしたのである

其敗也必在慢之(其の敗るるや必ず之を慢るにあり)

といふてあるから・瑣細なことでも輕々に取扱つてはいけない・否・注意に注意を加えて世に處すべきである・九州方面の俚諺に

蜈蚣(ムカデ)のあだころび

といふのがある・百足の蟲でもころぶことがあるといふから・餘程用心に用心せぬと・見ながら穴に墜入ることがある

「古歌」見る穴へ・おちぬる人ぞ・世に多き・心も目をも・持ちて何せん

とある・首を延べて切られたり・手を借して縛られぬよう用心するがいい  
それから又俚諺に

ちよつと嘗(ナ)めたが身のつまり

といふのがある・或る學生がカフェーの女給に手をつけた・其れが腐れ縁となり・とうとう墮落して箱根の山奥で心中したといふ例もある・又或る學生が未亡人の住んでゐる家に下宿し・ふとした場合に其の未亡人に抱き込まれ・其れが腐れ縁となり・とうとう廢學したといふ例もある・是れ等は大きな穴に



落ちた例であるが・小さな穴に落ちて幾度か不良の學績で兩親に心配させ・朋友から・内々笑はれた例は無數にあるのである・古歌に

ひかれなば・あしき道にも・入りぬべし・心の駒に・手綱ゆるすな

といふのがある・思ふべきである

山に躓(ツマツ)かずして埵(アリツカ)に躓づく

といふ古諺もある・是れは淮南子(エナンジ)といふ本の「人間訓」の中に

堯・戒曰・戰戰慄慄・日愼一日・人・莫躓於山・而躓於埵

とかいてあるものから・取つた俚諺であるが・人は油斷すると小さな蟻塚につまづいて倒れることがある・注意して此の世は渡るべきだ

石橋も叩いて渡れ

といふ俚諺は人口に膾炙してゐるものだが・實際・此のくらいに用心はせんければならん・學生の落第難などは平素の注意の足りない結果に相違ない・日々の講義なども注意を以て耳に留めれば・落第したく思ふても落第は出來ぬのである・然るに落第するのは・心に油斷があるからである・油斷すべからず・油斷は決して決して爲(シ)てはいかん

### (め) 目と耳の話

西洋の俚諺に

眼は心の要素

Das Auge ist des Herzens Zeuge. と云ふのがあり又

眼は心の窓

Das Auge ist der Seelen Fenster.

といふのがあるが日本にも亦

眼は心の鏡

といふのがあり・そして・孟子離婁上には

存乎人者・莫良於眸子・眸子不能掩其惡・胸中正・則眸子瞭焉・胸中不正・則眸子眊焉

人に存するもの・眸子(ヒトミ)より良きは莫し・眸子は其の惡を掩ふ能はず・胸中・正しければ則ち

眸子・瞭(アキラカ)・胸中・正しからざれば則ち眸子・眊(クラシ)

とかいてある此の故に人・人に對面すれば其の眼を視るによりて・其の人の伶俐か・馬鹿かが直ぐ判るのである・もちろん・耳朵(ミミタブ)でも其の人の伶俐馬鹿・運命なども判るが・目で判斷するのが確實



である

昔し宗の太祖太宗の頃(西紀九六〇至一〇〇〇頃)に博士試験に落第したのが癩にさわり・武當山の九室巖といふ岩屋に逃げ隠れ穀類を斷ち氣水を服して壽命を支へ・後に居を洛陽から長安へゆく途中の華山(ホツサン)に移し一睡に百日をつづけたと稱せられ・太宗から希夷先生の號を頂戴したといふ・左様な珍らしい奇人兼學者陳搏(チンハク)の書いた書物の神相全篇と題した篇中に

耳・厚而堅・聳而長・皆壽相也　　とか乃至

耳・薄如紙・貧窮無倚之相也　　とか

耳の厚くて堅く・高く聳えて下の方へ長さものは長壽の相で

耳が薄くて紙の如き(小形の)ものは・貧乏で他依りなき相なり

なんてことが書いてあるそうだが・實際

耳朵(ミミタブ)の大きな人は福相で　　あり

耳朵の薄く小さな人は氣力孱弱の相　　で

あるに相違ないが・併し耳の觀相學は餘り面白くない・目の觀相は餘程的確で面白い・昔しから

目尻のさがつた者は多淫(助兵衛)　　だといひ又

目の縁(フチ)の黒い者も多淫　　だといはれて

ゐるが・慥かに左様に思はれる節(フシ)がある・氣をつけて見るがいい・論語の八佾篇には

巧笑・倩兮・美目・盼兮(盼作盼誤也)

巧笑・倩兮(センタリ)美目・盼兮(ヘンタリ)

(口元愛らしく・笑顔を作り・眼元美はしき女のこと)

といふ語がある・こんな女も慥かにエロ的な女に相違ない・そして大概な男は個様な伶俐機敏な・目から鼻へぬけさうな・お世辭のいい笑顔の倩盼(センペン)たる女には・惚れ込んで或は家産全部を蕩盡するまでに至るのである・個様な女が即ち詩經の所謂る

哲婦傾城(哲婦・城を傾く)　　なるものであり

爲梟・爲鴟(梟たり鴟たる)　　ものである

こんな女の眼(メ)が西洋で

Augen sind der Liebe Boten.

眼は愛の使ひなり

と言はれてゐる・其の目なのであり・そして

Durch die Augen wird das Herz verwund't.

眼に由りて心が傷つけらる



と言はれてゐる通り・傷手(イタデ)を受けるのであり・そして遂には

Aus dem Auge sieht die Lust und der Teufel hinein.

色慾と悪魔とは眼(メ)から入り込む

と言はれてゐる通り・花柳界に墮落したり・別荘で六百六號のお世話になるのである・目や口の悪毒も亦察すべきである・が・ジョン・ロツクの主張通り・知識の大部分は目と耳とから入り来るものであるから・目と耳とは・大いに尊重せなければならぬ・そして中に就て眼睛は餘程大切にせんければならぬ・瀧澤馬琴も晩年には眼を失つたそうだが・獨逸の有機化學の泰斗エミル・フィッシャーや衛生學の大家ベッテンコオフエルも亦晩年に其の眼を失つたのであるが・此二人の大學者はいづれも

Wissenschaft (サイアンス)に關係してゐるものが失明したら生きゐる必要はない

と言ふて・各々自分の手により・此の世を去られたのである・以て眼の如何に學者に大切なものであるかを察知するがよい・のみならず・眼力は成るべく養つて鋭敏ならしめねばならぬ・ギリシヤの有名な哲學者アリストテレスは博物學の元祖とも言はれてゐるが・其の眼力は頗る鋭敏であつたから

Scharfsinniger Philosoph(眼力鋭敏な哲學者)

と言はれてゐるのである・そして眼力鋭敏な人の眼は耿耿(カウ・カウ)として光(ヒカリ)があるばかりでなく・眼睛が凹(クボン)であるのであるから・俚諺にも

目凹(メクボ)に馬鹿なし

と言はれてゐる・目の凹みたるは慥かに智慧者の相であると同時に人形の眼睛(メダマ)の様に飛び出てゐる人や眼睛(メダマ)に霞の掛つた様な・力の無い目玉の人間は慥かに氣抜けである・メンタルテスト mental-test とかいふ人物採用の試験に従事する人は・こんな事にも注意を致す必要があると思ふ・

目は面の飾り でもなく又

目は面の看板

でもない・が・併し

目は腹よりも廣

Die Augen sind weiter als der Bauch.

と言はれてゐる通り・見込んだ處に惚れ込んで段段深入りして・とよとよ・抜け出ることが出来なくなるから用心せなければならぬ・特に目元の可愛い女性などを見たときには一層用心せなければならぬ・舊約全書の箴言の第二十七章第二十節にも

Hölle und Verderbnis werden nimmer voll, und der Menschen Augen sind auch unersatlich.

陰府(ヨミ)と沈淪(ホロビ)とは飽くことなく・人の目もまた飽くことなし



とかいてある・見る所に溺れるのを誡めた箴言なのである・所で愚(オロカ)なる人は吾輩の斯の苦言を聞いて多くは馬耳・東風に聞き流すのであるから・古聖も已に

なんぢ愚(オロカ)なる者を・白に入れ杵をもて麥と偕(トモ)に搗(ツ)くとも・その愚は去らざるなり(同上の箴言を參見せよ)

と申しておかれたのである・運命の恐るべきを知る人は・慥かに吾輩の言葉を能く聞き入れるであらう  
俚言集覽にも

目は臆病・手は千人

とかいてある・目の誘惑を避(サ)けて・手の業(ワザ)に勵むべしといふ意(ココロ)である・藝妓や妓生(キーサン)の顔を見るのは最も宜しくない・華族の未亡人などが劇壇の巨優などを見るのは最も危険である

美人の秋波・人を惱殺する

といふ句がある・此の秋波・是れが實際恐ろしい秋波なのである・特に財布の膨満してゐるときに於て然りである・西洋の俚諺に

Wer die Augen nicht aufhut, muss den Geldbeutel aufhuh.

目を開(アカ)ない人は・財布(の口)を開けねばならぬ

と言ふのがある・吾輩の此の言(ゲン)を聞いて心眼を開(ヒラ)けばよし・然らざれば必ず財布の口を咄開せねばならぬことになる用心・用心!!

盧照鄰(唐・范陽の人)の詩(恩田重信著・長洛遊記・前記・十六頁參看)の句に

長安大道連狹斜

青牛白馬七香車

といふのがある・其の狹斜な巷(チマタ)あたりで・怪しげなものを買つて見玉へ!!  
それこそ・大變だ・獨逸の俚諺にも

Willst du kaufen, was dir in die Augen sticht, so siehe zu,

dass nicht hernach Mangel sei.

目に這入つたものを汝・買はんと欲せば・買つた後缺乏せぬか・どうかを考慮せよ

といふのがある・實際能く考慮せねばならぬ・然も人間といふものは・他から話しを聞いただけでは・どうも確信が起りにくくて・そして自分で経験すると・始めて本當の確信を得る様な性癖を持てゐるものなれど・経験して仕舞つては・機能が無くて後悔ばかりが残るのである・聖人君子や先哲の言ひ貽した教訓は・そこに價値を持つてゐるのである

古い教訓に



多くの人間は鼻(フクロ)の様な目を持つてゐる

Die meisten Menschen haben Eulenaugen.

が・然し

Die sehen nur im Fin tern, in Betrüg und Lügen und nicht im Licht der Wahrheit.

彼等は只暗處に於て・詐騙に於て及び虚偽に於てのみ見て・そして真理の光明に於ては見ないと言ふのがある・吾輩の言ふことは實際真理である・此の真理を見るところの眼(メ)が即ち心眼といふものである・肉眼といふものは概して悪性のものである・吾々は普通の人の眼を「節(フシ)の孔」と稱し其の耳を木海月(キクラゲ)同様と呼んでゐるが・節の孔や木耳は害もなく益も無いが人間の目と耳とは善いこともあるが・概して悪性のものであると思ふここに於て古人は

見まい・聞くまい・物いふまい

といふ箴言を吾々に言ひ遺して呉れたのである

説苑といふ本には

耳・聞之・不如・目見之・目・見之・不如・足踐之

とかいてあり・百聞は一見にしかずと世間でも言ふてゐる通り・耳で聞くよりも・目で見るのが・善いに

は相違ないが・其れは見方(ミョウ)に由るのである  
本朝俚諺といふ本には

耳・不聞人之非(耳・人の非を聞かず)

目・不視人之短(目・人の短を見ず)

口・不言人之過(口・人の過ちを言はず)

とかいてあるそうだが・これが一番安全無疵な方法である

### 〔み〕 名詮自性の話

名詮自性は「メイセンジシャウ」と讀まず「ミヤウセンジシャウ」と讀むのが慣(ナラ)はしであるから大槻博士の言海にも「み」の部に出てるのである・個様な讀方を坊主讀みといふ佛教經典の慣用である小便の便はベンと讀み郵便の便はピンと讀むが如き類(タグヒ)である・唯識論に

名詮自性・是爲名身

名は自性を詮す是を名身と爲す

とかいてあり・そして其の説明に

謂諸法自性・由名而詮顯也



諸法の自性は名に由りて詮顯されると謂ふこと也

とかいてあるが・吾々には・何のことか・一向に譯が判らるのである・其の道の書物には

名は即ち是れ心・謂く心は但だ名のみ有て・而も形質なし・色(シキ)は即ち色質・即ち是れ身なり  
謂く託胎より已後・第五箇の七日に至て形位と名づく・諸根の形を生じて四支差別す是れを名づ  
けて色と爲す

とかいてあるが・愈々以て譯が判らんが・門外的に説明すれば個様なこととなるのである曰く

恩田重信といふ男は元來影も形も無い・空々寂々たるものであるが・其の空々寂々たるものが・  
もちろん名もなく名稱もないものが・たま／＼恩田十郎時篤(重信の實父)の翠丸中に止宿し・そ  
こで少量の有機質と水とを呼び集めて顯微鏡的の微な形體を構成し初めて精蟲といふ名稱を作  
り・それから恩田あい(重信の實母)の子宮内に轉宿し・そこで再び有機質や無機質や水などを呼  
び集めて人體の基礎工事を始めた・其れが託胎であり・今日の授胎 Befruchtung なのである・五  
箇の七日即ち五・七・三十五日には・やや人間の形體となり・諸根の形即ち目や鼻や口などの形  
の基礎が生じ・其れから段々四肢・五體の區別相が現はれて所謂の胎兒 Embryo 即ち色質の依  
聚した一個人即ちインデビデュム Individuum となつたのであり・そして十箇月の後・生れ出  
て恩田重信(最初は恩田安太郎)といふ名稱が附與せられたのである

凡そ物(モノ)の出来る模様は王公貴人でも乞食非人でも乃至馬や牛・犬や猫其の他微細なアメバやバ  
クテリアに至るまで・すべて皆此の恩田重信の此の世に現出した模様と同じことなのであつて・名こそ  
楠正成とか加藤清正なんて相異はあるが・其の本性本體はすべて空々寂々・無相無名なもので・然も天  
地の間に永窮に存在して消滅せぬものなのである・前文の

諸法の自性

といふのは・一切萬有の其の根本のものといふ意味で例令へば恩田重信の自性といふのは・父の生殖器  
に止宿せざりし以前の恩田重信のことであり・そして幾年かの後・肉體から遊離した以後の恩田重信の  
ことである・であるから・恩田重信の自性といふものは・不可思議なもので言語も名字も一切不可得な  
もので只恩田重信といふ假名で・其の言語同斷・不思議なものを詮顯してゐるのみであるといふこと・  
是れが

名詮自性

の新説明であるのであるが・是れは名詮自性の眞義で・茶碗とか・杯(サカヅキ)とか柳(ヤナギ)とか櫻  
(サクラ)とか・そんなものゝ名前に關しての説明は是れを名詮自性の假義とか狹義などゝ稱するので  
ある

オイ・長松!!茶碗・持て來(コ)い・と長松に命じたとき・其の長松が若しも酒杯(サカヅキ)を持て來(キ)



たれば是れ如何??此の長松は馬鹿であらう・何となれば酒杯(サカヅキ)は茶碗の用をなさぬからである・けれども然し考ひて見玉へ茶碗も酒杯(サカヅキ)も其の實質に於ては少しも違はぬではないか??違ふ所は只形態のみである・即ち茶碗は茶碗といふ名字で其の自性が顯現されて居り・酒杯は酒杯といふ名字で其の自性が顯現されてゐるのである・尙言ひかゆれば

茶を注(ツ)ぎて飲む道具が茶碗であり

酒を注ぎて飲む道具がサカヅキであり

といふべきであるサカヅキは酒・注ぎの義なればなりである・更に今一度言ひ直せば

凡そ物は其の名を聞いて其の物の自性が判る

といふべきである・例へば

(一)風にさからはず・うまくうけたへて・やなやなしき樹(キ)なるが故に柳(ヤナギ)と名づけ

(二)一筋に眞直ぐに高く伸びる樹なるが故に杉(スギ)と名づけ

(三)海鼠(沙鼠)(ナマコ)の腸(ハラツタ)にて造れる嗜好品なるが故にコノワタ(海鼠腸)と名づけ

(四)味噌の如き形態で然も其の臭氣が悪臭でクサキ故に糞(クソ)(臭き味噌)と名づけ

(五)其の糞の馬の肛門から出たものを馬糞(マグソ)と名づけ牛の肛門から出たものを牛矢(ウシノ

クソ)と名づく・それから

(六)庭(ニハ)に遊び居る禽類なるが故に雞(ニハトリ)と名づけ・山に遊ぶ鳥で雞に似てゐる故に山

鶏(ヤマドリ)と名づく

るが如きである・のみならず大隈侯と著者の剛堂とは共に信義を尊重するにより重信といふ名前が與えられたのである

凡そ物の名は皆個様な理窟で出来たものであるが・年所を経(フ)るに従ひ段々變化して其の由來の判らぬ様になつたものが今では無數にあるのである・従つて「名詮自性」といふわけにゆかぬのである・例へば山も阪も無い都市に「大阪」なんて名が存在したり・天の岩戸の遺址でも無い所に神戸の名が存在するが如きがそれである・尙・自性を失ふて空名のみ存在してゐるものがある例へば東京の柳橋と伯林の柳橋 Weidenbrück との如きがそれである・今では橋の附近に一本の柳も存してゐないのである・のみならず・玉川の上流・奥多摩の名勝地に「鳩の巢谿谷」といふのがある・昔し徳川四代家綱公時代には・川流しの材木の上に靈鳩來りて巢を造つたので其の邊を鳩の巢谿谷と呼ばれたのだそうだが今日では名ばかりで一疋の鳩も居らぬから巢など猶更ら無いのである・個様に「自性」に副はぬことを

有名無實

と稱するのである・東京の柳橋・伯林の柳橋・いづれも今では有名無實なのであるが・所で世の中には有名無實なものが甚しく多いのである



(一)金持と言はれて金の無いのもあり  
 (二)學者と言はれて學問の無いのもあり  
 (三)博士と言はれて・知識の極く狭いのもある  
 是れ等が皆其の類(タグヒ)である・是れ等はヘリックといふ人が

Fame is the breath of popular applause.  
 名聲は公衆的喝采の息氣(イキ)である

といふた・其の公衆の息氣であらうか・或はポオブといふ人が  
 Fame is a fancied life in other's breath.

名聲は他人の氣息に育成された幻影である  
 といふた・其の幻影なのであらうか・乃至はフラアといふ人が

Fame sometimes hath created something of nothing.  
 名聲は時として無より有を造り出す

といふた・其の如く造り出されたものであらうか?そして朝野僉載といふ本に  
 一犬・形に吠ゆれば千犬・聲に吠え・一人・虚を傳ふれば・萬人・實を傳ふ

とかいてある・其の空名たり・空鳴(カラナキ)たるもので・でもあらうか??

禮記表記篇には

恥名之浮於行

名の行ひより浮ぶを恥づる

とかいてあり又韓詩外傳には

祿・過其功者・削・名過其實者・損

祿(俸給)が其の功(勞)に過ぐる者の(俸給)は削り・(學位や稱號等の)名(義)が其の實(力)に過

ぐる者の(名義)は損(益)す

とかいてある・在學生の學力検査の如く授與した名義や名稱も亦時々検査して名實・相副はぬものに對しては其の名義名稱等を是正するが善いと思ふ例へば一旦附與した中等教員免許も・其の後試験して見たとき・教員其のものゝ知力が衰ひて中等教員たるに勝えない時・其の免許を取消すが如くするのである何となれば

名譽ばかりで實質の之に伴はぬときは世間に爭議が生ずる  
 からである・列子といふ本にも

名・不與利期・而利歸之・利・不與爭期・而爭及之

名は利と期せずして・利・之れに歸し・利は争ひと期せずして・争ひ・之れに及ぶ



とかいてある・昨今教育界にも「官私同權」の論も生じ「特權廢止」の論も起つて來た様である・名實が相副はぬからである・實際今日吾々の眼前に

醫學博士にして醫者たるの資格なき人もあり

又

農學博士にして家畜の醫者たる人もあり

又

理學博士・藥學博士たる人にして藥劑師の資格なき人もあつた

のである・これ等は寧ろ立派な先生であるが・診察治療の極めて拙劣なる醫學博士が幾らも居るのである・有名無實の世の中といふべきである

### 〔し〕 修身と道德の話

宋代の大儒朱晦庵先生の章句された「大學」の第一章に

- (一) 古への明德を天下に明にせんと欲する者は先づ其の國を治む
- (二) 其の國を治めんと欲する者は先づ其の家を齊ふ
- (三) 其の家を齊へんと欲する者は先づ其の身を修む

- (四) 其の身を脩めんと欲する者は先づ其の心を正ふす
- (五) 其の心を正ふせんと欲する者は先づ其の意を誠にす
- (六) 其の意を誠にせんと欲する者は先づ其の知を致す
- (七) 知を致すは物に格(イタ)るに在り
- (八) 物・格つて而して後(ノチ)に知・至る
- (九) 知・至つて而して後に意・誠なり
- (十) 意・誠にして後に心・正し
- (十一) 心・正ふして而して後に身・脩る
- (十二) 身・脩て而して後に家・齊ふ
- (十三) 家・齊ふて而して後に國・治る
- (十四) 國・治つて而して後に天下・平かなり
- (十五) 天子より以て庶人に至るまで・壹(イツ)に是れ皆・身を脩むるを以て本と爲す
- (十六) 其の本(モト)亂れて而して末・治まる者はあらず
- (十七) 其の厚ふする所の者・薄く・而して
- (十八) 其の薄き所の者・厚きは未だこれ有ざるなり



とかいてある。以て脩身の大切なることを知るがいい(十五)には天子様から一般人民に至るまで脩身が事業功業・すべての根本であると書いてあるではないか?? 況んや學生に於てをや・學校といふ學校の其の學科中に修身科の設けられて居らぬことのないのは・何より大切な學科であるからである。所で・どうすることが身を脩めるといふことであるかといふ問題になると其れが仲仲むづかしいのである。金言に依れば「心を正せ」ば其れで善い様だが・其の心を正すことが又仲仲むづかしいのであるから先づ平易に修身の話しを言ふて聞かせませう

(一)知らないことを知り覺えるのも修身の一つであらう・脩學の脩がそれである

(二)破損したり亂れたものを故の如く取り治めるのも修身の一つであらう・脩繕の脩がそれである

(三)其の他散亂したものを片付けてキチンと取揃へることや整理することも亦修身の一つであらうであるから・耳目鼻口等から入り來る知識を其の日・其の日にキチンと整理することも修身であり・帽子を正しく冠ぶりボタンなどもキチンとかけ・外套などをダラシなく脊中に掛けぬ様に注意し・勉強運動休息などを毎日規則正しく *regelmässig* に取り行ふことなど・いづれも皆修身なのであり・之れに反する行爲が即ち不正行爲と言はるる行爲なのである  
それから又

(一)あれを見たい

(二)これを聞きたい

(三)あの山へ行きたい

(四)その川に遊びたい

乃至

(五)あの令嬢を訪ふて見たい

とか

(六)あの大學生を訪ふて見たい

とか・乃至

(七)あれを食ふて見たい

とか

(八)あの酒を飲んで見たい

などといふ・妄念の生じた場合・其の妄念を損得利害の物指して商量し整理し取締つて逸脱せしめぬ様に  
する心掛けも・亦無論・修身の大事な條件である即ち

(一)見たいと思ふものを・見るが得か・見ないが得かを商量して・得にならぬと思ふたら・其れを見ぬ様に決心し

(二)行きたいと思ふ所へ・行くが得か・行かぬが得かを商量して・得にならぬと思ふたら・そこへ行かぬ様に決心し

(三)女學生や未亡人や女中などと・談話することが利益となるか・どうかを商量し・不利益たるを知りたらば斷じて談話せぬ様に決心し



(四)試験に合格するのが得か・落第するのが得かを商量し・合格するのが得であると知りたれば・合格する様に努力すべく決心し

以て絶えず自分の心を損得利害の物指しで商量し比量し・そして利得たることを知つて・其の利得に進む・それが大學の

知を致すは物に格(イタ)るに在り(三三七頁の七項參看)

といふものなのである

然るに人の心といふものは・おかしなもので右へ行くのが道理であつても・右に行かずして左に行きたがる性質を持つてゐるもので・餘程上手にブレエキを掛けねば脱線顛覆の災難を受けるのである・自轉車に乗つて見玉へ・ちよつと油断すれば忽ち逸(ソレ)るぢやないか??・車體を御するものや騎馬に乗るものが油断なく注意する如く・人も亦其の心を油断なく取押へて居らねばならぬ是れが又大切な脩身の一つで古人は之れを慎獨の心得と稱して吾々に遺訓しておいたのである・學生が遊びに身を入れて勉強に油断し試験に落第するのは自轉車もろともに崖(ガケ)から墜落して死ぬ様なものである・愚の骨頂ではないか??蓋し終日終夜・心に弛(ユル)みを與えず油断なく言行を慎む・其れが修身の本義なのである・或る修心の成書に

身ををさめ・心がけを直し・行ひを正しくし・徳性と品性とを善良に導き・文化せしむることが修

身であり倫理を守るといふことである云云

とかいてあつた・従つて修身といふ文字は英語で Moral training とか又は Cultivation of morality とかいふ文字で譯されて居り・そして道德的教育とか徳性の涵養なんていふ文字で説明されてゐるのであるが・然も其の道德といふことが西洋では異論が仲仲多いことで・殆んど一致して居らぬ様であるキルヒネル Dr. Fr. Kirchner と云ふ哲學者の編輯した哲學の辭典(一八九〇年版)の道德の原理 Moralprinzip と題した項を読んで見ると驚く勿れ・多數の名高い學者の提唱してゐる道德の原理が殘らず相異してゐるのである例へば神的になるやうに勉勵するのが道德でありといひ或は幸福に向つて努力するのが道德でありといふが如きである甲はプラトンの主張で乙はアリストテレスの意見である其の他韓圖でもフリエスでも・ファイヒテでも・アンモンでも乃至シエリングでも・ヘゲルでも其の言ふ所は皆區區で一樣ではない・であるから西洋人の所謂る道德なるものは何が何やら一向取留めの無いものの様に思はるのである

然らばどうゆゑわけで西洋では學者の意見が此の如く區區(マチマチ)になつたかといへば・其れには其れ相應の理由がある即ち其の理由は個様である曰く西洋では其の昔しは社會の慣習又は風俗といふものをお互に守る様に約束し以て其の社會の秩序安寧を維持したのであり従つて其の風俗習慣を守るといふことが所謂る道德で・即ち人間のお互に履行せねばならぬ所の徳義といふものが成立したので



ある・例へば長者には路を譲るを以て其の當時の習慣なりとすれば其の習慣通り路を長者に譲るを以て道徳を守る人となし或は又他(ヒト)の妻を姦(オカ)すのが其の當時・悪事として禁じられてあつたとすれば・お互に他(ヒト)の妻を姦さぬ様に心掛るのを以て道徳を守るとなせしが如きが其の類である・であるから道徳的といふ言葉の英語モオラル Moral といふ文字は拉句語の習慣といふ意味の言葉即ちモレス Mores から引用されたものなのである・言ひかゆれば上代にあつては人と人との交際の間に自然自然に形(カタチ)造られた色々な儀式や作法などが慣例となり・それを守つて実践躬行する・それが倫理と呼ばれ道徳と言はれる様になつたのである

所で此の自然に形造られた道徳といふものに就て段段疑議が起り・遂には

何故に吾々は左様な儀式や禮法に服従せねばならぬのか??  
といふ様な異論を持た人が出て來(ク)る様になり・従つて慣習的の拘束力も自然に弛緩し・甚しきに至りては古來の慣習を破棄し手前勝手な行動を爲す様な人も出て來(ク)るやうになつたので・道徳教育といふことを爲(セ)ねばならぬ様になり・遂に修身とか倫理とか・いふことを高唱せねばならぬことに・なつたのであるが・人智の段段進んで來(キ)た人々のこととて・其の道徳教育の方針に就ても亦色々な異説が出て來(キ)たのである・これが即ちプラトンやアリストテレスなどの間に唱ひられた如く道徳の原理に不同を見る様になつたのであると思ふ則ち或る學者は

人をして慣習に従はしむる様に教え込むのが道徳教育であり

と謂ひ又或る學者は

人をして盲目的でなく・其の反省的知見に依り・理智に基づいて道徳的人たらしむる様に教え込むのが道徳教育であり

と謂ひ・更に又或る學者は

一定の慣習を基礎として其れに知見の光を加える様にして人をして道徳的たらしむるのが道徳教育といふものである云云

なんていふやうな・色々な學説が出て來(キ)たのである・或る書物には又個様なことが書いてあつた曰く

自己意識と自主自由の權とに立脚して爲(ナ)された行爲で・其の行爲が理性と良心とに由て見出されたる神的規範に適合してゐるときは・其の行爲は稱して道徳的行爲と謂ふべし

Um sittlich zu heissen, muss eine That also mit Selbstbewusstsein und Freiheit gethan und der göttlichen Norm, welche wir in Vernunft und Gewissen finden, angemessen sein.

云云此の文句は是れを通俗に翻譯して見ると個様なことになる曰く

凡そ人には身口意の三業といふものが必ず付き纏ふてゐるもので・死んだ様な人といふものは



ないが其の意欲・言語・動作なるものが・若しも道理から詮議して見ても・良心から考いて見ても  
 聖書に示めされてある處の規範即ち規則に差(タガ)ふて居らぬならば・其の意欲・言語・動作は  
 道德に叶ふたものといひ・若しも其の規則に叶はぬときは非道德的のものである云云  
 と・こふ言ふことになるのである・いかにも其の通りかも知れん・道理から詮議しても良心から考へて  
 見ても・少しも悪くはない言行ならば・其れは必ず善いことで道德に叶ふたことであらう・故に又或る  
 書物には

倫理の法則に相應するもの即ち良心の判断に由て道德の法則に相應するものは是れ即ち倫理的  
 のものである

Sittlich bedeutet das, was dem Sitengesetz gemäss ist, also nach dem Urteil unsres Gewissens  
 dem Moralgesetz entspricht.

とかいてあつた即ち良心にさして見て善いと信ぜらるる處に従つて言動すれば慥かに立派な言動であ  
 り道德的のものであり倫理的のものであらう  
 けれども吾輩は只其れだけでは・満足が出来ぬのである・何んとなれば人の心といふものは・生れない  
 前(サキ)から已に・其の靈魂即ち「業識」乃至「阿頼耶識」の内に善悪が含蓄されてゐるものだと考いて  
 ゐるからである

昔しから人の心は最初は白い絲の如きもので其れが浮世の風に吹かれて色色に染まり遂に悪性になる  
 のだと言はれてゐるが吾輩は左様には考へて居らぬのである即ち太陽の光は色の無いものであるが・  
 是れをプリスマに掛けて分析すれば大きく別けて七色(ナナイロ)となり細別すれば無数の色になるの  
 である・人の心も其の通り・生れた赤子(アカゴ)のときは其の心は如何にも白絲(シライト)の如く色氣  
 (イロケ)もないが・段段「浮世の風」といふプリスマに由て分析せらるれば無量無数の善悪の色が現は  
 れて來(ク)るのである・言ひかゆれば人の心には善性と悪性との二面が千百萬年の昔しから含まれて  
 ゐて・其の善悪の兩性が浮世の風の吹き具合に由り・善性の方が多く現はれたり或は悪性の方が多く  
 現はれるものと吾輩は思惟してゐるのである

昔し孟子は「人の性は善なり」といひ荀子は「人の性は悪なり」といふたそうだが・是れは「人の性」を或  
 る一方から見たのであるから完全な見方では無いのである

原罪 original sin といふものに就ては基督教徒の間に激烈な争論が繰かへされてゐるが是れは  
 神(ゴット)は造物主であり・そして神の造つたものは悪がなくて・善ばかりである

といふ偏見から湧き出た争論に過ぎぬのである・吾輩は

無からは・なんにも出て來(コ)ない

Aus Nichts wird nichts.



といふ格言を堅く信じてゐるものである。餡粉のない大福餅から、餡粉の出て來(コ)ないのは何人(ナ  
ンピト)でも首肯する所であらう。若し人に善心のみありて悪心が無いとすれば此の世界に悪人のある  
筈はない。悪人のあるのは其の人の心に悪の種(タネ)が潜在してゐたからである。試(ココロ)みに植物  
の種(タネ)を蒔いて見玉へ。生氣のある種は芽を出して來(ク)るが、生氣のない種は決して芽を出さぬ  
ではないか??

又植木屋が樹の枝に土(ツチ)をつけて其の土の乾かぬ様にして置くのを見玉へ二ヶ月も経過すれば其  
の枝から根が出て來(ク)るではないか??根となるべき性(シャウ)が枝の中に存してゐたから。土とい  
ひ濕氣といひ其の他光線といひ氣温といふ種種な因縁に由て根が形をなして現はれたのである。個様  
なことを佛教では因縁生(インネンシャウ)といふてゐる。即ち吾々の考へでは善なる因縁に由り、善性  
が現はれて善人となり、悪なる因縁に由り、悪性が現はれて悪人となるものと考へてゐるのである。此  
の故に吾々は常に悪い因縁に觸れて悪い人となることを豫防せんければならぬと考へてゐるので  
ある。のみならず成るべく善い因縁に觸れて善い人となる様に心がけねばならぬと考へてゐるのであ  
る。蓋し修身といひ修養といふことは個様な心がけのことである。

然らばどんな因縁で善人になり得るかといふに、其れには色色な道がある。則ち或は基督教徒の仲間  
入りバイブル Bibel に示めされた處の心得を一一能く堅く守るのも善人となり得る因縁であらう。或

は佛弟子となつて修多羅・毘奈耶・阿毘達磨(經律論)の三藏經中に示めされてある戒定慧の三學を學修  
するの善人となり得る因縁であらう。

けれども若しも本統の基督教徒となり或は本統の佛教信者とならんとするには兎に角世間を離れた生  
活を・せんければならぬ。従つて吾々の如き俗氣の多い人間では到底左様な淨業は成就し難いのである。  
から先づ以て左様な世間離れた修業をば潔きよく斷念しそして俗世界で爲し得る様な善良な因縁に  
由て善人となるべく考慮した方が利巧な仕方であると考へるのである。然らば、いかにするかといふに  
其れは少々考へて見ねばならぬことである。

抑も西洋人の所謂る神(カミ)即ちゴットなるものは、本統に「有る」ものか、どうか??甚だ疑はしいもの  
なのである。韓圖なども已に之れに疑ひを懷きヘルベルト・スペンセルなども之れに疑ひを掛けたので  
あり、昭和二年の一月出版になつた「科學と宗教との鬭争(ジヨセフ・マツケエフ著・石井重美氏譯)など  
を見れば學者にして神の存在に疑を容れたものが仲仲澤山にある様であるから基督教などは先づ先づ  
見合せにして信じないが安全であらう。

それから佛教も亦考へものだらうと思ふ(恩田重信著既成宗教撲滅論參看)もちろん佛教經典で説く處  
の理窟は古今東西に卓越したもので唐宋元明清を通じての大學者たる朱晦庵でさへも「高遠」なりとい  
ひし程のものだから其れを學び窮めるには總ての俗務や業務を擲つて従事しても一生涯を要するので



ある・吾々には・そんな餘裕がないから佛教も亦當分見合せたが・よからうと思ふのである  
 然らば吾々は何に他よるべきか??曰く四恩を知つて之れに報ゆべきのみ・考へて見玉へ吾々の此の世  
 に出て來た所以を!!又考へて見玉へ吾々が此の世で生を送り得る所以を!!託胎以來・父母から一方な  
 らぬお世話を受けたではないか??そして此の世に出てからも父母の恩はもちろん・一切の同胞からも・  
 亦一切の生物からも無量無数の恩を受けてゐるでは無いか??此の恩を知らぬものは無知盲昧か風癪白  
 痴であらう・苟も普通の教育を受けたものにして此の恩を知らぬものはあるまい  
 已に恩を知る必ず其の恩に報えざるべからず・名づけて報恩行といふ・報恩行は如何に小さな行爲でも  
 其の行爲は自ら善行たるものである・言ひかゆれば報恩の意識なくして爲(ス)る仕事は・たとへ其れが  
 惡事でなくとも・本統の善・即ち絶對の善といはるべき仕事では無いのである  
 たとへば學生が學事にいそしむとせん・其れは固とより善いことには相違ないが心のおき處即ち動機  
 のいかんに因て・絶對の善ともなり又對待の善ともなるのである・若しも其の學事勉勵が名譽慾や金錢  
 慾から餘儀なくされたものならば其の努力は對待的の善であり・若しも  
 是れ父母の恩に報ゆる所以なり  
 との確信の下に爲さるるならば其の勉勵努力は絶對の善行善事となるのである・此の故に  
 孝は萬善の基・百行の本

といはれてゐる・脩身も道德も皆孝心によりて完成されるのである・終りに手嶋塔庵先生の脩身の箴言  
 を左に掲げて參考に供せん曰く

- 一・一切すなほにて
  - 二・柔和で慈悲深く
  - 三・さからひ争はず
  - 四・よしあし辨へて
  - 五・五つの人の道
  - 六・無理せず無理いはず
  - 七・仲よく交はれば
  - 八・家内がうれしがり
  - 九・子たちや孫までも
  - 十・富んで榮えて福太極を見なさいな是れは福の神の申しおきなり
- 手嶋塔庵しるす

〔忍〕 醉ひて筭まく話

俗謠に

お酒のむ人・しんから可愛・のんでくだまきや・尙可愛  
 といふのがある・すいぶん廣く知れ渡つた唄(ウタ)であるが・その唄の文句の中の「くだ」の漢字を知つ  
 てゐる人は恐らくは百人に一人位であらう・吾輩の試(タメ)して見た人の中には・一人も知つた人が居  
 らなかつた・のみならず「くだまく」といふ言葉の意味を判然と知つた人も居らなかつたのである・自分



も無學だが世間も案外に無學であることを知つた・のみならず善く編輯されてゐると思はれた服部字之吉先生の詳解漢和大典にも筵(テイ)(ヒクダ)の文字は出てゐるが筵の文字は出て居らぬ・もちろん筵も筵と同じ意味の文字であるから・どちら用ゐてもよろしいが・筵の字が普通に用ゐられてゐるのである・藤井乙男編諺語大辭典に據れば「犬子集」といふ本には

花見にや・酔ひて筵まく・絲櫻

吉次

といふ俳句が出てゐるそうだ・酔ひて筵まく絲櫻・真に名句の價値があると思ふが・それはそれ・さすが康熙字典だ・筵の字が載せられてゐる・機(ハタ)を織るときは絲を巻く・小竹管が筵であり筵である・絲を其の竹管に巻くとき・一種特異な音(ネ)が出る・其の様に・酒客が酒のんで・グツグツ言ふから「酔ひて筵まく」といふたのである・俗謡に「のんでくだまきや向かあい」とある・酒のんで怒(オコ)る奴(ヤツ)や喧嘩する奴(ヤツ)や乃至不平を愚圖愚圖言ふ奴(ヤツ)には全く困(コ)まらせられるが

目で意中を語り合ふ程に仲の良くなつてゐる男と女とが離れ座敷あたりで満月でも眺めながら月桂冠を傾けて・酔ひが段々廻はり・呂律(ロレツ)が廻はらなくなつた上に・醉眼朦朧・微吟幾齣

・(齣は音シャク・節に同じ)女はじれつたく思ひ・もうおよしなさい

といふあたりの情景は言ふに言はれぬ・旨味(ウマミ)のあるものだが此の男必ずしも性(シャウ)をば失ふて居らぬのである「のんで筵まきや・尙可愛」といふ唄の文句は・此の情景から推考して見なくちや

判るものでない酒は飲んでもよろしい・本性を失ふてはいけない・たとへば莊子といふ本に

醉者之墜車・雖疾不死・其神全也

醉者の車より墜つるや・疾むといへども死せず・其の神・全ければ也

とかいてあつても性氣を失ふ程に飲んでは宜しくない・況んや喧嘩して其の揚句の果(ハテ)

ねぢ合つて・骨皆折らす・舞扇

といふ様な騒ぎを演出するに於てをや「酔ひどれの怪我せぬ」ことは吾輩の實地經驗した所であるが・餘り體裁のよいものではない・俗謡の一節に

酔はして聞きたい事がある

といふのがある・人といふものは元來馬鹿なもので・決して口外せぬと心に誓つたことでも・酔ふと・其の誓ひを裏切り易いものであるから・獨逸の俚諺にも

Bald ist's beim Trunk um Ueberlegung gesehen.

酩酊するや直ぐ反省を覆ひす

といふのがある・反省を失つて・口から出まかせに・なんでもペラペラと饒舌(シヤベ)り出すが普通である・そこで白氏文集にも

龍・眼・示本體・人・醉・顯本心

〔五〕 酔ひて筵まく話



龍は眠りて本體を示めし人は酔ふて本心を顯はす  
とかいてあり・英國の俚諺にも

What soberness conceals drunkenness reveals.

酔ひて本性を顯はす

といふのがある・であるから會社員などは・お花見や觀楓會などに於て・其の本性を見破らるるのである・用心せぬと進級や上進にも影響して馬鹿を見る様なことになるのである・酔ひて筭まく位は愛嬌の様だが・社交上には其れが大へん害をなすので・遂には後悔する様なことになり易のいである・琉球の俚諺にも

酔ひて狂言・醒めて後悔

といふのがあるそうだ・アルコオル性の強い泡盛などを多量に飲めば岐度こんなことになるに相違ない・著者の剛堂も七十五年間に三回醒めて後悔したことがある・然らざれば今の頃は或は大臣の榮職を拜してゐたかも知れん・惜しく一生を送つたのである嗟  
西洋の俚諺に

Viele sinnen den Tag über, wie sie am Abend im Trunk sich vergnügen mögen.

多くの人は夕飯時に如何に飲んで満足しやうかと考ひて日を送る

といふのがある・吾々も實際を言へば此の俚諺の様な氣持で浮か浮か日を送つてゐるのであるが・今はなんと考ひても致し方がない・然し

飲むと食ふとは貧人の忘れ難いこと

Trink' und iss, des Armen nicht vergiss.

であるから・晩酌を樂みに働くのも無理はなからう・但し

Trinke, zu leben; leb' nicht, zu trinken.

生きるために飲め・飲むために生きるな!

といふのがあるから・夕飯時の一酌は翌日の活氣恢復のため・決して惡るいことではない・但だ餘り筭を巻き過ぎぬ様に心がけねばならぬ  
所で

Wer der Neigung nachgiebt, wird ihr Knecht.

性癖に従ふものは性癖の下僕(シモン)となる

とも言はれてゐるから・晩酌も時に或は性癖となつて其のため身を誤ることもなきにあらずである・のみならず・酒代のことを考へると晩酌の一杯も油斷は出來ぬのである・西洋の俚諺に

甘く飲んで・酸く拂ふ



Stiss getrunken, sauer bezahlt.

と5ふのがある・此の俚諺に註釋を加へた詩に面白いものがあるから見せませう Die Sprichwörter der Deutschen von Wilhelm Körte, Leipzig (1861) と5ふ古5俚諺集に出てゐるものである・曰く

(1) „Hol' Wein!“ laut' wohl;

(2) „Schenk' ein!“ laut' bass;

(3) „Trink' aus!“ das beste Wort war das.

(4) „Rechn' auf!“ laut' bö; noch ärger: „Zahle!“

(5) „Rock aus!“ das ärgste ist zumale.

(一)酒・持てこ5 氣持よくさこえます

(二)注(ッ)げ 一層氣持よくさこえます

(三)飲みほせ それは最もよい言葉でありし

(四)勘定せよ 氣持わるくさこえます 拂ひ といはれると 尙苦痛である

(五)着物ぬげ (こふなると)苦痛も最大である

どうです・勘定拂ひが出来なくて・羽織を取られたり袴を取られ・遂には時計や上着まで取られて襦袢一枚でかへる様なことになるのは決して少くない・酒飲みが習癖となると必ずこんなことになる・箠ま

く位は上等なのである

### 〔ひ〕 貧乏と病人の話

耶蘇教徒の用ゐてゐる聖書のどこかに

心の貧しきものは福(サイハヒ)なり

とかいてあつた様に思ふが・吾輩は「心が貧しいばかりでなく・財布まで完全に貧しく且つ乏しいが然し決して福(サイハヒ)でない・のみならず・借金こそはせぬが・交際(ツキアイ)の割前も出しかねて困つてゐるのである・貧乏ほどつらいものは無いと・つくづく金(カネ)が欲しくなつたのである  
或るとき身の上話しを・或る病人に話してきかせたら其の病人

あなた・などは結構です・マア一度病人になつて・ごらんなさへ・入院料は・宅で拂つて呉れますから・濟んでゐますが・明けても暮れても・このベットに寝てゐて・花が咲いても見られませんし・お見まいに來て下さる奥さん方を見ますと・おうらやまして・なりません・若しあなた!!本當にお金にご不自由なら・私と代つて下さへ・病氣程つらいものはございませぬぞ!!あなたなどは・失禮ですけれど・お金の上では・宅などと御一處に願ふことは・乍失禮御無理でしょうが・御宅でも御承知の通り・時々入院したり・轉地したりして・思ふ様に活動も出来ないであります



其上 私が個様に長い病氣で・ここへ来て居りますので・宅の心をも慰めることが出来ませんし・  
従つて子供等の躰(シツケ)も出来ませんし・教育も出来ませんので・其の苦勞が病苦に加算し  
て・どんな滋養を頂いても瘦せるばかりで・ご覧下さへ・骨と皮ばかりになりました・瘦せるのも  
よいですが・熱が出たり・嗽(セキ)でも續きますと・この世は・つくづく・いやになり・そして・あ  
なたの様な・御丈夫の方を拜しますと・おうらやましくて・たまりません  
そう申しては・わるいですが・あなたの御家庭の御經濟は月額百五十圓位で・おありでせう・宅な  
どの・マア半分でございませう 月収から申しましたら・オツらいには相違ないでせうが・お宅へ  
おかけりになればピンピンと丈夫に働いてゐられるお奥さんがお出迎ひして下さるし外(ソト)  
へお出かけになれば・お友達と・ギンブラの結果・大金あたりでもおもしろ・おかしく・召し上がつ  
て・いい氣分でお宅へおかけりになれば何の苦もなく明けの鳥の鳴くまでお休みになる・こんな  
極樂がどこにありませう・勿體ないことです・それでも御異存がありますなら・どうか私と代つ  
て・このベットへ寝て下さい・御入院料は二年でも三年でも失禮ながら御引請け致します・どう  
か代つて下さい

と・眞劍に語つてさかせられたが・實際病人になつたら・貧乏よりはつらいだらうと思ふが・幸いに自分  
は大正十二年の二月の十日の夜の十二時頃から腸インフルエンザで劇熱の症に罹り・人事不省で二三

日病床に臥し家族のものや朋友や知人から莫大にお世話になつたのみで七十六年間一度でも本當の病  
氣に罹つたことがないので・病氣の苦痛を餘り能く知らぬためか・金の無い苦痛は穴端(アナバタ)へ近  
寄つた今日尙犇々(ヒシヒシ)と感じてゐるのであり従つて病氣のことは餘處にして金のことばかり氣  
に掛けてゐるのであるが

あちら・たてれば・こちらが・たたず

とでも天の神様は思ふてゐらるるのか?? 知らん・つらつら世の有様を見るに

福・祿・壽・三拍子揃ふ

といふことは絶対に無いらしいのである・若し然りとすれば吾輩は月収は満點を百として・其の十分の  
一でもよろしい・一家族無病で暮らし・そして死ぬときは腦溢血で二三分間で往生したいと願つてゐる  
のであるが・天の神・言ふことを聞き入れて呉れるや否や  
要するに

健康は萬福の長 であり  
無病は幸福の基 である

が・蓋し病氣といふものは・必ずしも盜汗(ネアセ)が出たり・痰が出たり・そして消化が悪くて頭痛し  
たり・乃至淋病や梅毒で苦しむばかりが病氣ぢやない・佛門の偉人・明治最初の帝大教授・原坦山先生の



申された通り

惑病同源

であるから・この理窟から言ふて見ても病氣は見惑思惑から發生するものといひ得るのであり・従つて

*mens sana in corpore sano (lateinisch)*

*Eine gesunde Seele in einem gesunden Körper. (deutsch)*

*A sound mind in a sound body. (englisch)*

健全なる精神は健全なる身體に宿る

といふことも眞理であり・同時に又

精神の不健全なるときは身體も又不健全となる

といひ得るのであり・更に又

疾病なるものは・すべて精神の不健全に原因する

ともいひ得るのである

此の意味から言へば世間に病人の多いのは國民の精神に不健全なものが多くなつたものと見ることが出来るのである・即ち社會が複雑となるに従ひ・人間の煩悶の度が加はり・それに連れて身體に違和を來たし・爲めに病人が多くなつたのであると言ひ得るのである・即ち原坦山先生の申された通り惑が多

くなつたから病氣が多くなつたのであり・そして人間が全く迷惑せぬ様になつたら此の娑婆に病氣や病人は全く其の跡を絶つに至るであらうと思ふのである

つらつら考ふるに・山に栖む狐や狸乃至藪に棲む雀や鶯などには曾て病氣といふもののあつた試(タメ)しを聞かぬのである・が・是れは如何なる理由であるか??といふに・是れは其の鳥類や獸類に「惑」といふものが無いからである・であらう

故に吾々にも若し完全に「惑」が除き去り得られたならば身體は必ず健全となるに相違ない・吾々の實見する所に依れば

(一)肺病で・とても助からぬと言はれてゐたものが・一切の身邊の苦から解脱し・放浪生活に轉向して・それがため疾病から離れ・三十年も永く生き延びた人もある

(二)又肺病で悩んでゐた人が天理教の教義に感心し一切の慾念を排除し・それによりて健全な人となつた人もある

(三)五十幾歳まで未亡人として家庭のために活動してゐられた婦人が・續け玉に家庭に色々な心配事が起つたため・急に精神に違狀が生じ精神病院に入院させられた人もある

(四)生れ落ちた女の子を貰ひ・蝶よ花よと・楽しく其の子を養育してゐる間は夫婦共に頗る健全であつたが其の娘さんが十六七歳となり・養父母の教えを聞き入れぬ様になつたら・其の頃から先づ



母君が消化不良を患ふる様になり・父君も何んとなく塞ぎ込む様になり・それから後・醫者を屢  
屢迎ひる様になつたのであるが漸くにして娘に配偶者を迎ひ・別に一軒を構ひて・そこに新夫婦  
を暮らさせる様になり・幾らか安心がついて來(ク)るや・いつとなしに老夫婦の健康は恢復した  
のである・是れも實際の話して嘘ではないのである

こんな例は少し注意して世間を觀察すれば幾らも目撃することが出来るのである・精神が迷惑して俗  
に所謂心配する様なことになれば必ず病魔が進入し來るのである・言ひかゆれば  
本當に因果の理窟を聽いて悟り・そして完全に無欲となれば病氣といふものも完全に消滅する  
といふことになるので・あると同時に病氣といふものは

- (一) 飲みたい
  - (二) 食ひたい
  - (三) 儲けたい
  - (四) 立派な人になりたい
  - (五) 立派な家も作つて見たい
- などと色々な慾望を起して・其の慾に支配されるに因りて・生じて來るもので
- (一) 金があるから・どうの

(二) 金がないから・どうの  
なんて・そんなことには少しも關係して居らるのである・むしろ  
金があり過ぎる

- (一) 美味(ウマ)い物を食ふたり
  - (二) 美味しい酒を飲んだり
  - (三) 藝者でもころばしたり
  - (四) 降(クダ)らぬ享樂のために心を勞したり
- などする様になるから・却つて病氣を買ひ込むことになるのであるから・むしろ貧乏世帯を背  
負つて・心・靜かに・其の日・其の日の仕事に従事してゐるに限る・吾輩は常に

金氣・殃(ワザハヒ)をなす  
と唱ひて知己朋友を誡めてゐるのである・苦勞は金持に多くて・貧乏人には安樂が多いのである・古歌  
に

形見(カタミ)こそ・今はあだなれ・なき親の・ゆづりおかれし・貧乏の神  
といふのがある・吾輩が家督相續したのは明治十八年八月五日(吾輩の二十五歳のとき)であつたが・



其の當時の様子は全く此の古歌の通りであつたが貧乏が幸福の種となり・美味しいものも食はず藝者などにも觸れず・専心一意・貧乏神・逐出しに努力したので幸ひに病人にもならなかつたのである

〔も〕 物識(モノシリ)と物臭太郎の話

物識とは博く書物を讀んで色々なことを博く識つてゐることで博學ともいひ又博識ともいふ獨逸語の Gelehrsamkeit 英語の erudition のことである・支那の人名辭書などを開いて見れば博覽強記の語に遭遇することがしばしばある・記憶力が強くて博く書見すれば必ず博學者になり得らるのである・普通に學者といふものはいづれも博覽強記の人のことである・徳川時代の新井白石なども博覽強記といはれた人である・要するに記憶力が鈍(ニブ)くて勉強せぬ人は決して物識といはれる様な人にはなれぬのである

吾輩が十五六歳の頃師事した郷里の先生に高野秀叟(イウソウ)と申された先生がある・其の頃九十歳近くの先生であつた・然も眼は卷を離さず手は絶えず筆を操つてゐられたのである・博學で談話が上手で・御茶の湯のことを聞き尋ねても・插花のことを聞き尋ねても乃至打毬のことや騎射などのことを聞き尋ねても・なんでも知らぬことはなく・直ぐ尋ねたことに就て談話が始まり・そして其の談話から談話の花が咲いて・止(ト)めどがなく・話が續くので・聞いてゐる方で閉口することが度び度びであつた

のだ・吾輩の親父なども・感心して「博學な先生だ」と申して噂さしてゐたのである  
或る日の朝・同門の堀内文次郎氏(後に陸軍中將となり青島役で軍功を揚げた人で堀内信水と號した將軍)が馬具の鐙(アブミ)のことで・質問したら・其の質問に對し・先づ昔しの鐙の形の由來を説明し・そして西洋馬具の鐙の形に論及し

あんな形の鐙では足に力が這入らぬから・腰で馬を使ふことが出来ない・川中島合戦の時の謙信や原大隅守の如き働きを爲(ス)るには・どうしても日本馬具でなければならぬ

と・滔滔解説されて盡きなかつたのである・博學も博識もこまできると全く面白いのである  
現代で吾輩の知つてゐる範圍では理學博士牧野富太郎先生ほどの物識は多くあるまい・もちろん植物の範圍であるが・先生に何か一つ質問するや・それからそれと・止めどなく談話されるので・是れ亦全く面白い先生なのである

所で物識は物識でも・面白くない物識が澤山にゐる・文學博士の森鷗外などが其れである・吾輩は日清戦争の領臺時代・鷗外先生の許で働き寢食を共にしたので鷗外先生の性格を能く洞見し得たのであるが・先生は慥かに博學であつたらう・が然し吾輩は先生の談話に於ては決して其の博學を認めなかつたのである・質問すれば・いつも「有る」とか「無い」とか答ひらるるのみで其れに就て滔滔と解説される様なことは・なかつたのである・従つて博學の先生の様には感じられなかつたのである



其れは兎に角・博學な先生といふものは・洵に得難いもので・慥かに生きた國寶であらう・輕薄な・實力のない・上滑(ウハスベ)りの學者ほど世に毒を流すものはあるまい・僅かに獨逸の憲法論一冊を讀んでそれで憲法學者たるを許す様では・淺薄と評するよりも・危険と言はねばなるまい  
大體から言ふて學者とか博學者とか言はるる人は・皆一風・變つたものであるマルチン・ルウテルも已に

Die Gelehrten, / Die Verkehrten.

學者は偏屈ものだ

と言ふた通り變りものか偏屈ものに相違ない・言ひかゆれば・人情もあり・常識もあつて・人並につき合ひの出来る様な人には學者や博學者は無いと言ふてよろしい・俚諺にも

學者ムシヤ・クシヤ

といふのがある・學者は概して短氣であり・又癩癩もちである・昔し名古屋に中島隆敬と申された・隠れた漢學の先生が居られた・吾輩は此の先生の書齋に通りて親しく「老子の谷神不死の説」といふ奇抜なお説を拜聽したのであるが・此の先生の癩癩は尋常一様の癩癩では無つた其の眼光が已に其の癩癩を表現してゐたのである・初對面の吾輩が傍らに居るにも拘はらず・年老へた・氣の利(キ)かない妻君を頭から扱(コ)き卸して・小言・いはれたのである・が・然し癩癩の無い様な人間には學者もなければ又

成功者もない・偉人は概して短氣なものであり又癩癩氣分に富んだものである・源の頼朝に於て然り織田の信長に於て然りである・であるから・子供を儲けた人は其の子供の氣長か短氣かを察し・若し氣長なものがあるたら・それは精神の遲鈍なものとして後來に餘り多く望みを掛けぬ様にし・若し短氣なものがあるたら血の巡りの良い子供と見て適當に育てるがよろしい・佐久間象山は自分も頗る短氣で有つたが・人に向つて

氣の長い奴(ヤツ)は馬鹿で・役(ヤク)にたたん

と申されたのである・是れは吾輩が實父から聽いた慥かな話である・象山全集に載せてあるか・どうかは知らぬ

西洋の或る書物の中に

Grosse Bücher, grosse Narren.

といふ文句が見えてゐたが・是れは書物を澤山に讀めば・讀むほど大馬鹿になるといふことであらう??  
或は左様かも知れん・又或る書物には

Die Gelehrten sind nicht immer die Klügsten.

學者・必ずしも賢い人ではない

といふ文句が見えてゐた・或は左様かも知れん・大學者は案外に人の善いものであるから往往狡猾な野



郎にだまされて・悪辣な係蹄(ワナ)に掛けらるるのである・學者の悲惨な末路を辿るのは大概此の係蹄に掛つた結果なのである

所で一知半解の學者は兎角術學的態度を示めすもので少しばかり西洋の事でも知つてゐると・直ぐ吾々如き無學者に對し

獨逸の制度は個様個様である とか

亞米利加の制度は個様になつてゐる

などと・彼の國の事を持出して・權威を見せつけるのである・是れ或は

Volle Fässer klingen nicht, leere desto mehr.

充實した器は響かぬが・空虚になれば・それだけよく響く

といはれてゐる所の・其のよく響く人であらうか??本當の物識は決してよく響くものではない・物の道理をよく知らぬものが・物識らしく見せるのである・西洋の俚諺に

Mit gelehrten Worten überredet man Bauern.

學者的言葉を以て農夫を説伏する

といふのがある・が・村夫子は大概此の俚諺の範圍に屬するのである・今の學者は或は此の村夫子の類か??

基督も學者に多く惱まされた

Von der Gelehrten leidet Christus am Meisten.

と言ふが・吾々も學者に惱まされてゐる・文豪レッシングは其の著ナタン・デル・ワイゼの中に

Die kalte Buchgelehrsamkeit, die sich/Mit toten Zeichen ins Gehirn nur drück...

死んだ記號を只腦裡に印刻しただけの冷やかな博覽

といふ文句を書いたといふことであるが・普通の物識の腦裡に貯えられた知識は多くは冷寒なものであらう・従つて今の學者の知識は實用の間に合はぬものが多い・西洋にも

Gelehrter Leute Waren gehen nicht überall.

學びたる人々の品物は一般には役にたたぬ

といふ俚諺がある・或は日本の學者も西洋の學者も同揆であらうか?!のみならず・物識といふものは・人間としても又役にたたぬのが多い様である・文豪レッシングは又

Ich lernte einsehen, die Bücher würden mich wohl gelehrt, aber nimmermehr zu einem Menschen machen.

書物は吾々を能く學者にするだらうが然し人(ヒト)を曾て造らざりしことを知識したと言ふたさうである・西洋にも



物知り・物知らず

と言はるる人が有と見える・いづくも同じ秋の夕暮ではないか嗟  
然し書物も能く讀まず唯・のらくらと・徒らに光陰を送り過ぐす痴漢にも吾々は愛想をつかしてゐる  
のである・個様な人間が所謂る物臭太郎一名懶惰漢なのである・此の懶惰漢即ち物臭太郎なるものは・  
人類の「胡麻の灰」とでも言ふべきもので・天下の寶を浪費してゐる・一種の罪人なのである・粒粒辛苦  
の許(モト)に作り揚げた立派な飯米を無益に消費してゐる惡黨なのである・西洋の或る書物には  
懶惰な人間は糞裡の石も同然である

Ein fauler Mensch ist gleich wie ein Stein, der im Kot liegt. Jesus Sirach, K. 22, V. 1.

とかしてあり又西洋の古い俚諺にも

懶惰な頭と腐敗した蛋子とは品物(シナモノ)は二様だが然し全然同じものである

Ein fauler Kopf, ein faules Ei, // Zwei Dinge, doch ganz einerlei. Alter Spr.

といふのがある・懶惰漢は實際腐つた雞子も同様・持て餘しものである學者ヨハン・グロオブは

Ein fauler schafft nichts und frisst doch in die wette; // Deswegen schadt er mehr, als  
läg' er krank zu bett. Joh. Grob(1678)

懶惰者はなんにも爲さぬ・然し青天下に食ふてゐる・それ故・彼は病氣してベットに居るよりも・

害をなすことが多い

と言ふたのである病人は仕事も爲(シ)ないが・其の代り・飯も食はぬ・然るに懶惰漢は仕事を爲(シ)な  
いで・飯を食ふから社會に害を爲すことが多いといふのである・剴切な警句ではないか??

〔せ〕 戦争か平和かの話

此の一篇は去る昭和六年の暮・彼の上海事件の勃發してとう・とう戦争となり・例の十九路軍の  
蔡將軍が花花しく皇軍に抵抗した當時・起草し且つ印刷に付し友人知己に配つたものである・文  
章の體裁・前文と同様ではないが・上海事件を紀念するため・其のまま掲載することにしたので  
ある

生物の棲息する場所は地球だけで限りがあり其の生物の攝取する食物の分量にも亦限りがあるけれど  
生物の發生には止め度がない・然も生物は生を愛するものである即ち一定の場所を占領し・そして十分  
な食物攝取を要求する所の生存競争 *Struggle for existence; Kampf ums Dasein* といふものは・蓋し  
愛生が原因で起つて來る自然現象である

此の現象は廣い意味での戦争 *War; Krieg* であるが普通に戦争といふのは民族と民族との間に・又  
は國家と國家との間に言ひがかりが起り其の要求や希望に於て中和せざるとき・其の主張の貫徹のた



め・兵器の威力を利用する・それが所謂戦争なのであるが・生物には意志といふものがあつて・生を賭しても其の意志を固守せんとする欲望がある・此の欲望のため生物は又戦争に負けるを好まぬのである

此に於てか兵器の改良が進み遂に飛行機だ・潜水艇だ・煙幕だ・毒瓦斯だ・なんてものが發明されたのである

然らば戦争は自然現象として許すべきものか?といふに・それに就ては意見が色々であるが概して言へばエレミイ・ペンタムの言ふ通り

戦争は大規模の災禍なり

であり・又波斯王ヒイラアライが言ひし如く

戦争以上に悪事はない

のであるから先哲エウリピデスが言ふ通り

戦争はなるべく廻避せんければならぬ

のである・さればにや・いつの世の學者でも「戦争の如き不祥事の起らざらんこと」を希望しないものはないのである

戦争は實際・事實の上から見て眞に恐怖すべきもので・見るに忍びない事件も澤山に現はれ・氣の毒で

同情に耐えない事柄も澤山に起つて来て天災地變以上の慘禍に相違ない・獨逸の詩人フリードリッヒフォン・ロガウは戦争の慘禍を左の如く歌ふておいた曰く

骨髓(ホネミ)を食ひへらす様な悲哀

家財田畑を荒し取去る様な強奪

氣も心も轉倒して仕まう様な悲惨

骨も身も難儀で耐えられぬ様な困苦

あらゆる不正不法を仕向ける暴虐

是等すべては戦争が仕出かした結果だ 云云

實際此の通りであらう・然し實感は實際に際會した人でなければ想像は及ばないのである

支那人は殺されるとき「アイヤー」と叫ぶ

と言ふて話して聽かされても左程に悲哀は感じないが・實地に就て其の「アイヤー」を聽いて見れば・とても想像の及ばない悲哀が催し來るのであるから・單に戦記などを見て・それで戦争の慘禍を想定してはならぬのである・然り實地に就て觀戦した人は餘程・感じの鈍いものでも大概は非戦論者たらざるを得ないのである

我が皇國の軍人の如き仁愛慈悲に富み正義正道を實踐する軍人は他のいづれの國に於ても之を見出す



ことは出来ない・従つて皇軍の到る處にはロガウの歌ふた様な悲惨事は決して見られることが無いが他の國の兵士は少し調子が好轉すると必ず忽ち野蠻性を發揮し先づ第一に婦女を強姦し續いて金銭財寶を強奪し・更に其の家に火を放ち或は手を斬り足を斬り・甚しきは胴體を押切(オシキリ)で眞二つに斬る様な残忍至極な振舞ひをなすのである

先頃共產主義が露帝を「エカテリンブルグ」の土窖内で殺し奉つた有様などは臣子として忍びないことであつた「剛堂をして

尼哥羅斯帝

剛堂逸人

玉歩難前土窖中 千年聖都屬梟雄

正知運去金無色 血染龍鱗袞冕紅

(玉歩は前(スス)み難し土窖の中・千年の聖都は梟雄に屬す・正に知る運去れば金に色なきことを・血は龍鱗(玉體)を染めて袞冕(コンベン・御裝束)紅(クレナヒ)なり)

と歌はしめた事などを搜して見るには及ばない・近く尼港の殘虐を見ても判(ハ)かり更に最近滿洲方面で支那兵が我が鮮人を殘殺した寫眞などを見れば他國人が如何に残忍性に富んでゐるかが想像されるのである

此の如く戦争は残忍性を發揮し・見るに忍びない・耐え難い慘禍を現出するものであるから

### 戦争は最大の悪事である

と言はるるのも實は無理もない事ではあるが然し戦争は之を根絶することが出来るや否や・是れは考ふべき所である

昔しから聖人君子が現出して説いた所は何であるか? 釋迦・孔子・キリストいづれも口を酸くして不戦不爭を説いたではないか? 酒は飲むな!! 邪淫はするな!! 殺生偷盜は善くない事だぞ!! と説いたのは皆不戦不爭を理想としての説法である・氣に入らぬことは我慢せよ!! 足らぬことは忍んで辛抱せよ!! 此の世の不自由は樂園で林檎を喰ふた報えであるぞ!! 辛抱せよ!! 我慢せよ!! やがては天國へ往き得るぞ・極樂淨土へお連れ下さるぞ!! なんのと三十年も五十年も寒暑を厭はず説いたのは何のためか? 戦争絶滅を理想としての努力の發露に外ならぬのである・或る學者は全人類を完全なモラアリツシユ(倫理的)の動物に改造すれば戦争は熄滅して此の娑婆は無争平和な・眞の樂園となるから國際聯盟道德協會を組織するが一番の上策だ・左様すれば第一に軍艦も無用になり・大砲や機關銃は・もちろん無用になり・兵士や巡查を養ふ必要もなくなるに相違ない・ロンドン會議などに代表が酒樽を船に積んで行く必要も・亦もちろん無くなり・従つて毒瓦斯や烟幕などを作る知識も無用となり・ナイトログリセリンやメリニットの様な爆薬を造るための硝酸の需用も無くなり・従つて硝酸を製造する化學的知識や窒素を固定する電氣的知識も無用となつて「ハーバー」や「エチソン」も崇敬するに及ばぬ事となる云云



といふたが個様なことが出来る事なら吾々は勿論雙手を擧げて賛成する所だが・人間は他の動物と類を異にし一種特別な性質を持てゐるから・仲仲平和論者即ちバチフィスト Pazifist の思ふ様に安くは賣つて呉れぬのである

犬や猫は一旦「サカリ」についても交尾すれば・それで青天白日となるが人間は一旦・其の風味の美くしきを知るや二たび三たび之れを追求するの慾念を起すものなるが故に・先づ第一にワイベルクリイグ Weiberkrieg なんてもものも起つて來るのである・即ち人が多くなれば窮窟だから廣濶な亞米利加あたりへ出かけ様とし・衣食に不自由すれば生存のためだと稱し香港やシンガポールあたりまで出かけて大切なもので切賣りする様にならざるを得ぬのである・況んや手輕な〇〇位は朝飯前の仕事で不思議とする事でない・國家としても道理は同じ事である・従つて戦争は・どうしても避けられぬことであるから大哲學者の「イマヌエル・カント」も匙を投げて

人類の現在の開化の程度に於ては・其の開化の程度を向上させるために戦争は缺くべからざる手段であり・方便である

と言ひ又

人類が完全に開化すれば其の時始めて所謂永久平和 Immerwährender Friede も成就するが其の時期はいつだか・神様でなければ判らない

といふたのである・尤もなことぢや

人の智慧といふものは餘程俊鋭であつてもX光線の様に他(ヒト)の腹の内(ナカ)までは見難いのみならず目先にある電氣燈が急速な明滅の連続であるといふことは・もちろん・活動寫眞が状態の迅速なる變化の連続であるといふことさへも認識することが出来ないのである

かくの如く人間は莫迦なものであるから・昆蟲界などによく見る擬態だの・保護色だのといふ様な・假面的の詐偽詐術を随分仕組むものであり・そして其の詐欺詐術に懸る様な尻馬(ヘマ)な目に逢ひ易いのである

見玉へ!! ウイルソンといふ男を!! 彼は人道といふ假面をかぶつて歐洲へ乗り出して主義とか・主張とかを振蒔き・そして各國の代表者が「ウイルソン」に眞似て同じ様な假面をかぶるや・張本の「ウイルソン」は國へ歸つて直ぐ其の假面を脱却したではないか??

平和會議だとか・軍縮會議だとか乃至聯盟の規約なんていふものは皆悉く「ウイルソン」の假面と同じもので・いづれも英米兩國が現在の勢力範圍を維持し・間(マ)がよければ他(ヒト)の領分をも割(サイ)て取らうといふ野心から案出されたものであるから・ウツかり・そんな假面に欺かれてはいけない・然し飼ひ犬にさへ咬まれることがあるから・ウツかり手出しは出來ない・怒つた猫は岐度先づ爪を見せ・怒つた獅子は屹度先づ襟の毛を立てるが・敵を見て叶はぬと思へば襟の毛も縮め・出した爪もかくして



逃げてゆくものである。去れば怒つた獅子や爪を出した猫に向ふときには先づあらかじめ其の野獸や畜生に對抗して勝つだけの用意と覺悟とが無くてはならぬのである。

英米は吾々に對する猫であり獅子である。下手(ヘタ)な眞似すれば忽ち爪で抓(カ)かれ手や足はもちろん・間違へば首まで喰ひ取られる様な事にならんとも限らぬのである。軍備の充實・國民の誠忠は個様な場合の對抗武器である。或る學者は

武力なき處に獨立の國なく

金力なき處に自由の人なし

と常に稱道してゐるが、是れは千古の金言であらう。苟も武力と金力とにして若しも勝算ありと見るならば

帝國主義・よろしくない　とか

尙武主義・打倒すべし

などと言はるとも、そんな事に頓著なく、どしどし進んで戦争を開始するが上策である。蓋し是れに由て生活權も完全に行使することが出來、人生の快樂も自由に享受することが出来るのである。譬喩を卑近に取つて話しても判ることだ即ち店を開いて商賣しても判ることだ。隣家に富豪がゐて

君の店を半分譲つて呉れないか??

といふ様な談判を持たせ

いやなら貸した金を即刻返せ

などと強迫されるのは餘り好い氣持ぢやない。之れに反し廣大な邸宅を構ひて傲然としてゐる富豪の少し左前(ヒダリマヘ)になりかかつたのを見すかし

どうです・あなたのお屋敷は、餘りにお廣いので夏はよろしいが冬は寒い風が遠慮なしに吹いて來るので御屋敷外の私共は寒くて困ります。どうですか・御開放なされて私共に無條件で住居を御許し下さいませんか・然し御都合次第適當な價額でお譲り渡しを願ふても、よろしうございませ

と出かける事が出來たら其の時の氣持はどんなに好いか知れないぢやないか??同じ此の世に七十年暮すなら・富豪に向つて或る事を要請し得る様な生活を仕て見ようぢやないか??

然るに今の日本の對外的狀態は、どうであるか??隣りの富豪から家(イヘ)屋敷の譲り渡し談判を持たせられそうなる形になつてゐるではないか??意氣地の無い話だ・しつかり仕様ぢやないか??

抑も談判といふのは口と口との一種の戦争である。武器を持ての戦争と同様、後方にしつかりした應援團體が無くてはならぬ。團結力に富んだ然も義勇的公憤に緊張した大和民族の應援は日支の談判は申すまでもない。日英の談判にも、日米の談判にも、更に更に必要な應援である。此の意義に於て國民精神



の作興・もとより大切であり軍備の擴張も亦最も必要であるのである。蓋し此の道理を知らぬ馬鹿ものが軍縮論や非戰論的寢語(ネゴト)を繰りかへすのである  
昔し福澤諭吉先生は

戦争は竹の節の様なものだ・竹も節があるので風にもめげず雪にも折れず亭亭として高標してゐるが若し節が無つたら折れずに立てはゐられない・國家も其の通りだ時々戦争がなくては成  
立もせず發達もしない十年おきに一度づつ戦争のあるのがよろしい

と申されたが本當に適切なお話であつた・維新後の日本も十年目毎に戦争があつたので・其のおかげで  
五大強國の班に列し得たのである

然るに歐洲戦争で日獨の争ひもあつたが日本帝國の運命を左右する様な戦争は日露戦争後三十年間一度も起らないのである一部の馬鹿は泰平だと稱し埒なきことに陶醉して餘生を送り或は醉生夢死してゐるかも知れないが・これでは竹の節と節との間・即ちインテルノジウムが餘り長く伸び過ぎて竹幹の弾力が脆弱となり・いつ折れるか知れないと・日夜吾々が心配してゐた矢先き滿蒙のごたごたが起り・そこへ理事會とやらが横合ひから駄辯を挿し挟んで來た上に英國あたりから・埒なき男が飛び出て來たので・是れは一段と面白い事ぢや・世界を向ふに廻はして詩人シルレルが言ふておいた様に

運命がどう逆轉するか判らんが

とにかく死ぬか生きるか・一か八か

勇を鼓して戦つて見るのは今に限る

と思つて喜び勇さんでゐた處・大事を取つての事か??それとも平和病に罹つての事か??愚圖愚圖べつたりに終始しそうな形勢になつて仕まつたのは甚だ遺憾にたえない(昭和六年十二月六日記す)

戦争を説く人は魔國の説教師だ

と或る西洋の半熟牧師は言ふておいたが吾々は哲人韓圖の言葉を借用し今日只今直ちに

未來の戦争の胚芽を含む様な平和條約は締結すべきものにあらず

と言はんと欲するのである・否・否・吾々は古語にある如く

頸を刎(ハネ)られても戦争はやつて見たい

のである・否・否・其の戦争は子供の腕を振る様な支那を相手にしての戦争でなく排日法などを麗麗しく無遠慮に國法中に差し加え飽くまで吾々を穢多扱ひにし限りなき無禮を吾々に浴せかけた紅毛の「ヤンキイ」を相手にして一戦を企圖し・場合に依つては國運を賭して戦つて見たいのである

此の頃或る會館で開催された或る聯盟の演說會に於て或る辯士の演說中に

亞米利加の軍艦の乗組員は酒が飲めたり入れ墨などの出来る「マニラ」あたりへ向つての遠洋航海なれば吾れ勝ちに乗組を希望するが日本との戦争のために出てゆくのだといへば乗組員の少



くも半數は下船するだらう

と申されたといふことであるが多分本當のことであらう  
自分も先年海外へ遊んだとき或る船の船員から同様の談話を聞いた事があるから・事實に相違ないで  
あらう・こんな弱蟲共の乗組んでゐる軍艦なら幾ら來たからとて少しも恐るる處はあるまい・心配は無  
用だ「ヤンキイ」を相手に是非共一戦せねばならぬのである・今日は其の好時機である・今を逸すれば再  
び今日の如き好時機は決して來(コ)ない當路の大官・何が故に躊躇してゐるのか??よし萬が一にも敗  
北せんか上御一人を擁し奉り九千萬の大和民族一人も残らず白骨となれば・それで事は解決するでは  
ないか??吾々は日本特有の武士道に依つて鍛えあげられた大和民族である・一命は鴻毛よりも輕ろし  
と固く信じてゐるものだ・何を苦しんでか「ヤンキイ」に服従し搾取されながら僅かに八十に足らぬ  
壽命を阿容阿容と愛惜する様な・そんな腐つた根性の持主ぢやない・一か八か・ヤンキイを向ふへ廻は  
して戦つて見ようぢやないか??

文豪セキスピヤは其の著書中に戦争の面白味と平和の面白くない様子とを左の如く書いておいた「シ  
ユレエゲル」の譯したのから重譯したもので甚だ不味(マズ)いが讀んで見玉へ曰く

戦争は平和に優(マサ)る・日の夜にまざるが如し

戦争は氣持の好いもので・目の醒めた様である

談話の材料が多くて・色々なニュースが見られる

然るに平和は遲鈍的であり・昏睡的であり

暗愚的であり・懶獸的(ナマケモノ的)であり・そして

髣髴的であり・無感激的である

と歌ふておいたのである・見玉へ文豪セキスピヤでさへ勇壯に歌ふたぢやないか??もちろん是れがセ  
キスピヤの眞意かどうかは知らぬが・兎にかく此の文句は吾々の言はんと欲する所を完全に言ひあら  
はしてある・よく見玉へ平和が續けば人間は大概馬鹿になつて仕まうものだ・南洋島の樹の枝にぶらさ  
がつてゐるナマケモノ Faulstier の如き懶惰な・不活潑な・働らさもせず亂暴も爲(シ)ない様な人間が  
多くなるから・世間は死水の如く・日向水の如く生氣の絶無なものになつて仕まう・故に平和の續くこ  
とは決して祝すべきことでないのみならず・左様な國は大概他國のために吞噬せられて仕まうのであ  
る・英國の大政治家ウイリアム・ピットも亦曾て

戦争には種種の害惡が伴ふてゐるが

然し平和に勝(マサ)つてゐる

何となれば平和には

唯驕傲と尊大と



不正とのみがあるからだ

と言ひ・更に又

戦争をなすべきか

はた吾々は主義を放棄すべきか

二者の一を擇ばねばならぬときは

吾々は其の第一の方を擇ばねばならぬ

と言ふておいたのである

今や吾々はピットの言ふておいた「其の一を擇ばねばならぬ時」に遭遇してゐるではないか?? 即ち

東亞の盟主

たるを理想としてゐる吾々の平素の主義主張を放棄して退嬰自屈に終るべきか?? 是れ豈に吾々の忍び得る所ならんや・吾々は思ふ・多少の犠牲は拂つても今日は主義のため是非とも大々的に戦はねばならぬ時であると個様に思ふてゐるばかりでなく・今日にして若しも「ヤンキイ」や「ジアック」を叩頭陳謝せしめずんば日本は鐵槌(カナヅチ)の川流れ百年たつても浮ぶ時なかるべしと・個様に吾々は思ふてゐる

古語に

半端(ハンバ)な平和よりも

完全な戦争の方が

遙かによろしい

といふのがあり又

血みどろな戦争は

うつくしい勝利を將來する

といふのがある・血みどろな戦争何んぞ驚くに足らんやぢやないか?? 今日の様な平和・何んぞ頼むに足らんやぢやないか?? 又古語に

戦争が熱烈なれば

それだけ早く平和が来る

といふのがある・吾々は思ふ・どうせ攻めるなら・錦州を爆撃するとか・しないとかいふ様な小さな事をせず・直ちに軍艦を派して速かに「パナマ」運河を閉塞せしめ・又直ちに飛行機を飛ばして大々的に馬尼刺を破砕せしめ・爆弾にして若しも餘裕があつたら歸途・其の數個を南京の某處に墜してやり・然る後北平(ペエピン)でも錦州(チンチュウ)でも虐待(イヂ)めてやつたがよからう・と思ふてゐるのである・成る程



戦費のない戦争は

呼吸が止つて窒息する

といふ古諺もあるが然し戦費が豊富にあるからとて戦争は必ず勝つときまつたものぢやあるまい・否・戦費が十分でないから必ず負けるときまつたものでもあるまい・要する所は戦費が一定量あつて且つ戦士にスバルタ人的強勇があればそれでよいのである・吾々日本人は飛行機と共に敵の軍艦に落下し其の軍艦と共に海底の藻屑となるの決心を皆悉く持てゐるが若しも吾輩の觀察に誤謬があつて日本兵士に

死ぬのは御めんだ

といふ支那兵の如く戦地から逃げて歸つて来る様なものがあるならば一刻も早く戦争は之を中止して・其の代りに二千五百年住み馴れた我が此瑞穂の國を全部「ヤンキイ」なり又は「ジャック」に進呈し宜しく御取扱ひなされて下さりませと頼むがよろしい

昔し羅馬の「チツエロ」は

戦時には法律は黙す

といふた・萬國公法なんてものがあつた所で

そんなものは役にたたん

と頑張つたら・それで仕方があるまい・蓋し頑張るも頑張れないのも・力の問題だ・力さへ強ければ法律も味噌も有つたものでない・要は力だ・然し力には色々ある・権力もあれば兵力もある智力もあれば腕力もある・豈に獨り金力のみならんや・ぢやないか??成る程アメリカには金が澤山ある然し金力のみを目安にして物を考へるのは短見だ・見玉へ「バルチック」艦隊を!!インチャラやつと阿弗利加を迂回してやつて来たが・たつた數時間で火の消えた様になつたぢやないか??金があるからとて左程に恐怖するには及ぶまい・もちろん

石橋も叩いて通れ

といふこともあるから・向ふ見ずに威張つてもいけないが・然し黄色だ一寸法師だと侮どられ・輕蔑され・排斥されて乞食扱ひにされたのでは黙(ダマ)つてゐられるものでない・擲(ナ)ぐられたり蹴られたりして尙其の無禮な言動下に餘生を保持してゐるのは全く醉生夢死ぢやないか??生き甲斐のない生活ぢやないか??吾々は俗諺に

苦勞するのは・元より承知・苦勞しがひの・ある様に

といふてあるのを固く信じてゐるものである零下三十度の強寒下に梅干一ツ食つて働くのも決して厭(イト)ひはしない・只働き甲斐さへあればそれでよいのである・否・そればかりぢやない・沙場に骨を曝らしても・獄裡で舌を嚙んでも決して怨まぬばかりぢやない・寧ろ本懐としてゐるものである・要は御